
全知無能 ~ Z e n c h i ・ M u n o ~

太郎鉄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全知無能（Zenchi・Muno）

【Nコード】

N8915A

【作者名】

太郎鉄

【あらすじ】

《全てを知る》能力を持つ《僕》は、持てるチカラの全てを使つて、彼女の運命を変えようとするー。同じ頃、貝原という凄腕の殺し屋が、宿命的な再会を果たしていた…。（個人的にタイトルが寂しかったので、ローマ字を加えましたが、内容に変化はありません）

プロローグ（前書き）

一年前に書いた小説に若干手を加えた作品です。性描写が多い事で、ここに載せるか迷いましたが、当時、僕は18禁という事を意識していなかったなので、公開させて頂く事にしました。ご理解頂けたら幸いです。

プロローグ

この世に生まれ落ちた時、赤子は大体において泣き叫ぶ。歓喜の涙であるかもしれない。あるいは、未だ見ぬ世界に対する畏怖かもしれない。

僕もやはり、泣き叫んだ。もっとも僕の場合、その理由は、人間のそれとは異なっている。徹底的に、完全に、まったくもって、異なっていた。

「終わりにしましょう」

彼女はそうに切り出した。

「何故だい？」

と、僕は聞き返す。

「何故だい？」

と、彼女が復唱する。その復唱には、あからさまな嫌悪が含まれていた。

解りきつた事を聞くな…。そういう意図が込められているんだろう。ところが、僕は解りきっていない。一体、僕の何が不満だというのだ？

そのように彼女に尋ねると、彼女はテーブルに置かれた、血みた
いなワインを一息に飲み干し、疲れた顔をして言った。

「あなたが、私にしている事よ。耐えられないわ。だから、終わ
りにしたいの」

「僕が君にしている事？解らないな、一体僕が君に何をしている
というんだ？」

「ねえ、本気で言ってる？解らない訳ないでしょう。解らないの
は私の方よ。あなたが全然解らないわ。あなたには、私の心が読め
るとも言っの？」

心、あるいは脳と言うべきか。それは言語で構成されている訳で
はない。だからその表現には若干の語弊があつた。しかし、概ね、
彼女の解釈は正しい。

僕には読める。彼女の心に限らず、誰の心であつたとしても。

「だったらどうだっていうんだ。仮に僕が君の心を読めたとして、
その何が僕達を終わらせなければならぬ？」

「冗談に決まっていますでしょう。心が読める人間がいてたまるも
んですか」

確かに僕は、正確には、人間とは言い難い存在かもしれないが、
今の言葉には少々傷ついた。

僕は人間の姿をしているし、声もしている。何より、この世界に
発生してからずっと人間として生きてきたのだ。全否定はあんまり

だ。

「つまりね、心が読めないとすると、あなたは知っていた事になるわ。知っていた上で、私に何らかの目的を持って近付いた事になる。そしてその目的は、嫌がらせとしか思えない」

「君に嫌がらせをしているつもりはないよ。大いなる誤解が生じていると思うんだけど」

彼女の目つきが変わった。ゴキブリを見るような目で僕を見ている。僕は勃起した。

「あなたにその気がないというなら、やっぱり、あなたどこおかしいわよ」

僕がおかしい？僕は彼女にしてきた事を色々思い出してみたが、おかしい事は見当たらなかった。それは僕が彼女を愛する故の事であつたし、当の彼女も、実際それを望んでいたのだ。

彼女が別れを告げる事は最初から知っていた。しかし、何故別れを告げられるのが解らなかったのだ。だからこそ、僕はその別れを回避する為に、最善をつくしてきたつもりでいた。

その僕の行動がおかしいというのなら、僕は一体何の為に彼女を愛してきたというのだ？

「とにかく、これ以上あなたと話す事はないわ。もう、私を苦しめないで」

彼女が席を立った。鞆から財布を取り出して、一万円札をテーブ

ルに置き、バーを出ようとしている。

僕は彼女を止めなければならない。しかし、どんな言葉をかければいいのか解らなかった。

「待つてくれ」

と僕は言った。彼女は振り返り、座っている僕を見た。

血みたいなワインを一口飲む。血みたいな味はしなかった。衝動から言葉が生まれた。

「最後に、セックスしないか？」

彼女は再び僕の元に歩み寄り、僕のワインを手にとって、僕の顔にぶちまけた。バーにいる僅かな客が、僕達に視線を向け始める。

「それであなたと切れるなら、何だっしてやるわ」

テーブルに置かれた一万円札を返して、僕は勘定を払った。髭のマスターが、笑顔で

「ありがとうございます」

と言った。ハンカチで顔を拭い、僕は彼女とバーを出た。

外に出ると夜だった。僕達は大通りまで歩き、手頃なタクシーを拾う。運転手に僕のマンションの住所を告げた。車内を重い沈黙が支配している。僕は何度か彼女を見たが、彼女は目もくれなかった。

仕方ないので、僕は世界と繋がった。

世界と繋がるという表現は、僕が便宜的に使用しているものなので、あまり正確とは言えないかもしれない。かといって、それに《正確な表現》が存在するのかどうか謎ではあるが。

僕の言う世界とは、空間と時間の流れ全体の事を指している。全ての生命は、その流れに沿って生きている。生命については、世界という巨大な川を泳ぐ魚だと理解してほしい。

その川は、極めて規則正しいリズムで流れている。人はしばしば、このリズムを運命と呼ぶ。

生命は、規則正しいリズムの上を泳ぎ、リズムの上で死ぬ。

僕は世界と繋がる事によって、その川を自由に泳ぐ事が出来る。さらに、泳いでいる魚（生命）達の運命を覗く事が可能なのだ。下流（過去）から上流（未来）に至るまで。

順を追って過程を話す。まず、世界との繋がり方だ。これは簡単で、僕が世界と《繋がるうとすれ》ばいい。僕が何処にいようと、それは世界という川の上なのだ。目を閉じ、意識を集中する。息を吸う、吐く。繰り返し吸い、吐く。

やがて僕の息吹きと世界の息吹きは、その境界が曖昧になり、僕は世界となり、世界は僕となる（僕は満たされる）。

こうする事で、僕の体から僕という意識が跳ぶ。肉体をその場所に置き、川を自由に泳げるようになるのだ。

この時、目から見える世界には、無生物がない。生命を有する存在の意識だけが、光、あるいは炎と言うべきか、形容し難い形とな

ってそこら中に点在している。

意識の光には大きさと色があり、基本的に人間以外の意識は小さく薄い色なので、よく目を凝らさないと認識出来ない。

この時点で、僕が移動出来るのは、僕が世界と繋がった瞬間の時間軸にある世界だけだ。

次に、時間の移動について説明する（ところで僕は誰に説明しているのだろう？）。

僕の意識を、誰か他者の意識に重ねる。すると、情景が意識の持ち主の主観視点に切り替わり、その人物（または生物）の生涯が、ビデオテープのように、思うがままに再生可能なのだ。

重なった時間軸から、早送りすれば未来の情景を、巻き戻せば過去の情景を見る事が出来る。

また、意識の持ち主がその時々で何を思い、何を感じたか、それすら感覚として伝わってくる（心を読める）。

早送りや巻き戻しをする際に、停止も可能で、この時、僕がその意識を離れると、そこに広がる世界は、やはり停止した時点の時間軸になる。

そこから意識を乗り替える事で、僕は世界を自由に泳ぎ回る。ただ、世界は空間的にも時間的にもあまりに膨大な為、複数の意識を乗り継いで、現在から離れ過ぎると、帰ってこれなくなる恐れがあった。

僕は常に注意を心がけている。

もう一つ出来る事があるが、それについては後に語る（だから、誰に？）。

彼女の意識に重なり、情景を巻き戻した。僕が彼女に行ったという《耐えられない事》を探る為だ。

僕との出会いから、今日に至るまで。人が定めた時間で言えば三ヶ月程度。

巻き戻し、早送る。

見つからない。

再び巻き戻し、早送った。

やはり見つからない。

どのような場面においても、彼女は僕に対し、憎悪や嫌悪といった負の感情を有していなかった。そこにあるのは、正真正銘の喜びである。

それどころか、別れを告げた今、この瞬間においてさえ、彼女は僕を愛しているのだ。

意味が解らない。何処に僕と別れなければならない理由がある？

僕は彼女と付き合った日に、彼女の生涯を早送り、今日の別れを知った。

それを回避しようと、僕は彼女に尽くしてきた。彼女の過去を探り、彼女が喜ぶであろう事全てをしてきた。

言うまでもなく、僕は彼女を愛している。

過去を変えるのは不可能でも、未来なら何度か変えた事があった。

だから、僕には自信があった。未来を変えようとした――変えられなかった。

僕は知った。

これが挫折。

一話 〈僕の視点〉 彼女の性癖と、サダオについて

彼女は僕より二つ年上の二十九歳で、なかなかのキャリアウーマンだった。

いきつけのバーで飲む、血みたいなワインを好み、幾度となく僕に進めてきたが、血みたいだから、僕は好きになれなかった。

そのワインより遥かに彼女が好んでいたのが、ある特定の種類のセックスだった。

正確に言えば、彼女はセックス自体のエクスタシーよりも、《特定の種類》の部分がもたらす快感を得たかったのだと僕は理解している。

僕は、彼女を愛するが故、試行錯誤を重ね、自ら彼女の理想のセックスを創り出し、与えてきた。

理想のセックスを編み出す為には、彼女の人生を幼少時まで遡る必要があった。

それについて語る前に、七年前の出来事に触れておく。

サダオという人物がいた。

七年前――。

彼女は大学四年生で、就職活動のかたわら、家庭教師のアルバイトをしていた。

その時の生徒が、サダオの十四歳になる娘だったのである。

サダオは広告代理店で働くサラリーマンで、収入もそこそこ、ありふれてこそいたものの、幸せな家庭を築いていた。

一人っ子の娘を溺愛し、教育には特に気を使っていた。

彼女の指導は素晴らしく、娘はどんどん成績を上げていく。

彼女はあつという間にサダオ一家（特に妻）に気に入られ、休日には仕事抜きで食事に招かれるようになっていった。

ある日、彼女は唐突に、一切の前触れもなく、サダオを誘った。

それは夕食が終わり、サダオの妻と娘が、洗い物に席を立った時の事だった。

彼女はサダオの前に立ち、スカートをまくる。下着を着けていなかった。

「何をしているんだ。やめなさい」

そう言ったサダオの視線は、あらわになった彼女の陰毛に向けられていた。

「触りたい？」

と、彼女は問う。

サダオは無言で陰毛を見つめていた。

「触りたいなら、明日家へ来て。ずっと待ってるから」

大学入学と共に地方から上京してきた彼女は、当然一人暮らしである。

この時、彼女は冷笑を浮かべていたが、陰毛しか見ていなかったサダオは、それに気が付く事が出来なかった。

翌日、サダオは彼女のアパートを訪れる。言わずもがな、触りたいが為であった。

束の間の快樂の代償が、永遠の苦痛になる事も知らずに。

それから半年間、彼女とサダオは週に二、三回セックスする関係になった。

サダオは、何故、自分のような年輩のオヤジを、彼女のように若くて容姿も淡麗な女性が誘ったのか、理解出来なかった。

サダオは彼女に尋ねてみる。

「愛しているからに決まってるじゃない」

納得した。サダオは愚かだった。

二人のセックスは、初めのうちは極めてノーマルなものであったが、回数を重ねる事に少しずつ特殊性を帯びていった。

まず、彼女はサダオに、首輪の装着を命じた。サダオは戸惑う。彼女は言う。

「ねえ、私の事、好きじゃないの？」

装着した。サダオは愚かだった。

次に、彼女は手錠でサダオを縛ろうとした。今度も戸惑うサダオに、彼女は言う。好きじゃないの？

好きであつた。すでに妻より彼女を愛していた。縛られた。サダオは愚かだった。

セックスの主導権を彼女が握っていく。

思うがままに腰を動かし、思うがままに絶頂する。サダオが果てると、彼女はサダオの尻を力強く叩くようになっていた。

「誰がイッていって言ったの？」

そのように言われると、再びサダオは強く勃起した。もう戸惑う事はない。サダオはマゾだった。

彼女はサダオを様々な方法でいたぶった。肛門に指を深く入れ、かき混ぜた。絶叫したサダオに、その指を舐めさせた。市販の蠟燭を体中に垂らした。尿を飲ませた。

「豚」

と彼女はサダオを呼ぶ。

「女神」

とサダオは彼女を崇める。

これが彼女の理想のセックスーではなかった。

彼女はサダオをいたぶる際、決まってサダオに自分の幻影を重ねていた。サダオに自分を投影していた。

誰かに、首輪を装着させて欲しかった。手錠で自由を奪って欲しかった。絶頂した自分への罰として、尻を叩かれたかった。肛門に指を入れて、かき混ぜて欲しかった。その指を舐めたかった。蠟燭を体中にかけられたかった。尿を飲まされたかった…。

彼女は人生において、常々そう願ってきた。

発端は、彼女の父にある。

彼女の父は厳格を形にしたような男であった。幼い頃から、彼女の成績や素行には厳しく目を光らせ、自身の教育方針を貫いてきた。

僅かでも、彼女が自分の思惑に背く事があったなら、厳重な制裁を加える。

剣道を嗜んでいた父は、時には竹刀で彼女の体を強く打ち、時には彼女の尻を腫れ上がるまで叩き続けた。

しかしながら、彼女にとって、それは苦痛ではなかった。

初めて制裁を食らったのは、六歳の頃であった。その時、彼女は奇妙な快感にとらわれたのである。

父親の指導の甲斐あって、周囲からの彼女に対する評価は、極めて高いものになっていく。

それでも、その快感を得たいが為に、彼女は、父の前では努めて素行を悪くした。

甘美なる制裁。なぶられる快感。彼女は父親の支配を喜んでいた。中学三年の冬までは…。

街で、父が女子高生と歩いているのを偶然見かけた。尾行した。河川敷に行った。寒い夜―人気はない。

物陰に隠れて、彼女は二人を見る。父が女子高生に金を渡した。一万円札が数枚見えた。その後、父はズボンを下ろし、尻を女子高生に突き付けた。

乾いた音が、河川敷に響いた。幾度も女子高生が、父の尻を平手で打つ。

五分ほど叩き続けると、女子高生がスカートをはいたまま、下着を脱いだ。父は背広、ワイシャツを、凄まじいスピードで脱衣する。

全裸になった父が、女子高生にひざまずき、股間に向けて顔を上げる。

女子高生はスカートをまくり、父の顔面目掛けて、大量の尿を発

射した。父の顔中に尿がかかる。父がそれを飲んだ。

歡喜の表情だった。

女子高生が下着を着けると、父は尿だらけの顔で、

「また頼む」

と言った。女子高生が去った。

川で顔を洗っている全裸の父に、彼女は近付いた。声をかける。

振り返った父は、幽霊でも見たような、恐怖と困惑が入り混じった表情をしていた。

「見たのか？」

彼女が頷くと、父の表情に絶望が加わる。父は財布を取り出し、残りの紙幣全てを彼女に渡した。四万七千円だった。受け取った。

この瞬間、父と娘の関係が終わる。すなわち、支配の関係が終わった。

彼女は、父に代わって自分を支配出来る者を探す。

見つからなかった。

皮肉にも、父の教育により、世間的な評判が過度に高かった彼女は、支配されるどころか、支配する側の人間に近かったのだ。

友人や教師に至るまで、誰もが彼女を慕い、頼ってきた。どのような環境においてもリーダー核であった彼女を、支配出来る者など、

一人もおりはしなかった。

彼女の目にすら、自分を頼る者全てが、自分が統治してやるべき愚民に映る。

彼女は悟る。

私は支配する側の人間なのだ。愚民に支配されて悦に浸るなど以下の外――。

強く在らねばならなかった。

だから、彼女はいたぶる事にした。

最初は中学の女友達。

不良グループに虐められているという相談を受けた。

「もっと強くならなきゃ駄目」

とアドバイスした。痛みに耐える鍛錬と称し、真冬の夜中に、父を見た河川敷に連れ出した。

彼女は女友達を全裸にし、両手両足を縛り上げ、川に落とす。

「冷たい助けて」

と女友達が懇願した。川から引き揚げた。再び落とした。繰り返した。一週間続けた。女友達は自殺した。

彼女は、その時、女友達に自分を投影する事に成功した。

性器が濡れている。自慰を覚えた。

そして、欲望の発散の仕方――自分に見立てて相手をいたぶる事を覚えた。

友人から恋人へ、いたぶる対象は変化していく。容姿端麗の彼女は、どこへ行っても男に声を掛けられた。そして、付き合った誰もが、彼女を頼るようになる。彼女にいたぶられて、喜ぶようになった。

サダオを選んだのは、サダオが、彼女の父親に似ていたからだ。容姿ではなく、娘に対する教育方針が。トップ以外は認めないという姿勢。成績においても、周囲からの人間的な評価においても、暴力による制裁こそしなかったが、サダオは、教育によって、娘を支配していた。

彼女がサダオを誘った目的は二つある。一つは、いつもの通り、いや、父に似ている分、いつも以上にサダオをいたぶり自分を投影する事。

もう一つは、サダオではなく、娘にあった。

就職の内定と卒業を理由に、彼女は家庭教師を辞める事になった。家庭教師としてサダオの家を訪れた最後の日、彼女はサダオの娘に、一本のビデオテープを渡した。

「プレゼントよ」

「何これ？」

「あなたが大人になる為に、必要な物なの。真実が映っているわ。あなたは、これを一人で見なきゃならない。絶対に、目を逸らさないで」

彼女はサダオの娘に、自分を感じていた。投影ではなく、過去の自分を見ているようだったからだ。

ビデオテープには、彼女とサダオの半年間に及ぶ行為の中でも、特にサダオが無様で下劣な本質を露呈している場面を、三時間に編集したものが映っていた。

彼女は、サダオとの行為全てを隠し撮っていた。

二話 へ僕の視点 最後のセックスと、最初の別れ

この後どうなったか、彼女は知らない。就職先も、新しい住所も告げず、アパートを引き払った。サダオとの行為は、彼女にとって一石二鳥であった。自分の欲望が満たせ、過去の自分に等しい、サダオの娘に真実を伝えてやる事が出来たのだ。

彼女は笑う。一人で笑い続けた。人生で最高の至福を感じていた。

僕は知っている。この後、サダオの娘は彼女の言うとおり、ビデオを見た。たった一人で、三時間全て。

現実の父と、テレビの中にいる父が同一人物である事を、娘は即座に信じる事が出来なかった。

家の中にいる父ー娘を支配していた。成績を上げる。六時まで帰宅しろ。髪は染めるな。男をつくるな。友達は選べ。

疎ましく思う事はない。むしろ、それだけ愛されているのだと父に感謝した。支配に感謝していた。

テレビの中の父ー彼女に支配されていた。豚と呼ばれていた。首輪を付けられていた。尻を叩かれていた。尿を飲んでいた。無様で愚かだった。父は豚だった。

豚が彼女の支配を喜んでいる。過去、父であった豚の歓喜ー！。

娘が初めて校内トップの成績をとった時も、豚の誕生日に、小遣いを貯めて買ったネクタイを渡した時も、これ程嬉しそうな顔はし

なかった。

娘の精一杯の努力は、彼女の尿以下だったのである。

「豚のくせに」

口に出すつもりはなかった。無意識に出た。ビデオを二時間ほど見た時に洩れた。

同じ光景が繰り返される。豚の叫びと喘ぎ。彼女の尿。娘は見飽きていた。だが、見るのをやめる事が出来なかった。

三時間が過ぎようとした時、急に彼女がカメラ視線になる。

ベッドの上で目隠しをされ、両手両足を縛られた全裸の豚の上半身に跨り、豚の性器を握りながら、上下に動かしている時の事だ。

「こんな姿を、娘さんに見られたらどうなるかしらね？」

直後、豚は射精した。彼女は精子を両手で受け止め、豚の顔に塗りたくる。

そして彼女は、カメラの前で呟くように言った。

「これが真実よ」

この瞬間、サダオの娘は（彼女の観念から見た）真実に目覚める。

父は豚。私は豚に愛されていた。豚に支配されていたー。

答えが出る。

豚の愛などいらない。支配？虫酸が走ったー！。

サダオの娘の行動はシンプルで簡潔だった。豚に支配される訳にはいかない。よって、豚を殺さなければならない。

包丁を持ち、豚が仕事から帰ってくるのを待つー帰ってきた。

出会い頭に刺そうとする。かわされ、もう一度刺そうとした。豚は豚の抵抗を始めた。母が気付き、止めに入る。

結局、殺せなかった。豚が腕にかすり傷を負っただけだ。

「何故、こんな事を？」
と豚が言う。

「人間だから」
と娘は答え、ビデオテープを投げつけ、家を飛び出した。朝方戻ってきた。豚の姿はない。豚は二度と帰ってこなかった。

僕は我に返る。

世界と繋がったまま、色んな事を思い出すのはあまりよくない。自分を見失ってしまう可能性があるからだ。

彼女は外の景色を眺めていた。夜の闇ー漆黒。街の灯りでは灯しきれない程巨大な黒が、窓の外を流れていく。

黒――彼女の意識の色だった。

結局、彼女が僕に別れを告げた理由など、どこにも見つかりはしなかった。そんなものが存在するはずはない。

僕が彼女にした事――彼女の理想のセックスをした。彼女を縛り上げ、彼女を叩き、尿を飲ませた。

彼女をサダオと呼んでやった。彼女がサダオになる事を望んでいたから。サダオが、彼女の欲望のはけ口として、最も残酷な形で利用されていたから――。

セックスの際、僕は彼女をサダオと呼んだ。

彼女はそのたびに、ゴキブリを見るような目で僕を見る。それと同時に、彼女の欲望は満たされていった。

ゴキブリのような僕に、そのように扱われる事で、彼女はようやく、理想を叶える事が出来たのだ。

ゴキブリを見るような目をしながら、しかし、確実に彼女は喜んでいった。理想を叶える僕という存在を、全力で愛していたのだ。

『あなたは知っていた事になるわ』

気付いた。これはサダオの事だ。

『嫌がらせとしか思えない』

サダオと呼んだ事が？

馬鹿な。君は喜んでいたじゃないか。僕は何だって知っている。今だって、君は僕を愛している。なのに何故、僕と別れるなんて言うんだ？

彼女に言いたかった――言えなかった。

言ったところで、僕的能力を信じてもらえるはずもない。信じてもらえたとしても、その上で僕を愛してくれる自信はなかった。

もうすぐ、僕のマンションに着く。僕と彼女はセックスする。彼女が去る。そして、僕と彼女は会う事も、会話する事も二度となくなる。

避けなければ。彼女を失う訳にはいかない。

どうする？僕に出来る事――世界と繋がり、《あの方法》を実践するか？

駄目だ。時間がない。それに《あの方法》が根本的な解決になるわけでもないだろう。でも、何もしないよりはマシだろうか？

葛藤の末、世界と繋がろうとした。

出来なかった。嫌な予感がする。外を見た。水滴が窓に点々と付着している。

雨が降っていた。僕は絶望した。

理由は解らない。ただ、昔からそうだっただけの事だ。僕の居る場所に雨が降ると、僕は世界と繋がれなくなる。世界が僕を拒む。

それは僕をどうしようもなく孤独な気分にした。雨が憎くて、仕方なかった。

タクシーが僕のマンションに着く頃、雨は土砂降りになっていた。タクシーを降りると、すぐに僕はびしょ濡れになった。

雨に濡れた彼女――官能的だった。僕の勃起はピークを迎える。

ロビーからエレベーターに乗った。七階のボタンを押す。相変わらずの沈黙。僕は考えるのが嫌になった。

僕の部屋に入る。彼女をベッドに押し倒した。服を強引に脱がせた。露わになった彼女の肢体は、やはり濡れていた。

僕は彼女の濡れている部分を全て舐め回した。それは首筋であったり乳房であったりへそであったりした。

舐め終わると、彼女の性器を触った――濡れていた。雨のせいでなかった。

人差し指と中指を性器の中へ――彼女の体が震えた。性器の中を動かした。彼女からため息のようなものが洩れ、やがて喘ぎ声にかわった。激しく指を動かした。彼女は体をくねらせ、喘ぎ声が叫び声に変わった。彼女は絶頂した。

絶頂後、彼女はしばらくベッドの上で息を乱していた。整うと、彼女は僕を押し倒し、服を強引に脱がせた。僕の濡れている部分を

全て舐め回した。それは首筋であったり乳首であったりへそであったりした。

舐め終わると、僕の性器に触れ、口に含んで舐め回した。舐めながら、僕を見た。

ゴキブリを見るような目。

僕の性器は射精する兆候を見せた。彼女は舐めるのを辞め、僕の下半身を跨ぐように立ち上がり、足を九の字に曲げて、腰を下ろし、結合した。そのまま僕の両手を握り締め、激しく腰を動かした。彼女は再び叫んだ。段々と、性器の先端から体中に熱が渡った。その熱が再び性器の先端に集約されると、彼女の中で、僕は果てた。

シャワーを浴びる音――部屋中に響いていた。シャワーが止まった――静まり返る。

バスルームから彼女が出てきた。体を拭き、服を着たあと

「さよなら」

と彼女は言った。

僕はそれには答えず

「髪くらい、乾かしていったらどうだい？」
と言った。

「いいの。まだ、雨上がってないから」

「傘を貸すよ」

「返せないわ」

「それなら、あげるよ」

「ありがとう。でも、大丈夫だから」

礼を言う彼女に、表情は無い。

「さよなら」

もう一度彼女が言う。振り返り、玄関へと歩き出した。

ドアの閉まる音がした。

僕は玄関の方をしばらく見つめていた。さよなら、と口に出してみようかと思っただが、途方もない空しさが込み上げてきたので思いとどまった。

そういえば、今日、一度もキスをしていなかったな、と思った。

未来は変わらない。僕は何も出来なかった。

さよなら、と、心の中で呟いた――すぐ打ち消した。

失いたくない。心の中で叫んだ。

覚悟を決めた。

彼女の運命。僕が変えてみせる。その後で、彼女を取り戻す。

彼女の運命――

彼女は、二日後に死ぬ。

三話 《貝原の視点》 昼前の喫茶店における殺し屋の再会 前編

馬鹿みたいに晴れていた。昨日の土砂降りが嘘のようだ。そろそろ本格的な梅雨の到来というところか。天候の気まぐれさにうんざりする。

腕時計を見た。十時半。今日の仕事は正午からだ。昼間の仕事は珍しい。

今日の仕事場――ここから電車で三十分程の距離。あと一時間は落ち着ける。

俺はメリー・マリーで日課を堪能していた。

メリー・マリーは駅前にある小さな喫茶店だ。何処にでもある喫茶店。カウンターと三つのテーブル席。客の少なさと、テーブル席が全て窓際なのが気に入っていた。

窓から見える風景――道路を走る車。道路に即して生える街路樹。通行人。それら全てを照らす陽光。

日常風景を抽象画にしたような景色だ。眺めると落ち着いた。

アイステイーを飲みながら、景色を眺め、煙草を二本吸う。

この街に住み始めてから、いつのまにか日課になった。今では一日一回、これをやらないと落ち着かない。

一本目の煙草に火を点ける。ニコチンが肺と気分を満たした。幸

先がいいと、俺は思った。

カランカランー扉の開く音がする。いらっしやいませというウエイトレスの声が聞こえた。この時間に、俺以外の客が来る事はあまりない。

「失礼。もしかして、貝原さんじゃありませんか？」

聞き覚えのある声ー振り返った。

黒のコートに茶色いハットを被った男が立っていた。このクソ暑い季節にコート？

皺の数が増えていた。毛という毛ー白くなっていた。

知っている男だった。

「晴雨^{ハレウ}さん、ですか？」

「やはり貝原さんでしたか。いやぁ懐かしい。まだ、私の事を覚えていてくれたんですねえ」

晴雨は笑いながら、俺の対面の席を指差した。

「ここ、よろしいですか？」

「どうぞ」

心中と裏腹な言葉。笑顔のまま、晴雨が座った。

「いやあ、本当に懐かしい。何年ぶりでしょう？」

「晴雨さんがセンターを辞めて以来だから、五年ぶりくらいじゃないですか」

「五年ですか。年を食うといかんですな。時間の感覚がどうも曖昧になる」

ホッホと笑う晴雨。相変わらずだな、と、俺は思った。

「しかし晴雨さん。どうしてこんなところへ？」

「仕事ですよ。下調べといったところですか。これから帰ろうと思ったら、偶然、この席に座っていた貝原さんを見つけた。懐かしさのあまり、声をかけなくなった。それだけです」

俺は偶然について考えてみた。二人の殺し屋が、昼前の喫茶店でばったり出会う偶然とは、どの程度の確率で発生するのか。統計などありはしない。

ただ、かなり可能性が低い事だけは言えた。

偶然と判断するのは早かった。

「偶然」

声に出した。

「ええ、偶然ですよ。ああ、もしかしてこう考えておいでかな？私の今回のターゲットが、貝原さんであると」

笑顔のままで晴雨が言う。神経がささくれ立った。俺を見透かしている。やはり、この男は変わっていない。

笑顔のままで――晴雨は笑顔で人を殺す。

「そうなんですか？」

皮肉を込めて聞き返す。

「そんなわけじゃないじゃないですか」

茶色いハットをテーブルの隅に置き、晴雨がさらに笑った。

「変わりませんねえ、貝原さんは。実に用心深い」

「用心深いわけじゃない。俺は偶然とコーヒーが嫌いなんです」

ホッホ。

「二つとも、私の好物ですな」

「ご注文はお決まりですか？」

ウェイトレスが晴れ雨に注文を取りに来る。黒い髪。ポニーテール。あどけない顔立ち。

「アイスコーヒーをもらえますかな？」

俺を見ながら、晴雨が言った。くだらない。嫌味のつもりか？

「かしこまりました」

頭を下げて、ウエイトレスが下がっていく。晴雨の視線――ウエイトレスに移行していた。

「いい年をしてなんですが、ああゆう娘さんを一度殺してみたいものです」

まるで純朴な少年が、一度でいいから飛行機を操縦してみたいというようなニュアンスだった。やれやれと俺は思う。

晴雨――俺より二回り年上だったはずだ。六十前後といったところか。純朴になるには、年を取りすぎている。

俺は晴雨の言葉を無視して、煙草に火を点けた。

吸い終わる頃、ウエイトレスがアイスコーヒーをトレイに載せてやってきた。晴雨は会釈してそれを受け取る。

「今日は、仕事はお休みですか？」

「いえ、これから仕事です」

「そうでしたか。お時間、大丈夫ですか？」

腕時計――十時四十五分。

「あと、十分くらいは平気です」

嘘が口について出る。晴雨と長いこと話すのは御免だ。

「そうですか。どうです、仕事の調子は？」

「アイステイーをすすりながらの、他愛もない質問。他愛もない――俺達が殺し屋でなかったのなら。」

「最近はやたらと講師の仕事を押し付けられてますよ。センターも、晴雨さんの様に優秀な人材をどんどん失っています。最近では、新人発掘に力を入れすぎているように感じますね。もっとも、量が増えると質の低下は否めませんが」

「ホッホ。噂を耳にしましたよ。貝原さんが担当した新人は、ここごとく不合格の烙印を押されているそうです」

「技量がない連中に任せられる仕事じゃないでしょう。俺は正当な評価を下しているだけです」

「もっともな御意見ですな。相変わらず厳しい人だ」

俺を見る晴雨の目。玩具を見つめる少年の目だった。昔から、この目が苦手だった。

「晴雨さんの方はどうなんです？センターを辞めてから、フリーに転向したと聞きました。さっき下調べと仰っていましたが、一人で仕事をなさってるんですか？」

「いえ、腕のいい探り屋と、要領のいい掃除屋を見つけましてね。彼等と提携しております。ですが、少々トラブルがありまして。」

今回の仕事は探り屋抜きで行っています」

少々のトラブルと言った時、晴雨は実に面白そうな顔をしていた。
どんなトラブルなのか？

聞きたくもなかった。

「それじゃ大変でしょう。センターに戻る気はないんですか？」

戻ってきたとしても、歓迎などする気はないが。

「ありません。センターのシステムは確かに便利です。指定された時間と場所で、ターゲットを殺すだけでいいんですからね。しかし、仕事は選べない。貝原さん、これは私にとって、非常に重大な問題なんです。あなたはご存知のはずだ。私がこの仕事に対して、どのような考えを持っているかをね」

遠回しに愚問と言われたらしい。晴雨の仕事に対する考え？知った事が 知っている筈だ。くそくらえだった。

「探り屋抜きでも、私は自分の仕事を選びたいんです。そして今回の仕事は、充分に選ぶ価値があった。微塵にも、大変などとは思っていませんよ」

「なるほど。納得しました」

どうでもいい。早くこの場を立ち去りたかった。苛つきを抑える為に、俺は煙草に火を点けた。

「そうそう、選ぶ価値と言えば、貝原さん。ここ数日、センター

に変わった依頼が入ってきませんでしたか？」

唐突に思い出したように、晴雨が言った。俺は残りのアイスティーを飲み干した。

「変わった依頼？　どういう風に変った依頼ですか？」

「ターゲットが、人間でないという依頼です」

人間でない？　ペットでも殺せというのか。

「さあ。俺の知る限りではありませんよ。人間でないとは、どういう意味ですか？」

煙を吐き出しながら聞いた。少し、興味が湧いていた。

「神という概念に一番近い存在」

首を傾げる。晴雨、とうとう頭がいかれたか。

いや、そんな事は有り得ない。

晴雨は最初からいかれてる。

煙草を消した。

四話 〈貝原の視点〉 昼前の喫茶店における殺し屋の再会 後編

神という概念に一番近い存在。それについて、晴雨が語った事をまとめる。

五日前、晴雨の事務所に男性の依頼人が訪ねてきた。その男性が、神という概念に一番近い存在を殺してくれという依頼を運んできたらしい。

晴雨は依頼人に、その長つたらしい名の存在が誰で、何処にいるのか、また、依頼人とその存在がどのような関係にあるのか、何故殺さなければならぬかを尋ねたという。

それについて、依頼人は明確な答えを出さなかった。

誰であるかという問いに対して答えはなく、何処にいるかは、解らないから探して欲しい。関係については適切な表現が思い浮かばない。

無茶な依頼だ。探しようがない。

しかし、その依頼人は携えたスーツケースを開け、晴雨に見せる。

現金で一億入っていた。業界で一つの仕事に一億は破格だ。

晴雨は仕事を受け入れるか迷う。依頼の内容にあまりに具体性がないのに、金額だけが突出しているからだった。

どうやって探せばいいのか晴雨が再び尋ねると、依頼人はこう答

える。

『方法は知らない。しかし、関わっている者にしか、その存在は見つけ出せない』

そこまで語ると、晴雨はアイスコーヒーを一気に啜った。ホッホという笑い声――耳障り。

「面白い依頼。それが私の感想でした。受けようと思いましたよ。しかし、例のトラブルもあって、今の仕事が長引いている。探り屋もない。掛け持ちは不可能なので、一週間程待ってくれと言いました。目算では、それ位で今の仕事が終わりますからな。しかし、それでは駄目だと、彼は言ったんです」

「何故です？」

「それが、何故殺すか？の返答に繋がるらしいんですがね。それでは、世界が変質してしまうそうなのです」

どんどん、意味が解らなくなる。俺は投げやりに聞いた。

「変質ですか。どのような変質でしょう？」

「世界が、具体的になくなってしまうそうです」

煙草に火を点ける。吸って吐いた。二口で消した。

「どういう事です？」

「さあ、私にもさっぱりです。しかし、彼の言葉には不思議とリアルティがありました。何だか、すっかり信じてしまったんですよ」

「世界が具体的でなくなる事をですか？」

「ええ」

いかれてる。疑う事なく、晴雨は変わらず狂っていた。

「しかし、世界が具体的でなくなるというのは、いささか表現が抽象的すぎませんか」

「ですから、具体的に知りたく思いました。それで貝原さんにお尋ねした訳ですよ」

「俺に、何を？」

「どうしても一週間後では駄目だということで、仕方なく、断ったんですよ。その代わりに、センターの事を教えました。貝原さんという、有能な殺し屋がいる事も含めて」

舌打ち——辛うじて堪えた。余計な事を。

「彼は答えましたよ。その人物が、関わっているなら訪れるとね」

「それで、さっきの質問をしたわけですか」

「そうです。残念ながら、彼は訪れていないようですが」

晴雨は肩を落とした。確かに残念そうに見えなくもない。しかし、

笑顔は崩していなかった。

「とても光栄な評価を頂けて幸いですかね、センターでは殺し屋の指名は出来ないし、そんな不可能な依頼を受けるとも思えません」

何度目かの皮肉――やはり、口をついて出た。

「当然、それは心得ていますよ。でもね、私には何だか予感があるんです」

俺にもあった。嫌な予感だ。

「貝原さんも、関わっているんじゃないかというね」

「心当たりはありませんが、何故そう思っんです？」

「さつきも言いましたが、貝原さんの嫌いな偶然。

私はこれを好んでいます。

偶然に必然を感じる癖があるんですよ。

運命というものを信じております。

今更言うのも失礼かもしれませんが、我々の間には、過去、偶然によつて発生した浅からぬ縁がある。

そして五日前、私は依頼人に貝原さんの事を伝えた。これも偶然。さらに、どうやら偶然、私は神という概念に一番近い存在に関わっているらしい。その私が、今日、やはり偶然によつて五年ぶり貝原さんに再会した。偶然が連鎖し続けています。もはや、必然と言つていい程に。貝原さんはどう思いますか？」

ふざけた推察と思つた。根拠も論拠も何もない。

俺は関わってなどいない。言い聞かせた。

神がどうだとか、そんなものはどうでもいい。晴雨と関わる事――それを何より避けたかった。

しかし、一つだけ否定出来ない事がある。

俺と晴雨には、確かに浅からぬ縁があった。

「失礼ですが、偶然は単なる偶然に過ぎないと、俺は思っています」

ホッホ。

「はつきり仰ってください。それが貝原さんのいいところだ」

顎髭を撫でる晴雨。俺を品定めしているように見えた。

「晴雨さんは、世界が具体的にになるとはどういう事が、具体的に知りたいと仰いましたね？」

「ええ、言いました」

「その依頼人が言っていた事を真実と前提に置いた上で、先程の話を総合すると、晴雨さんが依頼人の話を聞いた日から、一週間以内、あるいはそれよりも早く、その《神という概念に一番近い存在》を殺さないと世界が具体的になくなる。こういう事ですよね？」

「完璧です」

「とすれば、放っておいても、あと数日の内に世界は具体的でなくなるわけだ」

「その通りです。誰かが、その存在を殺さなかったらね」

「待って見たらいかがです？」

晴雨の笑顔が一瞬消えた。すぐ、元通りになる。

「なるほど。考えつきませんでした。それは確かに有効な手段ですが、世の中の往々の事象がそうであるように、待っているだけでは、何も変わらないと思うのですよ」

「待ってください。晴雨さんの言い方だと、知りたいというより、それを望んでいるように聞こえますが？」

「当然、望んでいますよ」

勘弁してくれ。俺は願った。晴雨が勘弁してくれるわけがないのを承知で。

「とてもロマンチックじゃないですか」

頭を掻いた。痒くもないのに、頭を掻くのは久しぶりだ。

「ですが、晴雨さんはその依頼を受けようと思ったんでしょう？それが世界の変質を防ぐ事に繋がるんでしょうが、晴雨さんがそれを望んでしまったら、本末転倒もいいところだ」

「いえいえ、もしも世界が具体的になくなる事が、私の望む現象

であると確信したら、私は依頼人の方を殺すつもりでいたんですよ」

平然と、笑顔のまま、晴雨は言い放った。そろそろ付き合いきれない　なら、殺してしまえ。

自分の望んだ殺しが出来る事、それが私の理想ですー。

昔、晴雨は俺によく言っていた。晴雨の望む殺しが、どんなものかは知らない。くそくらえの欲望ーそう思っていたただけだ。

「晴雨さんは、どうやら本気でその依頼人の話を信じているようですね」

呆れた顔で言ってやった。

「恥ずかしい話です。しかし貝原さんも彼に会えば信じるだろうと、私は思っています」

自信より確信に近い表情の晴雨。うんざりだった。

腕時計を見た。十一時五分。二十分もふざけた話を聞かされていた事になる。

「すみませんが、そろそろ仕事に向かおうかと思っています」

「ああ、長いことこんな与太話に付き合わせてしまっって申し訳ありませんでした。私はもう少し、ここでゆっくりさせて頂こうと思つので、どうぞ仕事の方へ」

晴雨が入口に向かって、開いた手を向けた。

与太話——こいつは自分の話が与太だと、本当に思っているのか？

考えるのも億劫だった。俺は席を立った。

「貝原さん」

晴雨の声。半ば睨みつけるように、俺は晴雨を見た。

「何ですか？」

「もし、先ほどの話の依頼人がセンターを訪れたら、私にご一報願えませんか」

晴雨が懷から名刺を取り出して、俺に渡してきた。受け取り、眺める。

《カマイタチ・代表取締役——晴雨》と印刷された文字の横に、電話番号が記載されている。

「晴雨さん。」

依頼人の情報なんて俺には入ってきませんよ。ご存知のはずでしょう？ 殺し屋の仕事は殺すだけです。晴雨さんのようにフリーで活躍されている方は別ですが、センターに登録されている我々にそんな網はない。よしんばあったとしても、依頼人のプライバシーは厳守しなければなりません。そんなことは約束出来ない」

ホッホ——瘡に障る笑い声。そろそろ、黙らせなくなった 黙らせる。

「そうですか。残念です。だったらこうしましょう。もし、彼が個人的にあなたを訪ねてくる事があれば、その時、私に教えてください。それなら問題ないでしょう?」

本当に問題ないか?

する意味もない自問自答だった。

適当に相づちを打って、二度と晴雨に会わなければいい。

「解りました。万が一、そのような事があつたら、その時は連絡します」

「ありがとうございます。もし、貝原さんが彼と出会い、その依頼を個人的にでも受ける事があつたら、私にも協力出来る事があると思うんですよ」

有り得ない話――無駄話。何故返答する? 俺は何故、こいつの話に耳を傾ける?

「どんな事です?」

「実は《神という概念に一番近い存在》という者に、心当たりが無くもないんです」

今日一番の笑顔で晴雨が言った。もううんざりだ。

「そうですか」

俺は言って、晴雨に背を向けた。歩き出し、レジで勘定を払う。

その時、煙草を二本以上吸った事に気付いた。

日課――晴雨に奪われた。店を出る前、窓からもう一度外の景色を眺める。

日常風景の抽象画――非日常に変わった気がした。

幸先が悪いな、と、俺は思った。

五話 《貝原の視点》 仕事の始まり。新人との出会い

電車に乗る。今日は日曜――席はガラガラだ。座った。

晴雨の事を考える。何故、奴は俺の前に現れた？

仕事。偶然。奴はそう言った。

本当か嘘か――解らなかった。

ただ、奴が偶然と言った事。それだけが厳然たる事実。

厳然たる事実――俺はそれを信じる事が出来ない。

それが俺の厳然たる事実。用心しろ――俺自身に警鐘を鳴らした。

《神という概念に一番近い存在》の事を考える。

晴雨の前に現れたという依頼人。これは恐らく、実在する。直感がそう言った。

『関わっている者の前に現れる――』

彼はそう言って、晴雨の元を去った。

『貝原さんも関わっているんじゃないか――』

晴雨はそう言った。

俺が何に関わっている？ふざけた話だし、それは事実なのだ。

俺は関わってなどいない。心当たりなど微塵もなかった。

『実は、《神という概念に一番近い存在》という者に、心当たりが無いこともないー』

だから何だ？何故奴は、あたかも《俺が本当に関わっている》ような物言いをする？《その依頼を受ける》ような前提を作る？

くだらない。考えるだけ無駄だ 考えるんだ。

目的の駅に着いた。仕事の時間だ。頭の中から、余分なものを追い出した。

追い出すな

改札を出るとバスロータリーがあった。休日の昼間。家族連れだの、ガキのカップルだのが、それぞれ羽根を伸ばしにいとくと、各々バスを待っている。

そいつらを横目に、電話ボックスを探したーあった。

仕事の時間まで、二十分ある。適当に時間を潰した。

十分前。電話ボックスに入り、センターに電話する。

「…はい」

「貝原だ。阿東を」

「…お待ちください」

保留音——エレクトリカルパレード。人を殺す会社だ。悪趣味な奴が多い。

「お待たせ、貝原さん」

阿東レイカの声がした。俺の上司。

といっても形式上だ。俺が殺し屋で、阿東はセンターの人間。いくら長く勤めようと、殺し屋がセンターの下で働く事には変わらない。

「目的地についた。これから仕事に入る」

「解ったわ。事前確認をお願い」

事前確認——センター規定では、仕事に入る十分前、殺し屋及び一連の殺害に関わる者は、最終確認の意味で、担当者に電話連絡をしなければならない。

「本日の職務は講師。新人の指導、及び任務遂行の補助を行う。
新人の名は桜井隼人。二十七歳。研修成績、A。新人のターゲット、
遠山誠。男性、四十八歳。株式会社アーク副社長。殺害場所、遠山
家。殺害方法、絞殺。撮影はなし。殺害時刻、午後二時。以上」

「問題ないわ。何か質問ある？」

「新人の研修成績がAというのは間違いないな？」

「大丈夫、事実よ。今回の子、期待していいわ」

「この間のゴミみたいな事にならんのなら、成績なんざ、本当はどうでもいいんだがな」

「大丈夫よ。センターも長い歴史があるけど、A評価で研修を終えた人を、私は二人しか知らないもの。そして、その二人は優秀な殺し屋になっているでしょ？」

おだてたつもりか。

阿東の言う二人ー俺と晴雨だった。

「だが、A評価とはいえ、新人に絞殺は酷じゃないか？」

「あら、珍しく優しいじゃない」

「面倒を起こされたくないだけだ」

「素直じゃないわね」

受話器の向こうで、阿東が小さく笑うのが聞こえた。いつもながら、調子が狂う。

「年上をからかうもんじゃない」

「からかってなんかいないわ。率直な感想よ」

「やれやれ」

ため息が出る。

「疲れてるんじゃない？たまには《楽園》でも利用したら？殺し屋割引がきくわよ」

「馬鹿な事を…」

楽園ーセンターが提携しているデリバリーヘルス。利用した事など一度もない。俺には必要なかった。

「まあいい。そろそろ新人と合流する時間だ。行ってくる」

「待つて、貝原さん」

切ろうとする直前だった。なんだ？と尋ねる。

「今晚、時間ないかしら」

「何故だ？」

「ちょっとお洒落なバーを見つけたんだけど、付き合ってもらえない？」

「こういう風の吹き回しだ。あんたみたいな綺麗なお嬢さんが、こんなオヤジを誘うなんて」

「嫌味かしら？貝原さんと私、七つしか離れてないわよ」

七年――大きな差だ。伝えた。

「そんな事ないわ。世間には二十離れたカップルだっているもの」

「やれやれ、何を考えている？」

少し苦笑して言った。

「それに、私年上が好みなのよ」

本当に読めない女。しかし、話していて疎ましく思ふ事はなかった。

「ちよつと相談したい事もあるしね」

どうやら、それが目的らしい。

「解った。あんたにそうまで言われちゃ、断る訳にもいくまい」

「ありがと。待ち合わせ場所は完了報告の時に決めましょう」

「ああ」

「そういえば、今、どこから電話してるの？」

「駅前の電話ボックスだが」

「いい加減、携帯くらい持ったら？」

電話――偶然とコーヒーの次に嫌いだった。わざわざ持ち歩くな
ど考えられない――伝えた。

「道理ね。貝原さんらしいわ」

腕時計を見る。正午まで三分を切っていた。

「さて、そろそろ本当に行かないとな」

「いつてらっしゃい。気をつけてね」

電話を切って、電話ボックスを出た。阿東とはいつも仕事前にこ
んな他愛もない会話をする。

センターの人間は堅物揃いだが、阿東は違った。俺の担当になっ
てから二年程経つが、ずっとこんな調子だった。

悪くない女――阿東に対する俺の印象だ。それ以上でも以下でも
ない。ただ、酒に誘われたのは初めてだ。

相談したい事。

あまりいいニュースが聞けるとも思えないが、晴雨の話よりは、
遥かにマシだろう。

バスロータリーの脇に設置されている簡易喫煙所で、新人を待っ
た。正午丁度が集合時刻。あと、一分を切った。

正午丁度、改札に僅かな人の波が出来る。新人、桜井隼人もその中にいた。

俺の顔写真はセンターから受け取っている筈だ。

桜井は迷う事なく俺に近付いてきた。

茶色で長髪。切れ長の眉毛、二重。中性的な顔立ち。長身で痩せ身。グレーのスーツ。

水商売を思わせる出で立ちだった。

「貝原さんですよね？」

「ああ。桜井隼人だな」

「はい。今日はご指導よろしくお願いします」

言つて、桜井が深く頭を下げた。学生時代、こんな風に律儀な後輩がいたのを思い出す。だが、この仕事に礼儀正しさなど何の役にもたちはしない。

「とりあえず、どこか入ろうか。話はそれからだ」

駅から数分歩いた所に、ファミリーレストランを見つけた。あまり好ましくない場所だが、仕事の時に贅沢は言ってられない。

昼飯時だが、あまり混んでいなかった。

ウエイトレスが俺達を窓際の席に案内する。

座って、外を眺めてみる。車しか見えなかった。

視線を桜井へ。桜井はメニューを広げている。

？

「飯を食うのか？」

聞いた。桜井がキョトンとした顔で俺を見る。

「駄目ですか？」

「構わんが、これから仕事だぞ？緊張してないのか」

悪びれた笑顔の桜井。

「俺、緊張すると腹が減るタイプなんですよ」

桜井は腹をさするジェスチャーをした。

緊張？そんなもの、どこからも読み取れない。

「研修、Aランクだったな」

「はい。お陰様で」

「成績を過信しすぎるなよ」

たしなめるように、俺は言った。

研修――人を殺す為の技術を磨く研修だ。実際に人を殺す事はない。

仕事と研修には、雲泥の差があるという事だ。

六話 〈貝原の視点〉 センターのシステム、桜井の危険性、人を殺す事について

センター。俺の職場。人を殺す事が生業の会社。今年で創立三十年を迎えるらしい。

俺がセンターに殺し屋として登録されたのは二十五の時。十一年前だった。今じゃセンター1の古株だ。

センターのシステムー金を貰って人を殺す。する事はシンプルだ。しかし、過程は少々複雑だった。

センターに依頼する人間は様々だ。一番多いのは、素人には意外に聞こえるらしいが、少し金を持て余している民間人。センターの需要の八割を占める。

その他には政府や裏社会の人間といった、特殊な職業の人間がいる。

仕事柄、大っぴらな広告が出せないため、依頼人達はセンターの情報を独自にどこからか嗅ぎつける。

政府や裏社会には、元々ある程度のパイプがあるものの、民間人は大抵が口コミか紹介だ。それでもセンターに来る人間のほとんどが民間人。

それは、民間人が利益よりも欲望の為に人を殺したいと願っている事に起因する。

依頼人はセンター本社（銀座にある）に向かい、担当者に殺害し

たい人物と理由を告げる。担当者が料金システムを説明し、依頼人が納得すると、そこで交渉成立だ。

料金システムーターゲットによってまちまちだが、一つの仕事の相場は一万〜二千万。オプションに殺害方法の指定と殺害過程の撮影がある。これは片方でもセットでも、十パーセントの割増になる。

撮影した映像は、センターでのみ閲覧可能で、一年間無料で好きな時に見に来る事が出来る。

一つの仕事にかかる時間ー最短で二週間、最長では三ヶ月といったところだ。

一つの仕事の流れーセンターには三種類の職業の人間が登録されている。

探り屋、殺し屋、掃除屋。

担当者は依頼人からターゲットの詳細情報を受け取り、探り屋に渡す。探り屋がターゲットの身辺調査を徹底的に行い、殺害に最も適した時間と場所を割り出す。

つまり、仕事にかかる時間のほとんどはこの身辺調査に当てられる。

探り屋が割り出した殺害時刻と場所を担当者に伝えと、ここから俺達殺し屋の出番になるわけだ。

指定された時間と場所で、速やかにターゲットを殺す。

直接、掃除屋（センター規定では三人一組が原則だ）が死体を片付ける。

彼等掃除屋は死体処理のエキスパートで、たとえそこかしこに血痕や肉片が残っていようと、全ての痕跡をあつという間に消してくれる。

これらの仕事は、大体十分間の間に行われる。殺しに五分、片付けに五分だ。

これ以上時間をかけると、場所によっては部外者に発見されてしまふ可能性がある為だ。

失敗は許されない。だから原則として新人の殺し屋にはベテランの講師が付く事になる。

新人にとって、初仕事は最終試験の意味合いを兼ねており、ここで講師が合格点を出さないと、研修成績の如何を問わず、永久にお払い箱になる。

仕事の報酬――報酬はセンター本社が四割受け取る事を別にすれば、殺し屋が三割、掃除屋が二割、探り屋が一割と、リスクが高い順に高給が支払われる仕組みになっている。

最近では、報酬に納得がいかなかったり、晴雨のように自分で仕事を選びたいといった理由から、続々とフリーの道を歩き始める殺し屋が増え、今現在、センターに登録されている殺し屋は七名にまで減った。

これは全盛期の五分の一の数だ。

フリーの殺し屋はセンターより安く仕事を請け負う。客はほとんどフリーの方に流れていった。

これがセンターの営業不振に繋がり、風俗を提携する惨状になったわけだ。

そもそも、何故風俗なのかと俺は頭をひねったが、スケベな客が多いという以外理由が見つからなかった。

桜井隼人。期待の新人。

こいつが八人目になるかどうかは、俺の採点に懸かっている。

研修成績Aランク。俺と晴雨以外でこの成績を出した者はいない。確かに、期待は出来そうだ。

だが、実際こいつの殺しを見るまでは、それを確信に変える事は出来ない。

「過信なんて、してませんよ」

笑いながら、桜井は言った。

「ならいい。初仕事の前に腹ごしらえが出来る新人を知らなかったただけだ」

「そうですか、すいません。俺、よくずれてるって言われるんで

すよ
」

桜井が照れくさそうに頭を掻いた。その仕草は年齢より若く見える。

「構わんとは言ったが、仕事の直前に飯は控えろ。これは忠告だ」
空きつ腹で仕事をして、吐きまくった新人を俺は何人も見てきた。当然、全員不合格にしてきた。

「はい」

素直に頷く桜井。俺が煙草を口にくわえると、ライターを差し出し、火を点けてきた。

「気が利くな」

「俺、貝原さんの事尊敬してるんですよ」

「何故だ？」

「阿東さんから聞きました。貝原さんは、この業界でも三本の指に入る凄腕の殺し屋だって」

阿東の悪い癖だ。新人に俺の事を伝説のように伝える。

「それは阿東の主観だ。真に受けるな」

「でも、何となく俺にも解りますよ。ただ者じゃないっていうか、そついう空気が貝原さんにはあります」

この男は、俺に媚びでも売っているつもりなのだろうか。

桜井の目を見た。媚びを売るには、真っ直ぐすぎる視線だった。

僅かな混乱――俺の中に芽生え始める。

「俺の事はいい。適当に注文して、仕事の話を始めるぞ」

俺はアイスティー、桜井はコーラを飲んでいた。

コーラか。まるでガキだな。コーヒーが飲めない俺が人の事は言えないが…。

頃合いを見て、俺は切り出した。講師として、桜井に尋ねる。

「それで、どうだ。仕事をする覚悟は出来ているんだろうな？」

人を殺す覚悟の事だ。

桜井はしばらく、コーラを見つめながら黙っていた。何か考え込んでいる様子。

「仕事に覚悟なんているんですかね？」

「何だと？」

「俺にあるのは、どっちかっていうと、興味です。人を殺すのって、どんな気分なんだろう、というような」

桜井の目――相変わらず真っ直ぐだ。

「今日、俺に殺される奴は、誰に、どんな風に怨まれて、どんな気持ちで見ず知らずの俺に殺されるんだろうって」

淡々と、桜井は喋り続ける。

危うい。この男は危うい――直感がそう告げた。

「そう考えたら、なんかワクワクしてきました。この仕事が決まっただけです。貝原さんも、初めての仕事の時はこんな気分だったんですか？」

一瞬だが、何故か桜井の目つきが鋭くなった。

「殺される奴が、必ずしも怨まれている訳じゃない」

はつきりと、俺は言い放つ。

「ターゲットが殺される理由なんぞ、俺達には関係ないし、知る必要もない」

桜井――目が点になっていた。俺は畳みかける。

「新人、一つアドバイスをしておく。殺しに幻想など抱くな」

「幻想？」

「いいか。相手を《殺したい》と思うのが依頼人で、《殺す》の

が俺達だ。殺したいという欲望は、俺達に必要な。必要なのは、相手を《殺す》という行動だけだ。それ以外考えるな」

少しの間沈黙があつた――

「解らない事があるんですけど」

――桜井が破つた。

「俺が、相手を《殺したい》と思おうが、《殺す》と思おうが、相手が死ねば結果は同じですよ。だったら、俺が《殺したい》と思う事の、一体何がいけないんですか？」

質問の姿勢が、教師に解らない事を尋ねる少年と同じだった。煙草を大きく吸つて、灰皿でもみ消す。

「欲望のまま人を殺せば、それはやがて快楽に変わる。人を殺すことになんらかの期待がある奴にはそういう傾向がある。快楽は幻想となつて、いずれお前自身を食らう」

「ごめんなさい。まだ、いまいち、よく解りません」

本当に申し訳なさそうな表情を桜井はしていた。

やれやれと思つたが、解つたふりをされるよりは遥かにマシだ。

俺は一つ前の仕事の話をした。

幻想に食われた男の話だ。

七話 《貝原の視点》 幻想に食われた男の話、桜井の殺意

一ヶ月前――。

俺の仕事は今日と同じように講師だった。新人の名前は忘れた――太って禿げた中年の男だった。

男の研修成績はD。ぎりぎり合格圏内。期待は出来なかった。

研修は確かに厳しい。むしろ、そのたるんだ体でよく乗り切ったと、そっちに拍手を送った。

研修――半年間、地方の、とある山奥にある合宿所で鍛錬を受ける。近接戦闘の技術から、重火器の扱い方まで（実際の仕事で重火器を扱う事はまれだが）。

平均睡眠時間は三時間。飯と睡眠以外は全て鍛錬だ。

指導している教官は引退した殺し屋。何度も殴られ、何度も吐く。その繰り返し。

途中で死ぬ奴もたまにいた。途中で逃げる奴は何人もいた。

それに半年間耐えられた奴――新人の殺し屋になる。

最終日に試験があり、それで評価が決まる。試験は教官との模擬戦闘。ただし、素手でだ。

大抵の奴はぼこぼこに叩きのめされて終わる。

俺は当時の教官を叩きのめした。恐らく晴雨も。そして桜井も。

その新人はぼこぼこにされた口だった。評価Dという事は、手も足も出ずといったところだろう。

それでも半年間耐えた事だけを評価して、俺はその男の講師を勤めた。

その日のターゲットは、クラブのママだった。写真の中のママを見ると、年をくってはいるものの、成熟された色気があった。ただ、それは彼女に、悪女のような印象を植え付ける。

「ターゲット、妻に似ているんです」

中年男の新人が言った。

「俺を捨てて、他の男と子供まで連れて逃げやがった、あの腐った雌豚にね」

憎悪の炎が男の瞳に宿る。

「今日、殺害方法に指定はないんですね。じゃあ、最高に残酷に殺してやりますよ」

この男は、駄目だと思った。

駄目だった。

俺の想像を遥かに超えて。

殺害場所はママが経営しているクラブ。時刻は午前五時半。この時間、ホステス達は全て家路につき、ママは一人で売上を計算している。

クラブは雑居ビルの一階にあり、他の店舗は午前三時まで完全に営業を終了していた。

楽な仕事だった。

雑居ビルの近辺は、朝方、人通りが少ない。男はセンターから支給されたナイフを持っている。

侵入と脱出にさえ少々気をつければ、何の問題もなかった。

問題は、新人の男にあった。

仕事を始める時間になり、俺と男はクラブに向かった。向かう途中、男が呟いた。

「やっと、あいつを殺せる」

あいつー妻のことだろう。ターゲットに妻を重ねていた。

「混同するな。あいつはお前の妻じゃない」

言葉は、届いていなかった。

「殺してやる」

男は走り出し、真っ直ぐにクラブへと向かった。朝焼けが皮肉に男を照らす。

舌打ちして後を追う。クラブの扉を開けて、男が中に入るのが見えた。

直後絶叫が聞こえた。ママの悲鳴だ。クラブの中に入り、扉を閉めた。

男がママを赤いソファに押し倒し、殴り続けていた。殴られる度、ママは声を荒げて叫ぶ。

「よくもよくもよくも」

男がママに、呪詛を吐き出す。ママの顔は腫れ上がり、写真から垣間見えた色気は完全に損なわれていた。

男がナイフを取り出し、ママの腕を刺す。ママが着ていた白の着物――腕の裾から赤が混じり始めている。

ママは泣き叫んだ。

「じわじわなぶり殺してやる」

限界――俺はそう感じた。人通りが少ないとはいえ、これでは誰かに感づかれる恐れがある。

俺は男の顔面を蹴り上げ、ママから引き剥がし、ナイフを奪った。ママの顔に希望が宿る。

助かったー！そう言っているように聞こえた。

俺はママの口を左手で押さえつけ、右手のナイフでママの首筋、頸動脈を切り裂いた。

ママが目を見開く。血が飛沫をあげていた。ママの目が虚ろになり、押さええている口から絞りカスのようなうめき声が洩れた。ママは死んだ。

男を見た。ソファーに座っている。泣いていた。嬉し泣きのように見えた。

「やってやった。やっとやってやった」

焦点の合わない目で、ブツブツそう言い続けていた。

「殺ったのはお前じゃない。行くぞ。行くぞ。誰かに感づかれて
いるかもしれない」

また、言葉が届かない。男は幻想に食われていた。

この幻想を果たす為だけに、あの厳しい研修に耐えたともいう
のか？

迷惑な話だ。ため息がでた。

「悪く思っな、新人」

俺はママにしたのと同じように、男の口を押さえ、首筋を切り裂いた。男はそのまま表情を変えずに死んでいった。

外へ出ると、入れ違いに掃除屋が来ていた。

「悲鳴が聞こえましたが、大丈夫なんですか？」

「多分な。死体が一個増えた。手間だが、よろしく頼む」

「手当はどちらに請求しましょう？」

「センターに言ってくれ。払わんと言うのなら、俺の給料から割やる」

「解りました。お疲れ様です」

そそくさと掃除屋達がクラブの中に入っていく。その姿はどこにでもいる清掃員と変わらない。

俺は歩き出し、新人の男について考えた。ターゲットを恨みのあふる人間に見立て殺す。現実を幻想が浸食する。その結果がこれだ。

幻想に食われる者の末路。無様で愚かしい。

足を引っ張られた事に苛ついた。

桜井が腹を抱えて笑っていた。

「何が可笑しい？」

「だって、そんな間抜けがいるなんて、貝原さんの言うことじやなきゃ、とても信じられませんよ」

笑うのをやめる気配がない。うるさかった。

「うるさい」

声に出した。それでもやめなかった。

「ごめんなさい、でも、もうちょっと、もうちょっとだけ待ってください」

あははははははははははははははは。

笑い声が瘡に障ってきた。一日で二度も他人の笑い声に苛ついている。

二度も？

その時、鳥肌が立った。

危うい――俺が桜井に抱いた直感の正体。

晴雨に似ているからだ。

幻想に食われる事なく、逆に自身の幻想を食らう男。

こいつは、一体何者だ？

笑い声がようやくやんだ。

「すいません。もう大丈夫です」

掌を横にして、顔の前に掲げた後、桜井はコーラのストローをくわえた。

「次にそんなふざけた笑い声を出したら、俺がお前を殺す。いいな？」

本気で言っていた。桜井がストローの吸引を中断する。

我ながら大人気ない。思ったが、言わずにはいられなかった。本当にそれを言いたい相手は、その男じゃないだろう。

空気が変わった。俺の言葉を受けて、桜井の表情がさっきまでとは別のものになる。

俺を睨みつけているわけでも、顔をしかめているわけでもないが、確かに、桜井の表情にはそれがあった。

殺意。怨みや憎しみといった感情を上回った純粋な殺意。若さ故に洗練されたものではないが、しかし、確実にそれはあった。

殺し屋の表情だった。

この男は危うい。それは変わらなかった。だが、道を誤らなければ大物になる。

「なかなかいいものを持っているな。殺れるものなら殺ってみろ……。そう言いたげじゃないか」

笑いながら、俺は煙草に火を点けた。今度は、桜井がライターを差し出してくる事はなかった。

桜井の表情が元に戻った。

「そんな、俺が貝原さんに叶うわけじゃないですか。すいません、さっきは調子に乗りました」

「まあ、解れば構わんさ。それに、今の顔はなかなか良かった。期待してるぞ、新人」

新人を褒めたのは初めてだ。しかし、実際、俺が新人だった頃はこんな表情は出来なかった。人を殺す事に戸惑いがあった時代 戸惑い？違う。あなたが抱いていたのはそんなものじゃない。懐かしかった。

「ご期待に添えるよう、善処します」

桜井はぺこりと頭を下げる。そして残りのコーラを飲み干した。やはり、どこから見てもまだガキだ。

俺の期待は何ら桜井のプレッシャーにはなっていないようだった。稀にいる、天然素材の殺し屋。

もっとも、天然素材は一步道を間違えるとただの殺人鬼にもなりかねない。仕事抜きの殺しをやりかねないのだ。

晴雨のよう。

「さて、そろそろ行くか。お前さんの初仕事だ」

「任せてください。貝原さんに満点をつけさせて見せますよ」

「俺の採点は厳しい。せいぜい、奮闘するんだな」

八話 〈貝原の視点〉 桜井の殺し、桜井の幻想

本日のターゲット、遠山誠の家に向かう。周囲は閑静な高級住宅街――人気はあまりない。

馬鹿みたいにデカイ家が立ち並んでいた。ガキの頃、こういう家に住んでみたいと、本気で思っていた。そうだ。原点から振り返れ。

今じゃ、狭い家で充分だ。寝るしかする事のない家に、広さなんぞ必要ない。

馬鹿デカイ家と、さらに馬鹿デカイ家の間に挟まれて、遠山誠の家があった。

遠山誠――株式会社アーク副社長。アークは確かコンピュータ関連の会社だ。年商は百億に届きそうなところ。システム開発がどうたらという備考が探り屋からの調査報告書にあった。

家族構成――妻と高校生になる娘がいる。妻は一週間前から海外旅行に出掛け、娘は高校の修学旅行に行っている。

機会としては絶好だろう。今、この家には遠山誠一人しかいない。

誰に、どんな風に怨まれて――。

さっきの桜井の言葉。依頼人の情報など俺達にはない。知る必要もない。

もつとも今回のように金持ちの民間人がターゲットの場合、大抵このように夫か妻が長期の旅行に行っている場合が多い。

言うまでもなく、恐らく依頼人は遠山の妻だ。旦那に死んで欲しい理由が出来たのだろう。

妻は専業主婦だ。家計は全て妻が握っている。

皮肉な話だ。遠山は自分の稼いだ金で殺される。

やれやれ、俺とした事が何を考えている？桜井に毒されているとでもいうのか？

頭を振った。

くだらない事を考えるな。殺し屋の仕事は殺すのみ。

遠山の家は、そこそこのデカさだが、周辺の家に比べるとセキユリティーが甘い。

玄関までは直に行けるし、防犯カメラも形だけだ。実際には機能していない。もちろん、探り屋の情報だ。

しかし、個人宅での殺し、しかも絞殺となると難度は高い。部屋を荒らさず、かつ迅速に殺さなければならないのだ。

普通なら新人に任せられる仕事じゃないが、センターもそれだけ桜井に期待しているという事だろう。

遠山家の前に俺と桜井は立っている。時刻は一時五十八分。日差

しが最高潮に強まって、空気も湿り気を増していく。

二時ジャスト。うろちょろしてるわけにもいかない。桜井と目を合わせ、頷いた。

行くぞ、の合図だった。

遠山家の、やはり無駄に大きな茶褐色の扉の前まで、桜井が歩いた。周囲に気を配う仕草が見えた。

ここまで――減点なし。

俺は桜井の後に続いた。

桜井が用意してきた革手袋をはめ、ブザーを押す。指紋を気にしている。減点なし。

「どなたですか」

遠山の声――気だるそうだ。

「**運送です。お届け物をお持ちしました」

桜井の装い――月並み。しかし、特に問題はない。減点なし。

扉の奥から、慌ただしい足音が聞こえた。

やがて扉が開き始める。

遠山が顔を出してきた。

隙間から見える遠山――ボサボサの髪。ランニングシャツ。トラックス。

死に装束にするには、少々美意識に欠けている。

「ご苦労様で……」

す、を言う前に、桜井が扉の隙間から遠山の首を右手で掴む。

そのまま押し込むように中へ――俺も続いた。

遠山家の玄関。大理石の廊下が見えた。当然だが、中も広い。

遠山は桜井の右腕を両手で掴み、振りほどこうと足をばたつかせていた。

その音を気遣ってか、桜井は遠山の首を締めたまま、その体を持ち上げる。

なかなかの腕力。冷静な判断。減点なし。

玄関脇の巨大なシューズボックスに遠山を押し付けると、左の拳で二発、桜井が腹に叩き込む。

血が口からこぼれた。パンチ力も目を見張る。減点なし。

さらにもう一発。

遠山の顔――血の気が引いていた。

遠山の表情――恐怖で引きつっていた。

桜井の顔――血色が良かった。

桜井の表情――歡喜に溢れていた。

殺しに幻想を抱いている。俺の感想だ。ここまでは新人と思えないほど手際がよかった。もし、ここで先刻俺に見せた表情をしていれば満点だったのだが…。

この、得体の知れない幻想を砕く事。桜井の課題になるだろう。

遠山はもはや抵抗する氣力を無くし、口から血液混じりの泡を吹いていた。

桜井は両手で遠山の首を締める。強く、強く。

遠山の目――飛び出しそうだ。さらに強く、桜井が締めた。

《ホッホ》

晴雨の声が聞こえた。桜井からだ。

幻聴だ。桜井は声など出していない。

幻聴 予兆だ？

勘弁してくれ、と、俺は思った。

九話 《僕の視点》彼女と話す方法、ジャングルジムから墮ちる少年

眠れないまま、朝が来るのを待っていた。いや、雨が止むのを待っていた。

彼女のいない部屋。無意味に広い空間に、小さなテーブルと、ベッドと、テレビと、冷蔵庫があった。

ベッドに寝ころんでいた。彼女の匂いが、僅かに残っている。

やがて、朝が来た。

午前七時。外は明るくなっていた。雨は止んでいる。

よかった、と、僕は思う。

今日において、少なくとも世界だけは僕を受け入れてくれたのだ。

携帯電話を持って、ベランダに出る。朝の香りがした。

彼女の番号にかける。

十コール出なかった。

二十コール目で切った。出ない事は解っていた。

世界と繋がって、彼女を探す。すぐに見つかった。それは携帯のメモリーを探すのと同じくらいの手間なのだ。

現在の彼女。シャワーを浴びている。少し巻き戻した。部屋で服を脱いでいる。

ベッドに置いてある携帯電話が鳴った。僕からの着信だ。

ディスプレイに映った僕の名前を、彼女はじいっと見つめていた。

愛しい。

僕の事をそう思っていた。

我に返った。

やはり彼女は僕を愛している。一晚経っても、それは変わらなかった。今はそれでよしとしよう。

これから僕は彼女を救う為に、大きな困難を乗り越えなければならぬ。

彼女の（不可解ではあるにせよ）愛に、少しくらい縋る権利はあるだろう。

彼女と出会う以前の僕は一人だった。繋がりとは世界としかなかった。それで充分だった。

彼女と出会ってから僕は二人だった。彼女と繋がっていた。世界すら彼女に及ばなかった。彼女を愛していた。

今日の僕は一人だった。世界と繋がっても、充分じゃなかった。彼女が足りなかった。孤独だった。

彼女に側にいて欲しいー願望。

叶う事がないと解りきっているから、願いはより強くなる。

せめて、彼女の声が聞きたかった。彼女と話したかった。

ベランダから、眼下に広がる景色を眺める。マンションの真下に児童公園。児童公園を囲むように住宅街がある。住宅街の遥か先に高層ビルの群れが見えた。

そういえば、以前、児童公園で暇潰しに世界と繋がった時、ジャングルジムで遊んでいる少年の運命を覗いた。

真っ白な意識の光。子供の意識は大抵白い。

確か、彼は今日五歳になる。五歳になった彼は、やはりジャングルジムで遊び、ジャングルジムから墜ちて死ぬ。

彼女と話したい。ジャングルジムから墜ちて死ぬ少年。彼女と話したい。

何かが繋がった。

朝食にスクランブルエッグを作る。彼女の得意料理だった。

食べた。彼女の味には遠く及ばなかった。

もし、上手く彼女と話せたら、それは僅かだが彼女の運命を変えた事になる。

彼女は僕と別れてから死ぬまで（たった二日間ではあるが）二度と僕に会わないし、電話にも出なかったのだ。

それはつまり、彼女を救える可能性が増えるという事だ。

彼女を救うためにこれから僕が実践しようとしている《あの方法》。それは様々な要素が、上手く僕の思い通りに集約されないと、成功しない方法だった。

些細な事でも、成功確率を上げられるなら、僕は何でもする。

何より、僕の欲望がそうしたいと言っているのだ。

少年が死ぬのは午後一時。それまで何をしようか。

《あの方法》の第一段階を実践した。一気に最終段階までやってしまう事も不可能ではないが、他の要素の確認もあり、そう安易に事を急いでは、失敗の種になりかねない。

十二時半に児童公園へ向かう。少年と父親がいた。僕はベンチに座って彼等を見ている。

そこには解りやすい幸せがあった。

解りやすい幸せ——平凡な幸せ。

彼女と僕に子供がいたとして、やはり、何らかの形で子供が死ぬとしたら、僕は彼女と同様に、救おうとするのだろうか？

答えが出るはずも、考える意味もなかった。

少年が父親と遊んでいた。ヒーローごっこ。少年はテレビのヒーローになりきって、父を悪の怪獣に見立て、闘っていた。

何故か、彼女とサダオの関係を思い出す。

徐々に、父親の顔色が悪くなる。腹を押さえ始めた。

昨晚、上司と飲み過ぎて、腹を下したのだ。公衆便所に向かう。排泄物が飛び散っていた。

父親は少年に、すぐ戻るからちよつと一人で遊んでなさいと言って公園を去る。家までは三分かからない距離だ。

少年がジャングルジムに登った。十二時五十七分だった。

「誤って転落してしまったみたいなんですよ」

救急隊員に僕は言った。

少年は死んだ魚みたいな目をしている。正確には、死んだ人間の目だ。

少年は救急車に乗せられ、両親も同乗した。

少年が転落してすぐに、僕は救急車を呼んだ。父親と母親は、救

急車とほとんど同時にやってきた。

父親――茫然自失だった。

母親――訳も解らず泣いていた。

少年を驚かせようと、父親が遊んでいる内に母親が買ってきたバースデーケーキ。

地面に落ちて潰れていた。

救急隊員に名前と電話番号を聞かれる。少年の生死がはっきりしたら、一応連絡を入れますと言われた。

僕は名前を名乗って、彼女の携帯番号を教えた。

彼女の運命――少しは変わっただろうか？

世界と繋がって、確認しようか迷った。出来なかった。

変わっていなかったらどうしようという不安。彼女と会った以前の僕にはなかったもの。

人はこのようにして弱くなる。また一歩、人間に近付いた気がした。嬉しくも何ともなかった。

結果はどのみち、今日中には解るだろう。《あの方法》を第二段階に移行させるのはそれからだ。

それまでの時間、どのように過ごすか。

彷徨うことにした。どうせ、これからほぼ二日間、嫌という程彷徨うのだ。そう考えたら、彷徨う事も悪くないように思えた。

彼女との思い出の場所を彷徨った。

初デートで行ったフランス料理屋で昼食を採り、初めて彼女とキスをした公園で一息つく。

彼女にとつての理想のセックスを繰り返した彼女のマンションの下で佇み、いきつけのバーへ向かった。

そのように六時間ほど彷徨った後、携帯が鳴った。バーへ入ろうとした時の事だ。

ディスプレイには、彼女の名前が表示されていた。

「もしもし」

彼女は無言だった。しかし、息遣いは確かに聞こえる。

「もしもし?」

もう一度言った。

「ごういつの、やめてくれないかしら」

彼女の声が聞こえた。

満たされていく僕の気持ち。癒されていく僕の孤独。

胸が高鳴る。

運命――少し変わった。

「どういふのだろう？」

高揚していく気持ちを抑えながら、冷静に聞いた。もちろん、彼女が言いたい事は解っている。

「見ず知らずの男の子の死を、回りくどい方法で私に聞かせる事よ。一体、何がしたいのかしら」

「君の声が聞きたかったんだ。君は電話に出てくれないし、こうでもないしと連絡の取りようがないだろう」

「そんな事の為に、男の子を殺したの？」

「人聞きが悪いな。あれは事故だよ」

「あなた、《こうでもしないと》って言ったわ。まるで男の子が死ぬ事を知っていたみたいじゃない」

「偶然さ。偶然少年の死に立ち会って、偶然この方法を思いついた」

半分本当で半分嘘だ。

嘘――偶然ではなく、僕の意志で立ち会った。必然だ。

本当——この方法を思いついたのは偶然だった。

「そんな事はどうでもいいんだ。今の僕に大事なものは、君とこうして話せる事なんだから」

「ねえ、今更私と話してどうしたいっていうの？私達はもう終わったの。こんな会話に何の意味もないでしょう」

「意味はあるさ」

「どんな？」

「君には解らない。僕にしか解らない。けれど、それでも確かに意味は存在する」

「禅問答でもしたいっていうわけ？解りたくもないわ」

「いいんだ。解る時が、きつと来る」

「楽観的な観測ね。あなたらしいわ」

「もう一度、君に会いたい」

「何故？」

「君を愛しているから」

「私はもう愛してないわ」

「嘘だ」

嘘だった。知ってはいたけど、胸が痛かった。

「何を根拠にそう言えるの？」

「僕は何でも知っているから」

答えながらまずいと思った。どうやら、僕は少し自棄になっている。

「普通、そういうのを根拠とは言わないわね」

「だけど、僕が何でも知っている事を、君は知っているだろう。それが根拠になる」

彼女が黙る。恐らくサダオの事を思い出しているんだろう。何故僕がサダオの事を知っていたのか。彼女の疑問。解かれる事の無いはずの謎。

このままだと、僕が喋ってしまいそうだ。

「聞きたい事がある。何故僕と別れたんだ？」

僕の疑問――口をついて出た。

「何でも知っているんじゃないのかしら？」

痛いところを突かれた。しかし、僕も怯まない。

「だからこそ聞いてるんだ」

「あなたが、理由は知らないけれど、手の込んだ嫌がらせをするからよ」

「それは昨日聞いたよ。それが嘘だっという事も知ってる」

「…もしかしたら」

少しの間があった。

「あなた、本当に何でも知っているのかもしれないわね」

意外な言葉だった。僕の事を認めてくれたのだろうか。真実を話す気になってくれたのだろうか。

「何でも知っているよ」

僕は答えた。

「けど、何にも解ってないわ」

彼女が答えた。

何にも解っていない？

「どういう、事だろう？」

「その通りの意味よ。とにかく、あなたが私を愛しているというのなら、これ以上私と関わるとしないで。あなたは私の事を何でも

知っているかもしれないけれど、少なくとも、私はあなたより、私の事を解ってる。それが答えよ」

ますます解らなくなってしまった。僕にとって、これ以上冷徹な言葉はない。

「答えになっていない。納得が出来ない」

駄々をこねる事しか出来ない、無力さを呪った。

「もう、切るわ」

「待ってくれ。解った。答えは自分で探す。そして、必ず君を取り戻す」

彼女にというより、僕自身に誓った。

「君を救ってみせる」

彼女に誓った。通話はそこで断たれた。

十話 〈僕の視点〉デリバリーヘルス嬢に対する僕の驚愕

バーで血みたいなワインを一杯飲んだ。髭のマスターが笑顔で「今日はお一人ですか？」

と聞いてきた。無視した。余計なお世話だった。

バーを出る。八時を少し過ぎていた。安い居酒屋で飲み直す事にする。

チェーン店の居酒屋――喧騒。狂騒と言っても差し支えないだろう。十人程で男女の学生達がコンパをしていた。

「飲んで、飲んで飲んで、飲んで飲んで飲んで飲んで飲んでニヤンニヤン！」

「ふゝたり二人でのーむーいつきをセックスいつきと申しますゝ！」

「ユミがのむゝぞユミがのむゝぞユミがのむゝうぞゝ、さゝん秒でのーむぞーさん！にい！いち！…早すぎて、見えなゝい！もう一杯！もう一杯！」

思わず、うるさいと怒鳴る。

目つきの悪い学生が絡んできた。殴った。他の学生が止めに入る。さらに他の学生に胸倉を掴まれ殴られた。店員が割って入ってきた。やめてください警察を呼びますよ。

学生がやめた。僕は居酒屋を出た。

何人かの学生が僕を追ってくる。路地裏に連れ込まれ、袋叩きにされた。顔が腫れて、鼻血が出た。

学生達が満足そうに去っていく。僕は地べたに転がり、一人取り残された。

彼女の運命を変えるため、そして、僕の孤独を癒すために、彼女と話した――。

彼女の運命が変わり始め、僕の孤独が増した。

プラスマイナスゼロだった。そう思わないとやっていけない。

『あなたが私を愛しているというのなら、これ以上私と関わろうとしないで』

彼女の言葉が頭の中をぐるぐる回る。

世界と繋がらなくとも、これが彼女の本心である事はなんとなく解った。

僕の解釈で訳す。

彼女は、《僕を愛しているからこそ》僕の元を去った。

あるいは、それが彼女の僕に対する愛し方なのかもしれない。

しかし、どういった意図でそういう愛し方が発生したのか、それ

が解らない。

探らなければならない。

『何にも解ってないわ』

彼女の言つとおりだ。

彼女が《僕を愛しているからこそ》僕から去つたのなら、彼女を救つたところで、僕の元に帰ってくる可能性は極めて低いのではないか。

新しい疑問。絶望的な疑問。

追い討ちをかけるように雨が降ってくる。一人きりの路地裏で、僕は少しだけ泣いた。

泣いた後、立ち上がった。

考えるのを、やめた。どんな答えが待っているとしても、彼女が死ぬのだけは避ける。

たとえどれだけ低い可能性であつたとしても、彼女が生きていればゼロにはならない。

君を救つてみせるー！。

僕自身と彼女に誓つた。

雨が、また土砂降りになってきた。世界すら僕を拒むというのか。

僕は一人だと、再確認させられる――辛かった。

大通りでタクシーを拾おうとする。三台が乗車拒否をした。ずぶ濡れの上、腫れ上がった僕の顔。乗車拒否を責める気にもなれない。

四台目が止まった。運転手の神経の図太さに感謝する。

僕のマンションに着いた。雨が止む気配はない。

まるで、《お前の思い通りになどさせるものか》と言っているような雨だった。

空を見上げる。漆黒が水滴を延々と降らせていた。

漆黒――彼女の意識の色。僕の愛する色。

今をもって、僕の憎む色に変わった。

僕は漆黒を睨みつける。

《お前の思い通りになどさせるものか》

漆黒は、はつきりとそう言った。

マンションの集合ポストを開ける。

チラシが三枚入っていた。一枚は歯医者者の宣伝で、もう一枚は引

っ越し屋の宣伝。

残りの一枚はデリバリーヘルスの宣伝だった。全裸の女性が開脚して、右手で目を、左手で性器を隠している写真がプリントされていた。

歯医者と引っ越し屋のチラシを捨てて、デリバリーヘルスのチラシを眺めるー勃起していた。急激にマスターベーションしたい衝動に駆られた。

以前、どこかで、生物は孤独を感じると本能的に性欲が昂ぶるという記述を読んだ事がある。その通りだと思った。

今時、中学生だってチラシで勃起はしないだろう。

やれやれと思って、僕はチラシを捨てる。思い直して拾う。部屋に持って帰った。

洗面所で顔を洗う。鼻血は止まっていたが、痣だらけの酷い顔だ。シャワーを浴びて、雨に冷やされた体を暖める。勃起は治まらなかった。

マスターベーションしようか迷い、するのをやめた。

いくらなんでも、この状況で、マスターベーションは空しすぎるし、悲しすぎる。

彼女とセックスがしたかったー叶わぬ願いだ。

外の雨は止む気配がない。世界と繋がる事も出来なければ、当然、《あの方法》を实践する事も出来ない。

時間を持て余した。

何時間か経った頃、僕は再び、先ほどのデリバリーヘルスのチラシを再び眺めた。

「1時間無制限天国コース。2時間究極絶頂コース。大人気！恋人気分で朝まで5時間お泊まりコース（なお、本番の強制、暴力など、女の子に嫌がる行為を加えられた場合には、この業界流の処置をとらせて頂きます）」

恋人という言葉に惹かれた。マスターベーションは空しすぎる。

僕はチラシに記載されていた番号に電話をかけた。

「ありがとうございます。《楽園》です」

明るい男性の声。

「女の子をお願いしたいんですけど」

暗い僕の声。

「ありがとうございます。当店をご利用されるのは初めてですか？」

「はい」

「ありがとうございます。当店をどこでお知りになりましたか？」

「ポストにチラシが入っていました」

「ありがとうございます。この時間ですと、朝までお泊まりコースのみの営業となっておりますが、よろしいですか？」

「よろしいです」

「ありがとうございます。お客様のご住所を伺えますでしょうか？」

住所を告げた。

「ありがとうございます。お客様のご住所ですと、女の子にはタクシーを使わせる事になります。タクシー代はお客様にご請求させて頂く事になっておりますが、よろしいですか？」

「よろしいです」

よかった。金は有り余るほど持っている。

「ありがとうございます。それから、当店では女の子のチェンジは出来ません。よろしいですか？」

「よろしいです。でも、なるべくかわいい子をお願いします」

これで女の子が醜かったら、それはそれで空しすぎる。

「ご安心下さい。当店の女の子のクオリティの高さは、有名雑誌にも掲載されておりますから」

男の声は自信満々だったが、有名雑誌の正確な名称までは言わなかった。

「それでは、大体三十分後、ルアちゃんという女の子がそちらに伺いますので、彼女に料金をお支払いの上、恋人気分をお楽しみ下さい。ああ、無理なサービスの強要は厳禁なので、そこはよろしくお願いしますね」

「大丈夫です」

「ありがとうございます。心ゆくまで、お楽しみくださいませ」

電話を切った。一本の電話でこれほど礼を言われたのは初めてだ。今が十一時半なので、ルアちゃんが来るのは零時前後くらいだろう。テレビを点けてルアちゃんを待った。

勃起――まるで治まる気配がない。

やれやれ、明日の今頃には彼女が死んでしまうというのに、僕は何をしているんだろう？

テレビでは霊能力を持つという占い師の太った女が、売れない芸能人の未来について人生相談をしていた。霊能力と人生相談にどのような共通点があるのか解らなかった。

この女に彼女の事を相談したら、どんな答えが返ってくるだろうか？

馬鹿馬鹿しい。未来の事など誰にも解りはしないのだ。ただ一人、この僕を除いては。

テレビを消して、外を見た。雨はより一層強くなっていた。嵐のようだ。

零時を少し回った頃、ブザーが鳴った。ルアちゃんがやってきた。

ドアを開ける。

「こんばんわあ」

驚いた。

ルアちゃんー愛想のいい笑顔。美人とかわいいの中間の顔立ち。茶色でパーマのかかった髪。ピンクのミニのワンピース。突き出した胸、くびれた腰。ハイヒール。

違う。驚いたのはそんな事じゃない。

ルアちゃんは、サダオの娘だった。

十一話 《僕の視点》彼女の伝承者

「どうしたんですかあ？」

立ち尽くした僕を見ながら、ルアちゃんが言った。自分がどんな表情をしているのか解らない。

何故、サダオの娘がここにいる？

「あのお、ルア、タイプじゃなかったですか？上がったちゃ駄目ですか？」

芝居がかった泣きそうな顔のルアちゃん。冷静になれー自分に言い聞かせた。

「ごめん。知り合いに似ていたから、少し驚いたんだ。どうぞ上がって」

「なんだあ。よかった。お邪魔しまあす」

芝居がかった笑顔のルアちゃんを玄関に招いた。

考える。この事象の意味を考える。

過去、サダオの娘の運命を覗いた時には、このような未来は存在しなかった。

僕とサダオの娘が、現実で対面する事など有り得なかった。

変わり始めている？

彼女の運命を変えようとしている事の余波が、他人の運命にまで影響を及ぼしているともいうのか。

だとすれば、これは喜ぶべき兆候なのか？それとも、危惧すべき兆しなのか。

考えても、答えは出ない。出るはずがないのだ。世界と繋がる事しか、それを探る方法はない。

漆黒が降らせている雨が、僕に探求を許さなかった。

《お前の思い通りになどさせるものか》

なるほど。とことん、お前は僕の敵だ。

ルアちゃんーサダオの娘。ベッドに腰掛けていた。僕の顔を眺めている。

「喧嘩でもしたんですかあ？」

間延びした声。特に興味はないが、他に話題もないので聞いてきた感じだった。

「タチの悪い学生に絡まれて、袋叩きにされたんだ。我ながら情けないよ」

絡んだのは僕だった。さらに情けない。

「えゝ、ひつどおゝい！ルアが変わりにやつつけてあげようか？」

頬を膨らませ、その後でエイ、エイと言いながら両方の拳を突き出す仕草をルアちゃんがした。

僕の知っているサダオの娘とは、大分印象が違う。娼婦として体売る事への抵抗、それを自分のキャラクター作りに転換させて芝居をしているように思えた。

「ありがとう。気持ちはとても嬉しいよ」

「そっかあ。あ、それじゃあこれ、お願いしまーす」

ルアちゃんが一枚の紙を僕に差し出した。受け取り、見る。領収書ータクシー代だった。ああ、と頷き、僕は記載されている金額を渡した。

「ありがとうございまーす。それじゃ、今晚のプレイ代金も頂けますかあ」

こちらはチラシに書いてあったので、あらかじめ丁度の金額を用意していた。渡した。

「あと二万円で、本番も出来るけど、どおしますう？」

ルアちゃんの上目遣いー誘っていた。もちろん、個人的な好意などではなく、営業目的でだ。

「本番行為の強制は厳禁じゃないのかい？」

「やだ、それは本音と建前の違いってやつですよ。それに、強制じゃないでしょ？」

僕は頷く。なんでもいい。金はいくらでもある。孤独を少しでも癒せるなら、二万円などちり紙に等しかった。捨てたところで惜しくはない。

二万円、財布から取り出して渡した。

「やった！お客さん、今日は楽しもうね」

芝居がかっていない笑顔――獲物を狩ったハンターの笑顔だ。

ルアちゃんと一緒にシャワーを浴びた。ルアちゃんの肢体――服の上から見た印象を遥かに越えてグラマラスだった。

豊満な胸、くびれた腰、きゅっと上がった形のいい尻、曲線美を描く脚。

スタイルは彼女を上回っているかもしれない。

若さ。彼女から失われようとしているものが、ルアちゃん――サダオの娘にはあった。

勃起はピークを迎えていた。思えばチラシを見た時から勃起し続けている。僕のそれは、今にもはちきれそうだった。

ルアちゃんが僕の性器を握った。僕の目を見つめながら、上下に

動かす。官能的な視線――限界だった。

僕は射精した。

ルアちゃんが僕の精子を掌で弄んでいた。

「相当したかったんだね」とルアちゃん。

「相当したかった」と僕。

ルアちゃんは僕の性器をボディソープで洗う。再び勃起。ルアちゃんが笑った。

「相当したかったんだ」

言い訳のように繰り返した。言い訳？馬鹿らしかった。

僕はセックスがしたいのだ。孤独を癒す、彼女としたようなセックスがしたいのだ――高らかに宣言したかった。

さすがに、そこまで馬鹿じゃなかった。

「ねえ、お客さん。名前なんてゆうの？」

性器を洗いながら、ルアちゃんが尋ねてきた。

「表札を見たらう？」

「だつてえ、名字しか書いてなかったんだもん。あたしたち、今日は恋人なんだよ？お客さんは、彼女と名字で呼び合うの？」

「呼び合わないね」

呼び合っていないかった。

唐突に、頭の中を電撃が走る。

ルアちゃんーサダオの娘。彼女が唯一、真実を伝えた娘。世界中でただ一人の、彼女の伝承者。

光明が、悪戯と共に閃いた。

「だったら教えて？お客さんの名前はあ？」

「サダオ」

ルアちゃんの表情が一瞬凍った。それは本当に一瞬なのだけど、僕は見逃さなかった。

「そつかあ、それじゃ、サダオって、呼んでも、いい？」

「もちろんさ」

僕は笑った。ルアちゃんも笑った。その笑顔も芝居がかったいなかった。というより、その笑顔には何もなかった。

ただ、筋肉を弛緩させているだけのような笑みだった。

十二話 〈僕の視点〉繋がり始める

僕とルアちゃんーセックスした。

ルアちゃんは僕の欲求にひたすら答えた。僕が舐めて欲しいと言えば、それがいかなる部位であろうと舐め、僕が舐めたいと言えば、それがいかなる部位であろうと舐めさせた。

そこにあつたのは、単純な僕の欲求の発散だった。ルアちゃんの実在は、ただ、僕の欲望を満たす為にそこにある、人形のようなものだった。

僕の欲望ー孤独を少しでも満たしたい。

それはルアちゃんによって叶えられた気がする。

僕とセックスするルアちゃんの実。ゴキブリを見るような目ー彼女に似ていた。

僕の名前がサダオであるというだけで、ルアちゃんはそのような目で僕を見る事が出来る。

さすがに彼女の伝承者だ。その目はあまりに彼女に似ている。違っているのは、ルアちゃんが僕をゴキブリを見るような目で見ている理由が、サダオという名前を名乗った僕を憎悪している点にあった。

彼女は、《愛しているからこそ》僕をそのような目で見た。

限られた期間で、孤独を癒すだけなら、大した問題ではない。大した差違ではなかった。

嬉しいと、僕は思う。ルアちゃんがここに現れたのは、きっと僕の孤独を癒すため。そう思う事が出来た。

事実が異なっていたとしても、今は全く構わなかった。

彼女を救った後、僕の手に取り戻すその日までー。

僕はルアちゃんを利用する。

果てる度にセックスした。ルアちゃんが持っていた四つのコンドームー使い切った。足りなかった。

無しでセックスしたいとルアちゃんに伝える。受け入れられなかった。

無理なサービスの強要は厳禁ですー。思い出した。

ルアちゃんの口で、その後二回果てる。朝の四時半になっていた。もうすぐサービスが終わる。かなり満足した。

ベッドで裸のルアちゃんを抱いていた。僕自身も、彼女と同じように、ルアちゃんを彼女に見立てているようだ。

「もうすぐ、お別れだね」

ルアちゃんが言った。寂しそうな表情。もちろん芝居だ。実際は

嬉しくてたまらない。そんな本音が隠れているのだろう。

もうすぐお別れだねーそうはさせない。

「君は週、どのくらい働いてるの？」

「五日だよ。どうして？」

僕の欲望ー大きくなって動き出した。

「相談なんだけど」

切り出す。上手くいくように願いを込めて。

「出来れば、夜、また来て欲しい。というより、今日からしばらく、ここに住んでくれないか？」

僕は上体を起こしてルアちゃんを見つめた。驚いた表情のルアちゃんが見えるー畳みかけた。

「もちろん、それに見合った金額は払うよ。ビジネスとして、ここに住んで欲しいんだ。どうだろう」

「いきなり言われても…、お店に聞いてみないと…」

困惑ー提案を受け入れるか否かというより、どうやって断ろうかと考えているように見えた。

「僕が店に話すよ」

「駄目だよ。そんなサービスないもん」

「だったら、店を辞めて僕に雇われないか。それなら問題ないはずだ」

ルアちゃんの目つきが鋭くなっていく。僕に対する印象を、具体的に表してくれたようだ。

「勝手な事言わないで」

起き上がり、ルアちゃんがベッドから降りた。恋人気分もそろそろ限界らしい。

「何の為に働いている？」

大体の見当はついていたが、確信に変える為にも聞いてみた。

「お客さんには関係ないでしょ」

「お客さんじゃない。僕は『サダオ』だ。まだサービスは終わってないだろう」

憎悪が、ルアちゃんの顔中に溢れていく。ゴキブリのくせにー。そう言っているように聞こえた。

ようやく、サダオの娘らしくなってきた。

「サダオには関係ないでしょ」

「関係ある。僕達はこの時間において恋人だろう。恋人がこんな

店で働いているのは我慢出来ないんだ」

勝手な言い分。どう考えても、僕の主張は間違っている。だが、そんな事はどうでもよかった。

ルアちゃんを手に入れる。彼女を取り戻すその日まで。

「お金が欲しいから。これで満足？」

吐き捨てるようにルアちゃんが言った。それから、床に無造作に散らばっていた下着やワンピースを拾い始める。

「服を着るな」

僕は命令した。ルアちゃんを支配しようとした。

「金は僕が払う。だから君は、これからしばらく、僕の家に住むんだ。僕の言うとおりにするんだ」

「ふざけないでよ！」

怒鳴り声――部屋中に響いた。

「あんた、さつきから何様のつもり？あんたはただの客。あたしはデリヘル嬢。それだけの関係でしょう？あんたにそんな事指図される覚えはないの。あんたなんか、店にチクれば簡単に潰せるんだから。あんまり調子に乗らないで。金を払う？笑わせないでよ。もし、あたしが欲しい額を出せるっていうなら、喜んであんたの奴隷にでもなんでもなってるわ。一般人には到底無理な金額でしょうけど」

勝ち誇ったように笑うルアちゃん。だが、勝ったのは僕の方だった。

「いくらだい？」

「言うだけ無駄だと思うけど」

「いくらだい？」

「何日あたしを拘束する気？それによるわ」

僕は計算する。今日の夜、彼女を救ったとして、どのくらいで取り戻せるか――？

救った後に、世界と繋がらなければ正確に解るはずもない。もっとも、それをする勇気が僕にあるかも問題だが。

そうだ。僕は恐れている。

彼女が、二度と戻ってこないという、最悪の結果を。世界と繋がって、もしそんな未来が見えてしまったら――！。

冗談じゃない。今はルアちゃんの事を考える。

結局、適当に定める事にした。

「最低二日。長くて一週間以上」

「一日五百万。どう？出せるの」

「出せるよ」

ルアちゃんの顔から憎悪が消えた。呆れているらしい。

「嘘とか、本当に嫌いなんだけど」

「嘘じゃないさ」

僕は立ち上がり、冷蔵庫の上に置いてある通帳を取った。そしてそれをルアちゃんに渡す。

「その中の、全部君にあげるよ」

全部――八千万ほどだ。

ルアちゃんは通帳を眺めて、目を丸くした後、再び顔に憎悪を宿した。

「二つ、質問があるんだけど」

「どつぞ」

「あなた、何してる人？」

「無職。少し前に仕事を辞めた。その金は、その仕事で貯めたものだよ」

「自分の生活はどうするの？」

「どうにでもなる。それは君が心配する事じゃない」

どうにでもなる。孤独が癒せれば。彼女が戻ってくれば。

「もう一つの質問は？」

「なんで、嘘ついたの」

この数時間で、最高の憎悪を視線に込めながらのルアちゃんの視線。

嘘？

僕がどんな嘘をついた？

「嘘つて？」

聞いた。ルアちゃんが僕に通帳を投げつけた。キャッチする。

「この通帳は偽物じゃないけど」

「知ってる。だから聞いているの」

何の事だろう？通帳を眺めた。

ハッとした。同時にルアちゃんが口を開いた。

「名前。サダオじゃないでしょ」

しまった。完全なケアレスミス。自分の馬鹿さ加減に嫌気がさす。

平静を装って、僕は答えた。

「確かに、僕の名前はサダオじゃない。けれど、それは大した問題じゃないだろう。君だって本名で仕事をしているわけじゃない。僕も、なんとなく、本名を口にするのは気が引けた。それだけさ」

繕った嘘。ルアちゃんに通じるだろうか。サダオの娘に通じるだろうか。

「だけど、サダオなんて突発的にでる名前じゃないでしょう」

「突発的にでたんだよ」

ある意味、本当だ。

「何で、それをそんなに気にする？」

答えを知った上での問い。ただの時間稼ぎだ。なんとかルアちゃんを丸め込め。頭の中にはそれだけしかなかった。

「サダオっていうのが、あたしにとってすごく意味のある名前だからよ」

「どんな風に意味がある？」

「殺したいほど憎んでる。というより、もうすぐ殺すつもりでいる奴の名前」

もうすぐ殺すつもりールアちゃんは金が欲しい。

どれくらい拘束するかにもよる——最低二日間、一日五百万、二日で《一千万》。デリバリーヘルス楽園…。

僕のつけた見当——確信した。同じく、丸め込める事も確信した。

「あんた、最初に《知り合いに似てる》って言っただよね？もしかして、私の事知ってたんじゃないの？ひょっとして、サダオの知り合いかなんかで、私の写真でも見ていて、それで試しに、あいつの名前を名乗ったんじゃないの？」

想像力豊か。ほとんど間違っているが、ほとんど正確だった。

「驚いたね」

と僕は言った。

「その通りだ」

頬に痛み——ひっぱたかれた。

「最低ね。どんな理由でそんな酷い嘘ついたわけ？」

「理由はない。ただ、君がどんな顔するか見たかったんだ」

理由はある。君が彼女のように、ゴキブリを見るような目で僕を見してくれる事を期待したんだ。

「変態。あの豚と一緒にじゃない」

ルアちゃんがダイニングキッチンに走る。包丁を握って、それを僕に向けてきた。包丁と全裸——不思議とマツチしていた。

「言いなさいよ。あの豚は今何処で何してるの?」

「嫌だと、言ったら?」

「あんたを殺すわ」

「それで?金を奪って、サダオ殺しを依頼するのかい。君の働いている風俗に。いや、センターに」

驚愕と困惑――ルアちゃんの顔に入り混じる。

「なんで、そこまで知っているの?」

「知りたかったら、それをおろしてくれないか」

しばしの沈黙。ルアちゃんの迷いだった。ルアちゃんの決断――
床に包丁を置いた。

「話して」

「僕のビジネスを受けてくれるかい?」

「あんたの話に納得したらね」

「それなら安心だ。君は必ず納得する。僕達は利害が一致しているんだから」

「どういふこと?」

「僕もサダオを憎んでいる。殺したいほどにね」

この言葉は真実だった。

十三話 〈貝原の視点〉 桜井の正体、貝原の過去

歌舞伎町の入口。巨大なディスカウトショップの下で、阿東を待っていた。

八時にここでー阿東が指定してきた。

八時を十分過ぎた頃、阿東の姿を横断歩道の人混みの中から見つけた。

「ごめんなさい、待たせちゃったわね」

阿東ー黒の似合う妖艶な女。髪も、スーツも何もかも、見える部分は全て黒で統一されている。

「構わんが、次からは違う場所を指定してくれ」

「どうして？」

「ここは人が多い。人混みは苦手だ」

「解ったわ。でも、嬉しいわね」

「何がだ」

「次があるんでしょ？」

悪戯っぽく阿東が笑った。返答に困る。

「さつさとお洒落なバーへ向かうとしよう。雲行きが怪しい。今夜も降りそうだ」

日曜日の夜。普段より歌舞伎町の人通りは少なかった。だが、それでも俺の価値観からしたら充分すぎるほどこった返している。早いところ、バーに入りたかった。

阿東の先導で歌舞伎町の奥へー。

コマ劇場前の広場を左に曲がり、細い路地へと入っていく。二、三分歩いた頃、例のバーに辿り着いた。

煉瓦調の建物の地下、そこにバーはあった。

階段を降りると、入口から僅かに音楽が漏れている。品のいいクラシックだ。

悪くないな、と、俺は思った。

バーに入る。髭のマスターの挨拶。なるほど、趣味のよさそうなたたずまいをしていた。

店の構造はメリー・マリーに似ている。違うのは照明が薄暗いブルーである事と、外が見えない事くらいだ。

何処に座る？と阿東が聞いてくる。どこでもいいと答えた。外が見えないのであれば何処でも同じだ。

客はまばらだった。空いているテーブル席に座る。阿東が上着を

椅子に掛けた。白のワイシャツが不釣り合いだった。

マスターが笑顔で注文を取りにくる。阿東が白ワインを頼んだ。

「この白ワイン、凄く美味しいのよ」

「じゃあ、同じものをもらおう」

ワインはすぐに運ばれてきた。

すぐさま、阿東がグラスを掲げる。

「乾杯しましょう」

「何にだ」

「新人の合格になんてどう？ 貝原さんが合格を出した初めての新人じゃない」

「気が進まん」

「どうして？」

「合格は合格だが、あいつにはどこか危ういところがある」

阿東が掲げていたグラスをテーブルに置いた。

「やっぱり、そう思う？」

「あんたが相談したいっていうのは、あの新人についてだろう」

「よくわかるわね」

俺の読みは当たっていた。

「気付いていたな？最初から」

「ええ。でも、何故？」

「基本的に、殺害方法に指定がある場合、撮影依頼も伴ってくる。殺し方を要求したところで、死体が見なければ意味はないからな。だとすると、あの指定は依頼人ではなく、センター本社からという事になる。絞殺は判断材料にもっとも適しているからな。性格が出る」

阿東は小さく拍手した。

「さすが貝原さんね。でも、殺害方法を指定したのはセンターではなく、私個人の意志よ」

俺は思わず眉をしかめた。

「驚いたな。バレたら懲戒免職どころじゃないぞ」

「貝原さんとあの新人君が言わなければバレないわ」

「やれやれ」

阿東――その華奢な体つきからは想像出来ないほど大胆な行動に出る女。

危ういのは新人だけではなかった。

「だが、どうしてそんな回りくどい事をした？あんた自身が、優秀な新人だと言っていたじゃないか」

「それはそうなんだけど、気になる事があって。貝原さんなら適切な判断を下してくれると思ったのよ。正直な感想を聞かせてくれないかしら？桜井君、このまま殺し屋にして大丈夫だと思う？」

「技術は問題ない。すでにベテランの域だ。才能のみなら、ここ数年でもトップクラスだろう。研修成績Aランクというのも頷ける。合格点を出したんだ。その点では俺も期待している。だが、奴には得体の知れない欲望が確かに潜んでいる」

「どんな？」

「さあな。ただ、ターゲットを殺している時の奴の顔。あれは殺しを心底楽しんでる人間の顔だ。上手く導かないと、いずれは仕事抜きで殺しをやるようになる。そんな気がした」

「なるほどね」

心なしか、阿東の表情が曇った。何か、よからぬ事がこの話の裏にある。予感がした。

「俺にも聞かせてくれないか。仕事の前から、あんたが桜井に抱いていた懸念を」

「話すわ。でもその前に…」

阿東がグラスに目をやった。

「これ、空けない？」

「それもそうだな」

俺達は互いのグラスを弾かせてから、ワインを一息に飲み干した。

二杯目とつまみを頼んでから、新人――桜井の話を持続した。

「実は、貝原さんに言っていない事があるのよ」

俺は煙草をくわえ、阿東の次の言葉を待った。

「桜井君が殺し屋に志願した理由なんだけど……」

そこで阿東が黙った。言うべきか、言わないべきか、迷っているらしい。ろくな話じゃなさそうだな。

「言ってくれ」

「怒らない？」

「何故、怒る必要がある？」

「彼、晴雨さんの息子なのよ」

くわえていた煙草を落としそうになる。

「なんだって？」

「彼が志願した理由は、父の気持ちが知りたいから」

心臓の鼓動が早まっていく。煙草に火を点け、深く吸った。鼓動が治まる事はなかった。

父の気持ち――晴雨の気持ち。何が知りたい？桜井は晴雨の息子――推測が、最悪へと向かっていた。

「殺し屋になって、父と同じものを見たい。そして、母の死に納得したい。それが動機」

俺のと晴雨の浅からぬ縁――記憶が蘇る。

俺の初仕事。講師は晴雨だった。

初仕事のターゲット――晴雨の妻だった。

桜井の母だった。

「桜井は全てを知っているのか」

俺の声――他人の声みたいに聞こえた。

「解らないわ。彼は面接の時、私にそう言った。でも、それ以上口を開く事はなかったの。探り屋を使って彼の生い立ちは調べたわ。彼は間違いなく、晴雨さんの息子だった」

「何故、俺を講師につけた？」

「桜井君が望んだのよ。講師は貝原さんがいいって。父がそうしろって言うてたって」

舌打ち。ほぼ決定打だった。桜井は全てを知っている。

昼間の桜井の言葉――。

『貝原さんも、初めての仕事の時はこんな気分だったんですか？』

そついう意味か。

こんな気分で母を殺したんですか？

父の気持ち――母を殺す仕事の講師を受ける気持ち。

母の死に納得――殺し屋に殺されるのは仕方がないから――。

だから納得できるとも言つつもりか？

奴は俺を恨んでいる？

恐らく違う。桜井の俺を見る目は、憎悪ではなく憧れ。

母を殺した殺し屋に憧れる？

狂ってる。恨まれた方が遥かにマシだ。

「厄介だな」

「ええ。彼は晴雨さんの血を引いてる。晴雨さんと同じ事をしかねない。センターに在籍している状態で、仕事抜きの殺しを行い、捕まりでもしたら……」

「センターがマスコミに晒される」

「絶対に避けなきゃいけないわ」

二杯目とつまみが運ばれてきた。つまみには手をつけず、二杯目を飲み干す。酔える気分じゃなかったが、体がアルコールを欲していた。

「奴の目的を正確に探る必要があるな」

阿東は真剣な眼差しで首を縦に振る。

「センターの上層部にもこの事は伝えてあるの。だけど、この人手不足で、そんな事気にしてもらえないって感じで。全然取り合ってくれないのよ」

ため息をついて、阿東がグラスに口をつけた。今のセンターでまともな思考をしているのは阿東だけのようなようだ。

「これからしばらく、桜井君の講師をお願いできないかしら」

ほとんど懇願するような言葉だった。

「気は進まんが、仕方ないだろう。幸い、何故か奴は俺に懐いてる。もつとも、今となればそれが一番不気味なんだが」

「ごめんなさい。やっぱり貝原さんには最初に言うべきだったわね」

「次からそうしてくれ」

次などないー解っていて口にした。

桜井、何を考えている？晴雨に何を吹き込まれた？

偶然が重なっていく。五年ぶりの晴雨との再会。その日に晴雨の息子の講師を務めるー。

偶然と言い切る事が出来なくなっていく。否、《偶然のわけがない》。

「今朝、晴雨に会った」

言った。出来れば誰にも言わずに忘れたかった今日の出来事。阿東が目を丸くする。

「嘘でしょ？何処で？」

「俺の家の近くの喫茶店だ。奴は仕事でたまたま通りかかったと言った。だが、今となっては怪しいものだ」

「晴雨さん、何か企んでいるのかしら」

「恐らくな。しかし、奴の考えは常軌を逸しすぎている。俺達が考えたところで、答えは出ないだろう」

「そうよね。」

私がセンターに入って間もない頃に晴雨さんが辞めちゃったから、あの人の事ほとんど知らないけど、噂だけなら嫌という程聞いてきた。殺し屋としての腕は最高だけど、それを仕事以外に使ってるって。センターも迷惑だから、やめて欲しかったらしいけど、晴雨さんが怖くて、誰も文句が言えなかったって」

晴雨が辞めた時に、センターの上層部がパーティーを開いたという話を聞いた事がある。どうやら本当のようだ。

「貝原さん。私、何だか嫌な予感がするわ」

「俺もしていた。晴雨に会った時からずっとな。とにかく、晴雨と桜井は危険だ。奴らが今現在、どういった関わりを持っているのか。それから調べよう」

「ありがとう。貝原さんに話せて良かったわ」

阿東が胸を撫で下ろした。ホッとした表情。阿東は俺を信頼している。俺も阿東を信頼していた。少なくとも、仕事の上では。

「この事は俺達二人だけの秘密だ。どこに晴雨の網があるか解らんからな」

「もちろんよ。仕事の合間に、私も探ってみるわ」

秘密の共有。信頼の証だった。

「改めて、乾杯しましょうか」

阿東がマスターを呼び、三杯目を注文した。すぐに運ばれてきた。

「何に乾杯する？」

「二人の秘密の初仕事に」

グラスを掲げながら、阿東が俺に強い視線を浴びせてくる。吸い込まれそうな深い瞳。やれやれ、十歳若かったら、コロリと落とされていたかもしれないな。

頷いて、俺もグラスを掲げた。

「乾杯」

乾杯

十四話 〈貝原の視点〉関わっている者の前に現れる

バーを出ると、雨が降っていた。二人で走り、大通りに向かう。途中、路地裏から出てきた頭の悪そうな学生数人の中の一人と、阿東がぶつかる。地面に転んだ阿東を抱き起こすと、金髪の学生が絡んできた。

「おい、ぶつかって挨拶ねえのかよ」

頭の悪そうなガキ。酒と若干だが血の匂いがした。取り巻きの連中が加わる。

「俺ら今一人ぼこってきたからよ。テンションたけーぞ。やつちやう？こいつらやつちやう？おっさんぼこって女喰う？」

俺と阿東は目を合わせる。阿東はため息をついていた。

俺の周りを四人のガキが囲んだ。

雨――強くなってきた。

「おっさんびびんなんて。すぐ楽にしてやつから」

今日の俺はどうかしている。ガキ相手に憂さ晴らしを考えるなど――。

しかし、口が勝手に動き始めた。

「偉そうな口は一人で喧嘩出来るようになってから叩くんだな。」

すねかし
臍齧りの坊や達」

俺の言葉は金髪の逆鱗に触れたらしい。顔が紅潮していた。

「ああ？調子乗ってつと殺すぞこらあ！」

金髪が俺の胸倉を掴む。阿東が、やりすぎないでとガキの安否を
気遣った。

「三十秒か…」

俺はこの四人を叩きのめす所要時間を呟いたあと、貴重な時間を
バカなガキ相手に使ってしまう自分自身の浅はかさに、早速後悔し
始めていた。

二十五秒で終わった。ガキ共は路地裏で仲良く伸びている。

「やれやれ、すまなかったな。大分濡れちゃった」

「いいわ。濡れるのには慣れてるの。ゆっくり行きましょう」

雨に打たれながら、大通りへと歩いた。柄じゃないが、この雨が
少しでも面倒事を流してくれる事を願いながら。もちろん、叶わな
い事は解りきっている。

タクシーを捕まえる。この時、俺と阿東の最寄り駅が同じである
事を初めて知った。

最近引越したと阿東は言う。

「今度遊びに行くわ」

去り際の阿東の言葉。俺は苦笑して頷いた。その時はもてなそう
ーそれだけ答えた。

阿東が嬉しそうに笑って帰っていく。悪い気はしなかった。

俺の家ー六畳一間のアパート。トイレと風呂が付いているのが
奇跡的に思えるボロさだ。

金があった。もっと広い家に住む事も出来る。しかし、そんなも
のは必要なかった。眠れる空間があればそれでいい。昔とは違う。
どんなに狭かろうと、俺の睡眠を妨げる者はもういない。

考える事が沢山あった。晴雨と桜井。狂った親子。

奴らが俺の前に現れた理由。目的。

晴雨の目的は考えるだけ無駄だ。奴の思考が理解出来るほど、俺
はとち狂っていない。

桜井の目的ー晴雨の気持ちを知ること。俺に殺された母親の死
に納得すること。

桜井は晴雨から母の死についてどういう具合に聞いているのか。
そもそも、晴雨は何故、息子にそれを教えたのか。

晴雨。結局、中心に奴がいる。奴は初めて会った時から、俺に何
かを求めていた。

何か――解らなかった。ただ、奴の俺を見る目が、玩具を見つめる少年の目が俺にそれを伝えていた。どういう風に遊ぼう？そう言っている気がした。

晴雨は息子を使つて、俺に対し、何かを企んでいる。何かを探る。それが仕事だ。

晴雨との会話を思い出す。ヒントを探す。

晴雨の与太話――。

『神という概念に一番近い存在』

『世界が具体的になくなる』

『関わっている者の前に現れる依頼人』

俺も関わっているんじゃないか、と晴雨は言った。その与太話に、関係があるとでも言うのか？

結論――もう一度、晴雨に会う必要がある。

うんざりだった。

夢――狭いアパート。けたたましい電話のベル。鳴り止まない。お袋と親父が狂ったように電話線を引き抜く。お前のせいだ――両親の呪詛が聞こえる。熱いコーヒ―。俺の全身にかけられる。やめてくれと懇願する。やめられる事はない。

電話が鳴っている。現実の音――耳障り。どんなに深く眠っていたと、些細な音で目が覚める。鍛錬の賜物。くそくらえ。

久しぶりに嫌な夢を見た。とことん幸先が悪そうだ。俺は受話器を取った。

「貝原さん？」

阿東だった。

「どうした？」

言いながら壁時計を見た。午前九時。睡眠時間は三時間程度か。朝まで考えていた。

「今から、センターに来れる？」

「何故だ？」

「それが、ちょっと説明し辛いんだけど、変な依頼人が来てるのよ」

悪寒が全身を走る。

変な依頼人。まさか…。

「貝原さんと、桜井君を呼べって、聞かないの」

「俺と桜井を？待て、そいつはどんな奴だ」

「言っても、信じてもらえないと思う」

「どういう事だ？」

「とにかく来て。お願いだから」

阿東が焦っている。相当な事態だ。俺も焦燥に駆られた。

「解った。だがこれだけ聞かせてくれ。その依頼人、他に何か言っていないかったか？」

唾を飲む音――恐らく阿東にも届いた。

「貝原さんと、桜井君。それに私。みんな関わってるって」

関わっている者に現れる――与太話。

与太でなかったということか。

「すぐに行く」

電話を切った。

「狂ってやがる」

俺は呟いた。顔だけ洗って部屋を出る。雨は止んでいなかった。

駅前。メリー・マリーを外から覗く。昨日のウェイトレスがいな

かった。

『ああゆう娘さんを一度殺してみたいものです』

晴雨の言葉が脳裏をよぎる。振り払った。たまたま、今日は休みなだけだ――言い聞かせた。

三十分程でセンターに着く。近代的で巨大なビル。この不景気で、いつまでこの外観を維持出来るのか。

くだらない事を考える。潰れたら、俺はどうなる？晴雨のようにフリーを気取るか？

御免だ。俺は殺す事しか脳のない人間なのだ。いちいち探り屋や掃除屋との提携など面倒な事は出来ない。かといって、今更力タギになる自分も考えられない。

潰れない事を祈るしかあるまい。結局は俺も、組織を必要とする一人の社会人であるという事だ。

センターのロビーへ。正装した社員達。知らずに入った人間は、まさかここが人殺しを生業とする会社であるなどとは夢にも思わないだろう。傍らにデリバリーヘルスを経営している事も同じく。

ロビーの受付嬢に、阿東と約束があると言った。

「四階、リラックスルームで阿東がお待ちです」

礼を言ってエレベーターに乗る。

四階。エレベーターの扉が開くと、阿東が立っていた。桜井も一緒だ。

「依頼人は？」

「リラックスルームで待たせてるわ」

「解った。行こうか」

俺達三人はリラックスルームに向かった。観葉植物とソファとテーブルだけの部屋。依頼人と本社人間が仕事の話をする部屋。ここに殺し屋が混ざる事など異例中の異例だ。

「この事、上には話してあるのか？」

廊下を歩きながら阿東に聞いた。

「したわよ。冗談はよせって、相手にされなかったけど」

「冗談？」

この事態のどこに冗談の要素があるのか解らなかった。

「依頼人に会えば解りますよ」

桜井が楽しそうに言った。

リラックスルームのドアの前。阿東を見る。頷いていた。ドアを叩く。返事はない。ドアを開けた。

狂いそうだった。

四、五歳の少年がソファ―に座っていた。テーブルに置かれたコ―ラを無表情で飲んでいる。

「貝原さんですね？」

無表情のまま少年が口を開いた。振り返り、阿東と桜井を見る。

阿東―疲れた顔をしていた。

桜井―今にも笑い出しそうだった。

俺も笑いたくなくなった。四、五歳の少年が、センターへ依頼に来る？冗談の要素どころか、冗談そのものだ。だが、笑う事が出来なかった。

少年は膝の上でス―ツケースを抱えている。恐らく、一億入っている。晴雨の与太話―現実の話だった。

『貝原さんも、彼に会えば信じるだろう…』

晴雨の言葉の意味―理解した。信じたくなど、もちろんなかった。

俺は少年の呼びかけに答えず、対面のソファ―に座った。阿東が続いて俺の隣りに座る。桜井はソファ―の横の壁に背をもたれ、腕を組んで立っていた。

「全員揃ったわ。そろそろ話を聞かせてくれないかしら？」

阿東が口を開いた。俺は顔を阿東に向けた。

「まだ何も話してないのか？」

「ええ。彼が三人揃うまで待つてくれと言うから。詳しい話はまだ全然。ただ……」

阿東の視線が少年の持つスーツケースに移動した。

「一億入っているんだろう」

即座に阿東の視線が俺に返る。目を見開いて驚いていた。

「どうして解るの？」

「ちよつとな」

俺は少年を見据えた。目と目が合う。俺は表情を変えた。殺気を視線に混ぜる。殺し屋の表情。桜井が気付いて、ヒュウと口笛を吹いた。

ただの少年なら、訳もわからず泣き出すだろう。洗練された殺気は、生物なら何者でも感じとる事が出来る。危険を察知する、防衛本能の働きによって。

しかし、少年に変化は無かった。ただ、無表情で俺の視線を受け止めるだけだ。

《少年は生物ではない》。だが、ならば一体他の何だと言っただ？

見極めろー俺自身に命令した。

「話を聞こうか。依頼人」

十五話 〈貝原の視点〉 具体的な世界と抽象的な世界について

「まず、君が誰で、こういった意図を持ってここに来たのか。それを説明してもらおう」

静かな声で、俺は切り出した。

「解りました」

少年の声――声質は普通だった。

「まず、私が誰なのかをお話しします。皆さんは驚かれています。と思います。このような姿で、このような場所に、このような金銭を持って現れた私に対して。しかし、このような姿の方が、これから私が話す事柄を信じて頂ける可能性が高いと認めての所業なのです。それを先にご理解頂きたい」

喋り方と内容が普通じゃなかった。少年は続けた。

「これから私が話す内容は、皆さんの常識の中では有り得ない事に属するでしょう。有り得ない事を、有り得る人間が話したところで、精神に異常をきたしていると思われるのが関の山。だからこそ、有り得ない姿を持って話す事で、少しでも信憑性を高めたかったという訳です」

有り得る人間――大人。

有り得ない姿――少年。

姿を自由に変えられるとでも言いたいのか？

「その通りです」

――！

驚愕。少年を見る。完全に無表情――困惑した。

「驚かれなくても結構です。あなた方の常識の外に私がいる事を証明したかっただけですから」

阿東が俺の膝を叩く。囁くように、
「どういう事？」
と聞いてきた。

「心を読まれた、という事か？」

阿東の質問の返答を、そのまま少年に委ねた。

「概ね、そのような解釈で構いません」

「ちよつといいですか」

桜井が割って入ってきた。

「それって、今貝原さんが考えた事を、彼が当てたって事ですよね？」

「当てたというか、頭の中にあつた疑問にいきなり答えられたという感じだ」

素直な印象を桜井に伝える。桜井は黙って、何かを考え込んでいくようだった。少年が桜井の方へ目を向けた。

「そういう人物に、心当たりがありますね。桜井さん」

桜井の驚いた表情――初めて見た。

「参ったな、本物ですね」

俺に笑顔を振りまきながら、桜井が言った。

「あなたもだ、阿東さん」

阿東に顔を向けた。心当たりのある顔をしていた。

「嘘でしょう?」

「そして、貝原さん。あなたにはない」

「ああ」

なかった。

「ところが、あなたは今回の件に、一番深く関わっているのではありません」

晴雨の予測が当たったという事か?俺も関わっているだ?

巻き込まれているに訂正しろ。

「そうですね。訂正します」

――舌打ち。

「やれやれ」

足掻くのは、無駄なようだった。

「説明を続けてくれ」

白旗を振った。現状では少年の言う事を信じるしかあるまい。だが、何らかのトリックがある可能性も捨てきれない。俺は注意力と観察力を並行して高めた。

「私は、世界です」

「世界？」

「そのような表現でしか、私は自分を証す事が出来ません。皆さんの目には映っていないが、しかし確実に存在する世界。それが私です」

「全然、意味が解らないわ」

怒っているような阿東の声。同感だった。

「ですが、それ以外に表現する語彙がないのです。それに、私が何であるかは現状、大した問題ではない。私が何故ここにいるのか。それが大切なのです」

ホラー映画の怪物が目の前に現れて、俺はホラー映画の怪物だが、それは大した問題ではないと言われている気分だった。

「そう。そういう風に考えて頂けた方が助かります。どうせもう充分理解し難い領域でしょうから、私をホラー映画の怪物だと思ってください」

阿東と桜井が同時に俺を見る。何を考えたの？ 視線がそう言っていた。

「ホラー映画の怪物は、ホラー映画の世界から抜け出して現実の世界へやってきました。その理由は、ホラー映画の世界と、現実の世界を救うため。そういう風に考えてください」

怪物が救世？ミスマッチもいいところだ。

「多少の矛盾には目を瞑って頂きたい。とにかく、二つの世界を救うために、私はここに参りました。二つの世界。現実の世界というのは、今、こうしてあなた方の視界に映っている《具体的な世界》。ホラー映画の世界というのは、皆さんの視界に映ってはいないが存在する《抽象的な世界》——私自身の事です」

「ちょっと待て。すると君は《抽象的な世界》で、《抽象的な世界》から抜け出てきた、つまり自分自身から抜け出てきた？ そう言いたいのか？」

「素晴らしいですね。全くその通りです。私は私自身から抜け出してここへ来ました。皆さんの世界にもオカルトでそういう表現があるでしょう？幽体離脱でしたか。そういうニュアンスで受け取っ

てください」

「抽象的な世界とはどんな世界なんですか？」

桜井の質問。

「それも説明しづらいのですが、つまり形のない世界、概念的な世界だと思ってください。具体的な世界を生きる生物達全ての意識の世界。あなた方の世界のベースとなる世界です」

淡々と質疑応答が繰り返される。淡々と俺達の常識が浸食されていく。

「《具体的な世界》は、あなた方の意識が、《抽象的な世界》において、その具体性を認識しているからこそ、それを保つ事が出来る。形を成す事が出来るのです。今、ここに、このようにして皆さんが在るのも、その結果という訳です」

「つまり、《抽象的な世界》が正常に機能しなくなると、《具体的な世界》の具体性が損なわれる。そういう事か」

「―世界が具体的でなくなる。」

「正にその通りです。そして、そのような事態が、今現実に取りつつある。それこそ、私がここに在る理由なのです」

桜井と阿東へ視線を送る。阿東は半信半疑といった表情。桜井は相変わらずニヤニヤしていた。

「本題に移ってくれ。君の目的は？」

知っていた。《神という概念に一番近い存在》を殺すこと。コーラを啜って、少年が俺に頷いた。

「その事態を解消するため、あなた方にある人物を探して、抹殺して欲しい。それが目的です」

「ある人物とは？」

答えを知った上での空しい問い。桜井と阿東の為に、答えを促した。

「《神という概念に一番近い存在》。この人物が、抽象的な世界の機能を破綻させようとしています」

「どんな方法で？」

「運命という言葉を、皆さんは信じておられますか？」

信じていなかった。

「運命とはずばり、この世界の本質を表す言葉なのですよ。」

皆さんが個々にその運命という決められたレールの上を沿って生きる事。

それが《抽象的な世界》の機能が正常に運行する為の条件なのです。その人物はそれを変えようとしている。

いえ、既に過去、何度か、誰かの運命がその人物によって変えられてきた。それら一つ一つは小さな波紋に過ぎませんでした。しかし、蓄積され大きな波となった。個から全へ、その波は広がっていききました。もう一つ、大きな波紋が加わると、波は洪水となって《

抽象的な世界》、ひいては《具体的な世界》を崩壊させてしまおう。それを防ぎたいのです」

少年は力強く言った。俺はその言葉を力強く否定したかった。俺が今まで生きてきた人生は、俺の意志ではなく、運命というレールの上を歩いてきた結果に過ぎないだろ？

俺が殺し屋になったのも、晴雨と出会ったのも、全て運命が決めたこと？

ふざけるな。

「気持ち解りますが、事実です」

阿東が頭を抱えてうなだれていた。無理もない。俺だって狂いそうだ。

「その《神という概念に一番近い存在》でしたっけ？そいつは結局何なんですか？」

桜井が楽しそうに質問した。こいつは狂ってる。晴雨と同じように。

「《抽象的な世界》です。私と同じです。過去、私と同じように《抽象的な世界》から《具体的な世界》へやってきました」

「おいおい、それは矛盾しているだろう。君は自身の事を《抽象的な世界》と言い切った。しかし、その人物も《抽象的な世界》だというなら、その世界は単一でないという事になる」

「いえ、《抽象的な世界》事態は単一です。そして、本来は意志など持っていない。

あるのは正常な機能を運行させようという本能のみです。

ですから、私がここにいるのも意志ではなく本能によってなのです。しかし、ある時本能に、何らかの意志が生まれてしまった。

原因は不明です。

恐らく、恒久的な運営によって偶然もたらされてしまったトラブル。精密機器、例えばコンピューターに発生したバグと考えて頂くと解りやすいでしょう。本能は本能的に、バグを、つまり意志を外へ追い出しました。外――《具体的な世界》の事です。意志――《神という概念に一番近い存在》の事です。ですからその人物は、過去私であった、私が切り捨てた意志という事になります」

少年はそこで再び、コーラに口をつけた。

「問題は」

俺に強い視線が注がれる。

「その人物が全ての世界において異端児であるという事。

もはやその人物は、《抽象的》、《具体的》の二つの世界の、どちらの住人でもないという事です。

私は《具体的な世界》の皆さんの意識を捉える事は可能ですが、以上の理由から、その人物の意識を捉える事が出来ないのです。だから、その人物が何処で何をしているのか、正確に探る事は出来ない。出来るのは、《具体的な世界》においてその人物に関わった生物から、《抽象的な世界》の痕跡を見出す事のみなのです」

簡単に訳せば、自分のミスの尻拭いが出来ないから、俺達にさせようという事だった。

馬鹿にしている。

怒り――心の中に芽生えた。

「冗談じゃない」

言った。言わなくても伝わる事は解っていた。だが、口が勝手に動いていた。

「お前さんがどうやら本当にこの世界の住人でない事は解った。だが、言い分が勝手すぎるだろう。自分のケツは自分で拭くんだな。少なくとも、トラブルの種を蒔いたのは他ならぬお前自身だ」

少年――表情は変わらなかった。当然かもしれない。意志の無い者に表情が存在する筈もなかった。

「それが出来れば苦労はしないのです。

しかし、私が探すには時間が無さ過ぎるし、そもそも、私には肉体というものが存在しない。一方、その人物は肉体を有している。《具体的な世界》に発生した際に、意志を人間に組み込んだようなのです。お陰でさらに探索が困難になりました。つまり、肉体のない私が、殺害という物理的な手段に及ぶのは不可能なのです」

「嘘をつくな。コーラを飲んでいるじゃないか。完全に物理的な手段だ」

桜井と阿東が同時に俺を見た。不可解――そんな表情だ。

「何だ？」

「コーラなんて、何処にあるの？」

怪訝そうに言う阿東。

「彼、コーラなんて飲んでませんよ？」

苦笑の桜井。

コーラが見えていない？

俺はすでに、狂っているとも言いたいのか？

少年が俺に首を振った。かすかにだが、笑っているように見えた。

十六話 〈貝原の視点〉 契約成立

「何を言ってる？そこにあるじゃないか」

俺はテーブルに置かれているコーラを指差した。

阿東が首を振った。

「無いわ。コーラなんて、どこにもないわよ」

「無いですよ」

「馬鹿を言うな！」

怒鳴った。冷静になれない。だが、コーラは確かにそこにある。落ち着けなかった。

「私は皆さんの意識に、《一億円の現金を持つ少年》という認識を与えたに過ぎません。貝原さんの意識の中に、《少年はコーラを飲む》という印象が強くあつたんでしょう。だから貝原さんの目にはコーラが映った。他の方々にもそのような印象は無かった。だからコーラが見えない。それだけです」

こいつは最初に言っていた。姿を自由に換えられる。認識で自由に変えられる。そういう事なのか。

少年はコーラを飲む――昨日、ファミリーレストランでコーラを飲む桜井が少年のように見えた。それが理由だというのか。

「じゃあ、ここにいる三人には、お前が異なった姿で見えているのか？」

俺は阿東と桜井に少年の風貌を尋ねた。

阿東の目には眼鏡を掛けてきりつとした優秀そうな少年が映っていた。

桜井の目にはシャツと短パンの腕白そうな少年が映っていた。

「解つて頂けたでしょうか？何でしたら…」

瞬きより早く、少年の姿が少女に、少女の姿がたくましい男性の姿に変わった。そして再び、少年の姿に戻った。

疑惑が完全に消し飛ぶ。トリックなど存在する筈がない。

阿東は額を押さえ、今見たものを記憶から消し去ろうとしているようだ。

桜井― 一事もあろうに拍手していた。

「これで確信して頂けたでしょう。私に肉体はありません」

確信した。誰よりも、何よりも狂っているのは、他ならぬ世界自身だ。

「その金は？」

「これも《一億円》というあなた方の印象が視覚に認識されたも

のです。

実際には存在しません。

ですが、あるうとなかろうとこれは《一億円》なのです。この世界全体に認識されるように施しました。手に取る事も使う事も可能です。先ほど貝原さんが仰ったように、自分勝手な言い分である事は承知しています。だからこそ、このように金銭を持って、ビジネスとして伺った次第です。私の依頼、受けて頂けませんか？」

この依頼はセンターに届いた。通常なら決定権は阿東にある。

阿東が縊るように俺を見た。

俺は迷っていた。

「即決は出来ん、と言ったら？」

「困ります。時間がありません。今から十四時間以内。今日が明日になる前に、その人物を探して、殺してもらわねば、世界が具体的になくなってしまうです」

「十四時間？時間が無さ過ぎる。今日の夜に、一体何があると言うんだ？」

「誰かの運命が、大きく変わります。」

小さな変化では、崩壊には至りませんから。それが最後の波紋になるでしょう。誰かは解らないし、どのような変化かも解りません。世界はデータとして膨大に過ぎるのです。私がこの危機を察知したのはあなた方の時間に換算すると大体二百時間前になりますが、その程度の猶予では、やはり特定は出来ませんでした」

「ならば、どうやって探す？関わっていると言っていたが、俺にそんな心当たりはない。そもそも、だったら何故お前はこんなギリギリで俺達の前に現れたんだ？」

「私は二百時間前から、この世界におけるその人物の痕跡を探ってきました。関わっている何人かの方々に協力を要請しましたが、どれも的を射るには足りませんでした」

何人か――その中に晴雨もいるはずだ。

少年は目だけで、俺に頷く。

「ところが昨日になって、やけに強い気配を感じたんです。その大元を探していたら、貝原さん、あなたに辿り着きました。そして、桜井さんと阿東さんから、貝原さんほどではないにしろ痕跡が伺えた。ですからセンターにてあなたを待たせて頂いたのです。ヒントは、貝原さん。あなた自身にある筈なのです。お願いします。何とか探してください。あなた方にしか出来ないのです」

「無茶を言わないで。そんな依頼は……」

「受けましようよ」

阿東の言葉を桜井が遮った。

「こんな面白い依頼、受けなかったら一生後悔しますって。ねえ、貝原さん」

「黙ってる」

興味とかそういうレベルで受けられる依頼ではなかった。

「その人物の事をもう少し詳しく聞かせろ。お前自身には、何か心当たりはないのか」

少年に尋ねた。いくらなんでも、この条件で制限時間が十四時間以内というのは、無茶を通り越して無謀すぎる。

「そうですね。その人物の性別や容姿は定かではありませんが、私と同じような事が出来ると思います」

「心を読んだり、姿を変えたりという事か？」

「肉体を持っているので、姿を変える事は出来ないでしょう。心を読む事は可能な筈です。もっとも、読むというのは正確な表現ではないですが。あなた方の運命を覗いて、あなた方の思考を感じとる。それが過去であれ未来であれね。そういう事は出来るでしょう」

「なら、今この瞬間にさえ、そいつは俺達を覗いているかもしれないという事か？」

「大丈夫でしょう。私としても、それは懸念する事態ですからね。防御策はとっております。雨です。雨が降っている時間と場所に、その人物は干渉出来ません。肉体を持ったその人物には、何故かそういう制約が生まれてしまったのです。だからこそ、雨が降っている時間を選んで、私は皆さんの前に現れたのです」

「しかし、大したヒントにはならんな。それが解ったところで、現状が変わる訳でもない」

「まあ、その通りです。ですが、彼を殺すなら雨が降っている時間がベスト。それだけは間違いありません」

「そう都合よく、雨が降ってくれるとも思えんがね」

「運命を信じてください。あなた方が生きようとするなら、運命が味方をする筈ですよ」

「世界が具体的でなくなったら、俺達は死ぬという事か？」

「生も死もなくなるでしょう。具体性が無くなるのですから、生きるも死ぬも曖昧になる。肉体が肉体という具体性を持つ事をやめる。それは死とは言えないかもしれない。しかし、確実に生でもない」

「十四時間か」

呟いた。十四時間後に世界はそうなる。俺達から具体性が失われる。全ての人間の命が曖昧になる。

とんだオカルト。とんだ与太。だが、それを信じる事が出来るくらいのリアリティを、目の前の少年は持っている。

「一つ、聞かせろ」

「何でしょう？」

「この金は、現実に使えと言ったな？」

俺はスーツケースに目をやった。

「はい」

「認識を自由に変えられるとも言った」

「はい」

俺は考える。俺には《殺し》しかない。センターが潰れれば、世界が具体的であろうとなかろうと、俺の存在など曖昧に過ぎる。

「報酬を百倍にしろ。それが依頼を受ける条件だ」

「貝原さん!？」

阿東の叫び。俺は阿東に目を向けた。

「少なくとも、こいつは嘘をついていない。世界が具体的でなくなったら、俺達がこうして喋る事も出来なくなるんだろう。死ぬならまだしも、そんな気味の悪い事態は御免だ。それに、逆に考えれば、今のセンターの経営困難を救えるチャンスかもしれない。所詮俺達は宮仕えだ。会社の為に、一肌脱いでやろうじゃないか」

俺は少年に答えを促す。

「可能ですよ。ではこの一億円は手付け金という事にしましょう。残りの九十九億は、成功後にお支払いします」

俺は、初めて少年に笑いかけた。

「契約成立だ」

「ちょっと待ってよ」

阿東が俺の裾を掴む。

「私はまだ、信じる事が出来ないわ」

「解ってるさ。あんたは何もしなくていい。動くのは俺と桜井だ」

桜井ー一口の端を釣り上げて笑った。

丁度いい。ついでにこいつの目的も調べてやろう。

「解ったわ。貝原さんがそう言うなら、私は止めない」

「ありがとうございます。私の方からも、色々探ってみます。雨が降るたび、あなた方の前に現れて報告いたしますよ」

「勝手にしてくれ。俺は俺が助かりたいから動くだけだ。それより、報酬の件、忘れるなよ」

「心得ています。それでは、成功をお祈りしていましたよ」

少年の姿が薄くなり、消えた。誰も驚かなかった。スーツケースだけが、少年がいた痕跡として、ソファアの上に転がっていた。

やれやれ、世界が何に祈るというのだ？

十七話 〈貝原の視点〉 桜井の心当たり、そして晴雨の欲望を探る

「さて、時間がない。これからについてのミーティングを始めるぞ」

少年の消えた部屋で俺は言った。腕時計を確認する。午前十時半――今日が明日になるまでの残り時間は、あと十三時間半。

桜井は少年の座っていた場所を興味深そうに眺め、やがてそこへ座った。

「ミーティングって言ったって、どうするの？」

俺の隣で、阿東が投げやりに聞いてきた。

「お前達の心当たりを聞かせてくれ。あいつが言っていた。俺には心当たりはないが、お前達にはあるってな」

阿東が黙る。心当たりがあるのは確かなようだ。

「教えてくれ」

「心当たりって言っても、そんな大したものじゃないわ。何のヒントにもなりはしないと思うし」

「どんな事でも構わない。今は些細でも、情報が必要なんだ」

何かを考えている様子の阿東に、桜井が身を乗り出して、肩を叩いた。

「まあ、いいんじゃないですか。何かプライベートな事なんですよ。俺から先に話しますよ」

気を利かせているというより、早く喋りたくて仕方ないという感じだ。だが、今はそんな事はどうでもいい。俺は桜井を促した。

「言ってくれ」

両手を頭の後ろに置く桜井。やけに、自慢気な仕草が鼻につく。

「その前に聞きたいんですけど、阿東さん。貝原さんには、もう俺の事話しました？」

唐突な質問に、俺も阿東も目を合わせた。

俺の事――晴雨の息子である事。殺し屋の息子である事。

「話したみたいです。それじゃ貝原さん、色々考えているんじゃないですか？俺が貝原さんを恨んでいるんじゃないか、とか、父さんが何か企んでいるんじゃないか、とかね」

桜井の言いたい事――解らなかった。何故、今こんな事を話す必要がある？

「何が言いたい？」

「いや、俺の心当たりっていうの、実はこの事に深く関係してるんですよ。俺が殺し屋になろうとしたきっかけっていうか、殺し屋という職業を知った原因っていうか」

「晴雨に聞いたんじゃないのか？」

「まさか。父さんはちよつと変わったところもあるけど、家じゃ普通の親父でしたよ。自分が殺し屋である事なんて、おくびにも出していませんでした。父が殺し屋である事を知ったのは、全く関係のない人間の情報です」

「誰だ？」

「母が死んだ時、俺は高校一年生でした。人並みに悲しんでましたよ。当時十六の、ただのガキでしたから」

桜井の俺に対する視線――楽しそうだった。俺は表情を変えなかった。

「憔悴しきっているころ、学校で同級生が話しかけてきたんです。それまで面識もない奴だったから驚きました。そいつは俺に言ったんです。《お母さんが殺された理由を知りたくはないか？》ってね」

桜井の態度――脚を大きく組んでいた。

「びつくりしました。こいつは何を言ってるんだろう？当然の疑問が頭をよぎります。でも、次の瞬間には、もう聞いてました。知りたい、教えてくれってね。何ですかね。俺、その時こいつは知ってるって思ったんですよ。確実に知ってるって、確信してました。そしてそいつはこう答えたんです。《君の母親は、君の父親の欲望によって殺されたんだ》ってね」

話が飲み込めない。不可解な桜井の同級生の事もそうだが、それ

よりもそいつの言葉…。

桜井の母親、晴雨の妻を殺したのは俺だ。そこに晴雨の欲望があった？

まさか…。いや、まさかそんな事が…。

脳裏に、俺自身が昨日桜井に言った言葉がよぎる。

『相手を《殺したい》と思うのが依頼人で、《殺す》のが俺達だ』
《殺したい》という欲望——依頼人のもの。

殺害の実行——俺達の仕事。

晴雨の欲望によって殺された——依頼人が晴雨だった？自分自身が妻を殺すように依頼し、その仕事の講師を買ってでた？

「もしかして、今の言葉だけで解っちゃいました？」

「解るわけないだろう。続ける」

ばれる嘘。桜井は俺の推測に気付いた。阿東が俺達を交互に見る。どういう事なのかしら？そう聞きたそうだった。

「俺は全然、意味解らなかつたんで、問い詰めました。父が母を殺したとでも言うのかって。

そいつは《殺したのは君の父ではないが、殺すように差し向けたのは君の父だ》って、そう答えました。それからそいつ、センターについて俺に話し始めたんですよ。依頼を受けて人を殺す会社の話。

そこにいる殺し屋達。その殺し屋を務めているのが俺の父。母を殺す依頼をしたのも、俺の父。母を殺したのは父が講師を務めた新人の殺し屋。貝原さん、あなたの事ですよね？」

俺は答えなかった。どう答えていいのか解らなかった。何をどのように考えたらいいか解らなかった。

静寂が部屋を支配している。桜井の目に変化はない。阿東は口を両手で押さえて驚愕していた。誰も口を開かなかった。俺は何をどのように考えたらいいか考えた。

桜井の心当たり――桜井に母親が殺された事の真相を教えた同級生。当時高校生のガキが、センターについて、そして晴雨の欲望を何故知っていたのか。

推測――その同級生が《神という概念に一番近い存在》であるから。あの少年が言う、関わりがそれであつたとしたら、その可能性は極めて高い。

晴雨の欲望――妻を殺したかつた。だからセンターに依頼した？

違う。晴雨なら、自分で簡単に妻を殺せる。金を払って、そんな回りくどい事をする必要はない。なら、何故依頼した？

推測――妻を《殺したい》のではなく、《殺させ》たかつた。新人の俺に？しかし、そんな事をして、何の意味があるというのだ？

思い出せ。

俺は初仕事について、刹那に記憶を辿る事にした。ゆっくりいき

たいところだが、何せ、時間が無さ過ぎるのだ。

十八話 〈貝原の視点〉 原点から振り返る

初めて殺しをしたのは、十一年前。俺が二十五の時の事だ。

当時の俺――ぎらついていた。殺しを職業とする事に、興奮を隠す事が出来なかった。実際に、人を殺すまでは。

俺が殺し屋になった理由。

殺しがしたいからではなく、金が欲しかったからだ。それまで俺は、喧嘩の腕だけで生きてきた。喧嘩が強かった。しかし、喧嘩が好きなわけではなかった。それでも、俺には喧嘩しかなかった。

俺は貧乏な家に生まれた。

家が貧乏だったのは、親父がギャンブルに溺れ、おふくろが他の男にひたすら貢いでいた事に起因する。

夫婦で、奴らは数千万の借金をしていた。

家には、毎日、昼夜を問わず分刻みで催促の電話が鳴り響く。親父が電話線を抜くと、今度はブザーが鳴り続ける。

狭いアパートだった。ガキだった俺は耳を塞ぎ、部屋の隅に縮こまった。おふくろは窓という窓に、ダンボールやら布やらを貼り付け、あらゆる光を拒絶した。

いつしか、親父とおふくろに殴られるようになった。電話が鳴るたび、ブザーが鳴るたび、奴らは俺の顔を、腹を殴った。

『お前の教育に金を使ったから、こんな事になったんだ』

『そうよ。そのくせ、あんたはなんでこんなに頭が悪いの』

ふざけた話だった。俺は奴らの暴力のせいで、満足に小学校に通った記憶もない。

初めはやめてくれと懇願したが、何度も殴られているうちに、慣れた。ただ、無言で殴られ続けるようになった。

一つだけ耐えきれなかったのは、奴らがコーヒープレイクと称して、煮えたぎった黒い汁を、裸の背中にかけてきた事だ。あればかりは、慣れる事なく、泣き叫ばずにはいられない苦痛だった。

中学に入ると、喧嘩を覚える。喧嘩をすれば、負かした奴から金を奪えるという事に気付いた。あの頃、俺の栄養の供給源は給食しかなかった。

俺はひたすら、同級生から上級生に至るまで、殴り続けた。金を奪い続けた。何とか飯は食えるようになる。だが、結果として、一年間年少にぶち込まれた。

一度だけ、奴らは俺の面会に来た。

『育ててもらった恩を忘れて…、この恥知らずが』

まるで、練習でもしてきたというように、奴らは声を揃えてこう言った。

その時、俺は決意した。

奴らをぶちのめす力はすでに俺にはある。だが、そんな方法で、痛めつけたくはない。大金持ちになってやる。大金持ちになった俺を奴らに見せつけて、一銭もくれてやらない――。

くだらない考えだ。くだらないが、その時の俺にとっては、行動全ての原動力だった。

年少に、俺のケツを狙っている阿呆がいた。確か、二つ年上のシヤブ中だ。

俺の房は六人部屋で、そいつが頭を張っていた。ある夜、そいつの部下四人に羽交い締めになれ、ケツを掘られた。肛門が裂け、糞を垂れ流した。

屈辱――あれほどの屈辱を受けたのは初めてだった。

痛み――あれほどの痛みを覚えたのは初めてだった。

次の日の夜も、その次の日の夜も、俺はそいつに犯され続け、精子を顔面にかけられた。

年少にはティッシュがない。俺の布団はイヤでもイカと糞臭くなつた。

さらに次の日の夜。流石に疲れたのか、奴らは全員いびきをかいて寝ていた。

俺は一人ずつ、口を押さえて、鼻を潰していった。鼻血で窒息しそうになると、僅かに離して、また塞いだ。それを三回程繰り返すと、皆、完全に気を失った。

部下が全員気を失うと、俺はシャブ中を叩き起こし、殴り続けた。看守（正確には教官だ）に気づかれないよう気を配りながら、顔を、腹を殴った。

気を失いかけるころ、俺は奴のタマを握りつぶした。絶叫。看守が飛んでやってきた。その前に、なんとか奴のケツにぶち込んでやるうと思っただが、勃たなかった。

それで数ヶ月刑期が伸びる。外に出ると、俺を待っていたのは両親などではなく、先に出所（退院）したシャブ中だった。

報復――一五、六人のチンピラを連れて、俺を袋にしようとする。

返り討ちにした。奴らの親玉に目をかけられた。親玉――チンケなヤクザだ。

大金をくれてやる。だからうちの用心棒になれ――。

大金という言葉に惹かれ、俺はヤクザの用心棒を始めた。それが十六の時の話だ。

実際貰えたのは、大した額じゃなかった。それでも、喧嘩しかない年少上がりの俺に、出来る事はそれしかなかった。

何度も殺されそうになった。その度、俺を殺そうとした奴を半殺しにしてきた。殺した事は一度もない。何度か、また臭い飯を喰う

ハメにもなった。

つまらない人生だった。

俺は両親を呪った。俺の人生をつまらなくした元凶である両親を呪った。それでも、俺は目的を果たす為に、つまらない事を繰り返していた。

やがて、俺の噂が裏社会に広まった。

ある時、センターの人間に声をかけられた。あなたにぴったりの職業があるーそう言われた。

殺し屋について聞かされる。殺し屋になれば、今より遥かに高い報酬を受け取れる事を知った。今より遥かに目的に近付ける事を知った。

次の日、俺は殺し屋に志願する。研修でAランクを取り、初仕事が始まった。

講師の、晴雨に出会った。

初めて晴雨を見た時、愕然とした。

底知れぬ強さを感じた。俺はこの男にとって、食われる側の生物であるという認識を持つ。

この男は俺よりも強い。生まれて初めてそう思った。そんな人間は、今まで誰一人として存在しなかったのだ。

ターゲットが、晴雨の妻であるという事は、晴雨本人から聞かされた。

『因果なものですねえ。職業柄、こういう事も有り得ると思っ
ていましたが、まさか本当に廻ってくるとは思いませんでしたよ』

その時の晴雨の表情――嬉しそだった。その時の晴雨の俺を見る目――玩具を見つめる少年の目だ。

俺はこの男が苦手だ。今に至るまで変わる事のない、晴雨に対する第一印象。

自分の妻をこれから俺に殺される事について、辛くはないか、憎くはないのかと、俺は尋ねた。

『さあ、どうでしょう。一つだけ言えるのは、私は妻を愛している。そして、仕事も愛している。秤には掛けられないという事です』

俺はその答えに、曖昧に過ぎるその答えに、ただ不気味な印象を持つことしか出来なかった。

『そんな事より、貝原さん。あなたが気にするべきは初仕事についてだ。私はあなたに期待しています。私以来、初めて研修成績をAで終えた新人のあなたに。貝原さんは、今までに人を殺した事がありますか？』

俺はないと答える。

『なら、より一層楽しみですな』

そして晴雨はホッホと笑った。

そして俺は、晴雨の妻を殺した。

あの日も雨が降っていた。晴雨の自宅。デカイ家。家の前で、俺は殺すという事について考える。隣に立つ晴雨が俺を促す。俺は考えるのを止める。

玄関。晴雨の妻が迎える。エプロンを掛けたその姿は普通の主婦だった。

僅かな興奮――俺の中に芽生える。性欲ではない。幻想だった。人を殺す事に対する幻想――誰かの母を俺の母に見立てる幻想。

打ち消す。これは俺のおふくろじゃない。それに、俺の目的は殺しじゃない。

お帰りなさい――。

それが、晴雨の妻の、桜井の母の最後の言葉。

簡単だった。腹を殴って、首筋を裂いた。それだけで死んだ。高揚感も達成感もない。

晴雨は素晴らしいと言っていた。嬉しくもなんともない。

目の前で妻が俺に殺されても、晴雨は眉一つ動かさない。ただ、微笑んでいるだけだった。

妻を愛している――嘘だと思った。だが、そう思っても、この時、

俺の腹の中に気持ちの悪いモノが生まれる。

ひたすら気分が悪かった。しばらくの間、俺はその正体不明の異物に悩まされる。やがて、異物の正体に気が付いた。

罪悪感。俺は晴雨に対する罪悪感に苛まされていたのだ。晴雨は妻の事など愛してなどいない。頭の中では解っていた。しかし、言葉が体中で暴れ回る。

「晴雨の愛する者を奪った」

何故だ？何故俺はこんな事で苦しんでいる？自問自答。答えは出ない。ひたすら悩んだ。

「晴雨の愛する者を奪った」

言葉は消えない。次の仕事でまた誰かを殺した。罪悪感は生まれなかった。

「晴雨の愛する者を奪った」

その言葉が響いているだけだった。

何度か仕事をこなして、俺はようやく、罪悪感の理由を理解した。

俺は晴雨を恐れていた。初めて出会った己より強大な存在である晴雨を恐れていた。

その晴雨に、《愛する者を奪った》という弱みをつくった事を、晴雨が俺を《殺すに足りる》理由をつくった事を、俺は恐れていたのだ。当時尊大だった俺は、恐れているという事実を恥じ、それを

罪悪感という言葉に変換して誤魔化した。

自分の弱さと、晴雨の強さを呪った。俺は晴雨に侵されていた。あるいは犯されていた。

屈辱——こんな屈辱を覚えたのは初めてだ。

晴雨という存在に呑み込まれていた。

俺は晴雨が苦手だ——自分より強いから、自分より強い晴雨が俺を殺す理由を持っているから——。

だから、俺は晴雨が苦手だった。

初仕事の後に、何度も晴雨と会ったが、会ったたびに、俺は自分の中の、弱さという魔物と闘った。

こいつを越える。そう言い聞かせ、魔物を振り払ってきた。

だが、どんなに仕事を重ねても、どんなに殺しが上手くなっても、晴雨に近付けた気はしなかった。逆に、強くなればなるほど、晴雨の強大さを実感してしまう。

どうすれば晴雨を越えられるのか。その答えが出ないまま、何年かが過ぎた。そして、晴雨がセンターを去ると、関わりなくなったせいか、次第に恐怖は薄らいでいった。

両親に会いに行った。両親は行方不明になっていた。何もかもが薄らいでいく。

俺は目的を失った。金に対する欲も、晴雨に対する超越も。

そして、今――。

晴雨が自分の意志で俺に妻を殺させた事が解った。

晴雨の言う、偶然によって発生した浅からぬ縁――晴雨が意図的に創りあげたものだとは判明した。

その目的は解らない。ただ、全ての偶然は晴雨が欲望によって生み出した必然だ――そう感じた。

五年ぶりの再会。奇妙な依頼の話。息子の桜井。俺の前に現れた《抽象的な世界》。

『その依頼を、個人的にでも受ける事があつたら、私にも協力出来る事があると思うんですよ』

晴雨はそう言っていた。

『《神という概念に一番近い存在》に、心当たりがあるんです――』

まるで、こうなる事全てを予想していたかのように。

鍵は晴雨が握っている。

十九話 《貝原の視点》 桜井は語る、阿東は黙る

「ねえ、いつまで黙ってるんです？ 答えてくださいよ、貝原さん」

俺の反応を楽しそうに待っている桜井によって、静寂が破られた。

「その通りだ」

俺は感情を込めずに言う。少し、桜井が意外そうな顔をした。

「俺はお前の母親を殺した。それが晴雨の意志であっても、殺したのは俺だ。それで満足か？」

「ちょっと、貝原さん？」

阿東が、困ったように俺の顔を覗き込んだ。

「悪いが、その事でお前に詫びる気はないぞ。殺し屋つてのはそういうものだ」

「勘違いしないでください。俺は別に恨んでいる訳じゃ……」

「楽しんでるんだろう？ 俺が罪悪感に苛まされるのを」

晴雨のように。

「違いますって。俺は貝原さんを尊敬しているんです」

「やれやれ」

立ち上がった。桜井の胸倉を掴み、立たせ、そのまま壁に押し付ける。肘が、桜井のスーツの中にあるナイフの存在を察知した。俺は桜井の懷からナイフを取り出し、首筋に突きつけた。

「あんまり、俺を舐めるなよ小僧。余計な事を喋るな。お前がどう思っていようと、関係ないんだよ。とにかく、お前は《神という概念に一番近い存在》についての心当たりを話せばいい。時間がないんだ。俺に無駄な事をさせるな」

殺気を全開にして桜井にぶつけた。桜井は抗おうとはしなかった。しかし、表情は殺し屋になっている。

殺気と殺気のぶつかり合い。先に折れたのは桜井の方だった。

「解りました。すみません、悪ふざけが過ぎましたよ」

桜井を離れた。俺がソファーに戻ると、桜井はフーッと息を吐き出す。阿東はため息をついていた。桜井はその場に立ったまま、腕を組んでいる。ナイフを桜井に放る。受け取ると、懷に収めてから桜井が口を開いた。

「とにかく、そんな訳で俺は殺し屋について知ったんですよ。

もちろん、そいつの話だけで納得したわけじゃない。

父に聞きました。

父さんは殺し屋なのか、って。

後にも先にも、父さんがあんなに驚いた顔をしたのは初めてですよ。当然、誰から聞いた？って尋ねられました。俺は何て答えればいいか解んなくて、黙っちゃいました。しばらく沈黙が続いて、俺が破りました。母さんが死んだのは父さんの欲望のせいなのかって。そ

したら、俺が知る限り、一番優しい顔になって、父はこう言ったんです」

わざとらしい間。少し苛ついたが、我慢した。

「誰から聞いたのか知らないが、それは確かに真実だよー。ただ、その事について詳しく話す事は出来ない。話したところで、お前は理解出来ないだろう。もし、この場で父さんをこれ以上追求するなら、父さん、お前を殺すよ。お前は私の血を引いてる。いつか解る時がくる。そう信じている。それが解ったら、きちんと話をしようー」

晴雨は狂ってる。俺の両親も愚かだったが、ここまで狂ってはいなかった。俺は桜井を憐れんだ。晴雨の息子である事を憐れんだ。

抽象的な世界よ。これが運命だと言うなら、全て決められた事だと言うなら、お前が正常に機能する事自体、間違っている。

「それで、俺は解ろうとした訳です。その同級生に、殺し屋になる方法を聞きました。なんか、もう疑う余地なくこいつは知ってるって思ってた。そしたらやっぱり知ってました。センターの場所も面接方法も、研修が過酷である事も」

「しかし、十一年も前の話だろう？何故今になって殺し屋になった？」

「いや、俺、怠け者で、過酷とか嫌いなんですよ。まあ、俺は父の息子だし、適当に考えてりゃ解るかなって。それからずっとブラブラして、適当にホストやったりして生きてたんですけどね、何か違うなって、思い始めて。女騙すの面倒だし、大体一番強い奴は俺

なのに、なんで一々先輩だのに頭下げなきゃならないのか解んなくなってきたちゃって」

そこで桜井は鼻柱を掻いた。

「ついつい、一人殴り殺しそうになっちゃったんですよ。まあ、実際半身不随までぶちのめしちゃったんです。で、クビになったし軽く懲役くらうしで、散々な目に合いました。刑期にずっと父の事考えてたんですけど、まあ、結局解らずじまいで、出所したら、仕方ないから殺し屋にでもなってみるかなって、それで今に至るんですよ」

こいつは、もしかしたら俺に似ているのかもしれない。初めて、僅かだが桜井に親近感を持った。

「父は五年前に独立するとかで家を出たつきり、会ってませんでした。連絡先だけは置いていったんですけどね。

殺し屋になって、初めて父に連絡してみたんです。そしたら、貝原さんに講師を勤めてもらえって言うんですよ。ちょっとびっくりしました。同級生から母を殺したのは貝原って名前の殺し屋だって聞いてましたし。まあ、でも俺も一度会ってみたかったし、そうしようと思って、それで昨日、貝原さんに会ったんですよ」

全てを喋って、桜井は満足そうだった。桜井の話の同級生が《神という概念に一番近い存在》だったとすると、桜井の運命は、やはり、その人物に変えられた事になる。

……………？

何かが腑に落ちない。そうだ。昨日阿東と話した時には特に何も思わなかったが、今の桜井の話を聞くと、何かの辻褄が合わなくなる。

一体、それは何だ？

「一度だけ、その同級生に、お前は どうして そんな事知ってるんだって 尋ねた 事があります」

俺の疑問――桜井の言葉に打ち消される。

「そいつは一言、『僕は何でも知ってるんだ』って、それだけ言っ
て、口を開きませんでした」

隣の阿東が僅かに震えた。

「その同級生と、今は連絡取ってないのか？」

「高校出たきり、一度も会ってませんよ。ああ、でも当時の名簿
家に残ってたと思うから、それでよければ住所は判りますよ」

十年以上前の住所。当てになるとは思えなかった。だが、今は時
間がない。藁にでも縋るべきだった。

「お前の家、遠いのか？」

「車で二十分くらいですよ」

「車でここに来たんだな？」

「はい。この雨だったし、阿東さんもすぐ来るように言ってたし」

桜井が阿東と言って、阿東の心当たりを聞く事を思い出した。

「よし。それじゃ車でお前の家に向かおう。その前に、阿東。あなたの心当たりを教えてくれ」

阿東は目を逸らした。言いたくないようだ。

「阿東、これは仕事だ」

「ごめんなさい。言いたくないわ」

逸らしたまま阿東が言った。こんな頑なな阿東を見るのは初めてだ。何かある。

「だが、日付が変わる前にそいつを見つけないと、世界が具体的にでなくなってしまうんだぞ？」

言いながら、ふざけた表現である事を改めて実感する。何が、世界が具体的にでなくなるだ。

「そんな話を本気で信じているの？貝原さんは」

こちらに向き直って阿東が言った。

「信じたくはないが、あんなものを見せられれば、信じざるを得ないだろう」

「私達、みんなで白昼夢でも見たのよ。そうに違いはないわ」

白昼夢。そうであつたらどれだけ楽か。だが、ソファアに無造作に置かれた一億円入りのスニーカーが白昼夢を否定していた。俺はスニーカーを手を取った。

本当は存在していないはずの金。しかし、それには確かに重みがあった。

一億の重み。

「これが証拠だよ。阿東、残念ながら、あれは現実起こった事なんだ。見てしまい、どうやら関わっている俺達には、逃げる事は出来なそうだ」

そう。逃げる事は出来ない。晴雨の事を思い出してから、俺の決意も頑なになっていた。

鍵を握っているのが晴雨なら、逃げる事は出来ない。逃げる訳にはいかない。

「さあ、どうする」

阿東を問い詰める。しかし、阿東もまた、やはり頑なだった。

「例え世界がどうなろうと、言いたくない事もあるのよ。貝原さん、言ったわよね。あんたは何もしなくていいって。悪いけど、本当に、何もする気はないわ」

硬い決意。阿東からひしひし伝わっていた。俺は諦めた。こういう人間はどんな拷問を受けようと、喋らないと言ったら喋らない。

「いいじゃないですか。とりあえず、俺の心当たりを探ってみれば」

とりあえず、という程の余裕もないが、ここで阿東を問い詰める事は確かに時間の無駄だろう。桜井に頷き、立ち上がった。

「そうだな。それじゃ阿東、気が向いたら連絡をくれ。桜井、携帯持ってるな？」

「持ってますけど、貝原さん、持ってないんですか？」

「俺には必要なかったんでな」

言つて、俺は桜井と共に、リラックスルームを出た。阿東――見向きもしなかった。

センター地下駐車場へ――桜井の車に乗った。黒のメルセデスベントツ。

父の車なんですよ――桜井が言った。乗るのに少し気が引けたが、贅沢を言っている場合じゃなかった。

時刻は午前十一時を過ぎている。タイムリミットまで、十三時間を切った。

二十話 〈貝原の視点〉 貝原と桜井、すべき事はもはや一つ

桜井が運転、俺は助手席に座った。流れていく景色。雲間から光が射している。雨は止んでいた。ようやく晴れた。

雨が降っていない場合は覗かれる。今も覗かれているのだろうか。あなたの場合は少し違う。それに、覗くだけならいつでも覗ける。

考えた所で、どうにもならない。俺は考えるのをやめた。懸命だ。

時計を見る。十一時半になろうとしていた。今日中に、《神という概念に一番近い存在》を探しだし、殺す。

ミッション・インポッシブル。だが、こなさねばならない。世界の為に？違う。俺自身の存続の為に。

晴雨を超える為に。そう。あなたにとって一番大事なのはそれだ。

「貝原さん、母の話なんですけど」

運転しながら、俺を見ずに桜井が言った。

「何だ」

「俺、本当に貝原さんの事恨んでませんよ。」

そりゃあ、ガキの頃は憎くて仕方なかったけど、今は違います。

なんていうか、格好いいんですよ。

俺も結構やんちゃな方で、昔頃から喧嘩ばかりしてました。

人殴るのって、面白いじゃないですか。

なんていうか、ようするに、俺ってやっぱり生き物なんだなって感じる瞬間ですよ。

強いから、弱い者を食らう。

地球上に生きる生物の当然の権利ですよ。

その権利を施行してるだけなのに、世間ってのは暴力反対だの、人類平等だの、つまらないお為こかしを騒いでる。

頭悪いって思ってた。

殺し屋って、そういう阿呆どもぶっ殺す商売だと思うんですよ。

母は阿呆じゃないけど、食われる側だった。

それって、仕方のない事なんだなって、そう思えました。

父も貝原さんも、強者の権利に乗っ取っただけ。そう考えたら、二人に凄く憧れましたよ。父も貝原さんも、この業界でトップの実績を持ってる。弱肉強食のピラミッドの頂点に立っている。本当に尊敬してますよ。さっきは本当にすいませんでした。俺、ちょっと調子に乗ると、人に喧嘩売っちゃう癖があるんです」

歪んでいた。桜井は極めて歪んでいた。こいつの幻想の正体——今解った。

昨日、桜井はターゲットに殺意を見せなかった。弱いから。強者の権利を楽しく施行するだけでよかった

昨日、桜井は俺に殺意を見せた。強いから、ピラミッドの頂点に立ちたいから。

いずれ、こいつは本気で、俺に喧嘩を売ってくる。確信に近い予感がした。

その時は買ってやろう。こいつの哀れな運命と幻想に、俺が終止符を打ってやろう。

例え、それすら俺の運命の範疇に過ぎないとしても。

「お前の話は解った。だが、今は運転に集中しろ」

「はい」

今までで一番素直な返事。改めて、俺は桜井を憐れんだ。

桜井の家に到着する。晴雨が住んでいた家。『お前の家、遠いのか？』――愚問だった。俺はこの家で、桜井の母を、晴雨の妻を殺した。

高級住宅街。金持ちの集まる場所。そこに住む桜井。そして、金持ちの家に住みたかった過去の俺。

愚かしかった。金があれば、幸せになれると思っていた。金がある家に生まれた奴は、誰しも幸せだと信じ込んでいた。

それが俺の幻想。真実は違う。金があろうとなかろうと、幸せな奴は幸せで、不幸な奴は不幸なのだ。そう。全ては偶然に過ぎない。

貧乏な家に生まれた俺と、裕福な家に生まれた桜井が、等しく不幸であるように。

扉を開け、玄関へ。大理石の床が見える。そこにかつて、晴雨の

妻が転がっていた。

……？

まただ。何かが、何かが違う。何かが間違っていないか？

考えている時間はない。リビングを抜け、階段を登り、桜井の部屋へ。

桜井の部屋――八畳程の広さ。オーディオ、テレビ、ベッド、机、箆笥。壁にはミュージシャンのポスター。普通の部屋だ。

「適当に座ってください。名簿探しますんで」

俺はベッドに腰を下ろす。桜井は部屋中をひっくり返して名簿を探している。見つかるのを待った。

五分が過ぎ、十分が過ぎる。時間の経過を憂いだ。早くしろ――。俺は焦燥に駆られていた。

十五分を過ぎた頃、桜井が名簿を見つけ出した。めくって調べる。1年D組――そこで止まった。桜井隼人の名前があった。

「こいつです」

桜井はその同級生の名が記してある箇所を指差した。平凡な名前だ。俺はその名前と、併せて記載されている住所を記憶した。

住所――ここからそう遠くない。車で三十分程度の距離だ。

「行くか。時間を無駄に出来ない」

俺達はその住所へ向かった。道路――平日の昼間だ。空いていた。その住所は、とある団地の一部屋だった。名簿に記されているのは、表札が違っている。

期待はしていなかったが、やはり落胆してブザーを押した。

出てきたのは、くたびれた中年女性だった。名簿の名前に心当たりはないか聞いてみる。ないと言われた。中年女性がここに住み始めたのは三年前。以前の住人の名前はよく覚えてないが、この名前ではなかったという。

俺達は礼を言って、車に戻った。時計――十二時半だった。残り十二時間を切っている。

「どうします？手掛かり途絶えちゃいましたけど…。管理人に聞いてみますか？それとも阿東さんをもう一度問い詰めてみますか？」

どちらも効果的とは思えない。俺は考えた――考えたふりをしただけだ。

すべき事はもう、一つしかない。そう。一つしかないんだ。

「携帯を貸してくれ」

「阿東さんに聞くんですね？」

桜井から携帯を受け取り、俺は苦笑する。

「お前の親父さ」

ヒュウーと、桜井が口笛を吹いた。

二十一話 〈僕の視点〉 発端の真相、電話

「もしもし」

二回のコール音で相手が出た。

「お久しぶりです」

僕は言った。ホッホという笑い声が聞こえてきた。

「君ですか。よもや、そちらから連絡があるとは思いませんでしたよ」

「僕もするつもりはありませんでした。少し、状況が変わったんです」

「それはそうですね。お仲間も君の事を探しているようですね」

「彼に会ったみたいですが、彼は僕の仲間なんかじゃありませんよ」

ホッホ。

「相変わらず、何でも知っているようだ」

「ええ、何でも知っています」

「そんな君が、私に何の用です？」

「仕事の話です」

「君はもう、私の仕事を辞めたんでしょう。仕事の途中で姿を消されて、私も困りました。今更、どのような話があるというのです？」

「二つあります。恐らく不可能な方と、多分可能な方。どちらから話しましょう」

「どちらでも結構ですよ」

「じゃあ不可能な方から。今の仕事を中断して欲しいんです」

ホッホ。

「知っているとありますが、不可能ですね」

「じゃあ可能な方。今の仕事の依頼人を殺して欲しいんです」

ホッホ。

「何故でしょうか？」

「依頼人の、娘さんからの依頼です」

ホッホ。

「君の意志も含まれているでしょう」

「よく解りますね」

「大体の事は解っていましたよ。君はターゲットに惚れた。それで、姿を消したんでしょう」

「その通りです」

「だから、ターゲットを殺そうとしている依頼人が憎い。そういう事ですね？」

「その通りです」

「引き受けましょう。料金はサービスします。有能な探り屋だった君への、退職金だと思ってください」

「感謝します。出来れば、早急をお願いしたいんですが」

「いいでしょう。幸い、一時間後に依頼人に会います。ターゲット殺害の手筈が整ったので、最終確認の為にね。そのついでに、彼を殺すとしてしょう」

「助かります」

「死体はどうしますか？」

「僕のマンションに送ってください。今から住所を言います」

僕は住所を教えた。

「いいんですか？私に住まいを教えて」

「構わないでしょう。あなたが僕を殺そうとしても、僕はそれを事前に知る事が出来る」

ホッホ。

「簡単に逃げられる。そう言いたい訳ですね」

「その通りです」

「ですが、私を殺すのは簡単ではありませんよ?」

「僕に殺される心当たりでもあるんですか?」

「ターゲット殺害の阻止には、もはやそのくらいしか方法がないでしょう。依頼人を殺したところで、今の仕事はやめませんから」

「そんなに彼女を殺したいんですか?」

「それが仕事であり、私の欲望ですから」

「僕はあなたを殺します」

「さて、どのような方法で?」

「あなたには想像もつかない方法で」

「大体の想像はついていますよ。貝原さんを使っんでしょう?」

絶句。この男には、僕と同じ能力があるともいうのか。

「何故、解るんです？」

「昨日、貝原さんに会いました。ターゲットの住所の下調べの歸りに。貝原さんが近くに住んでいるのは知っていましたが、会えたのは本当に偶然です。その時、貝原さんから君の気配を感じたんです」

再び絶句した。この男の鋭さ——人間のものとは思えない。

「あなたは、やっぱり凄い人だ」

「君も同様ですよ。どのような方法かは知りませんが、人を操って、人を殺す事が出来るんですから」

それには語弊がある。僕は人を操れる訳じゃない。

「晴雨さんにそう言って頂けて、とても光栄です」

「いえいえ、私を殺すのに、貝原さんを使おうとする君の着眼点は素晴らしいですよ。感謝さえしています。貝原さんと殺し合うのは、私の長年の夢でしたから」

「それはよかったですね。どうか満足して、死んでいてください」

ホッホ。

「しかし、私を殺してしまうと、まずい事になるんじゃないですか？」

「どんな風に？」

「世界が具体的になくなる」

僕は黙った。そうなのかもしれない。そうでないのかもしれない。

「やはりね。私の死か、ターゲットの生存が最後の波紋になるよ
うだ」

「そこまで聞いていたんですね」

「ええ。実際、彼からはあらし全てを聞いていました。《神と
いう概念に一番近い存在》が君である事も、すぐに気がつきました
よ。しかし、彼には気付かれなかったようだ。どうやら本当に、彼
は君に関して、痕跡を見つける事くらいしかできないようです。
そこで思いついたんです。これを利用すれば、私の理想的な形で、
貝原さんと殺し合えるんじゃないかとね」

「僕の方が、彼より一枚上手という事です。この世界にいる期間
は、僕の方が遥かに長い。でも、それなら、何故あなたは貝原とい
う殺し屋に全てを語らなかつたんです？殺し合いたいなら、そちら
の方が手っ取り早いはずだ。それに、あの事だつて…」

「おや、何でも知っているんじゃないのですか？」

「ここのところ、あなたを覗いていませんでしたから」

彼女が死ぬ様を見たくないから。

「なるほど。その理由は簡単だ。私は偶然を愛している。貝原さんとは、運命の下で殺し合いたいんですよ。それに、いきなり全てを話したところで、話の荒唐無稽さが増してしまうだけだ。ボケ老人と思われるのは嫌ですからね」

「貝原は、あなたが狂っていると思ってますがね」

ホッホ。

「狂っているのは、この世界の方でしょう」

「随分、まともな事を言いますね」

「それはどうも。」

さて、どうなりますか。

楽しみで仕方ありません。君の思惑通り、私が死んでターゲットが生き残るか？はたまた、その逆か？どちらが正常な道筋なんでしょう？考えるまでもありませんか。君が望む事の反対。それが世界にとって正常なら、前者で世界は具体的でなくなってしまう。これはいけない。私としたことが、殺されなくなってきましたよ」

「是非、殺されてください」

「世界が具体的になくなったら、君がターゲットと一緒にいる事も不可能ですよ？」

その通りだった。僕は答えなかった。

「そろそろ切ります。サダオの死体を楽しみに待っていますよ」

晴雨の返事を待たずに、僕は通話を切った。

二十二話　〈僕の視点〉　サダオと晴雨

「これで、今日中にサダオは死ぬ。満足かい？」

ルアちゃんに聞いた。ポカンとしていた。

僕はベランダに出て、空を見上げる。ようやく雨はやんだ。雲間から、僅かに青空が垣間見えている。

十一時。彼女が死ぬまであと十三時間。事は、僕の思い通りに進み始めているようだ。

しかし…、新たな懸念が、僕の感情をかき乱し始めている。

ルアちゃんはまだ全裸で、ベッドに腰掛けている。昨夜、説得に成功した。僕が身分を概ね明かしたからだった。

僕は部屋に戻り、ルアちゃんの隣に座った。

「これで契約成立だ」

強い口調で僕は言ったが、ルアちゃんは呆然としているだけだった。

ルアちゃんーセンターの提携するデリバリーヘルスで働いていた。

サダオを殺したいという、十四歳の時に発生したルアちゃんの欲

望は持続している。豚が生きている限り、豚の支配は終わらない。あの豚は今でも、何処かで私に無様な姿を見られる事を想像しながら、精液を垂れ流しているに違いない。

ルアちゃんの欲望――幻想に変化しつつあった。

あの日以来、豚は帰って来なかった。ルアちゃんは豚を探そうと思ったが、探し方が解らなかった。

母は、豚を失った悲しみで、憔悴しきっており、立ち直る事はなかった。さすが豚の妻。愚かで弱いとルアちゃんと思う。高校を出ると、家も出た。豚の建てた家など、豚小屋に過ぎないと思ったからだ。

街を歩いていると、ルアちゃんは風俗のスカウトに声を掛けられた。一人で生きる為には金がいる。ルアちゃんは風俗嬢になった。金は稼げたが、幻想が消える事はない。

いくつかの店を経て楽園へ。客からセンターの存在を聞く事になる。依頼すれば何処の誰でも探し出して殺してくれる会社。楽園の親会社が、そんな理想的な機関であった事に、ルアちゃんは歓喜した。システムを調べ、最低一千万かかる事を知ると、貯める決意を固めた。

「どうした？何で黙っているんだい」

「だって、あたしがずっと望んでた事、こんなに簡単に叶っちゃったから……」

「幸せかい？」

ルアちゃんは頷いた。

「これで、本当にサダオが死ぬなら、私この上なく幸せだと思う」

サダオー晴雨に彼女殺しを依頼した張本人。

僕は晴雨という殺し屋の元で、探り屋をやっていた。運命を覗くというチカラが、仕事に生かせるのだから、探り屋は僕にとって天職だった。

晴雨の探り屋として僕は五年間、彼の殺しを手伝ってきた。初めて晴雨の存在を知ったのは高校時代、同級生だった桜井の運命を覗いた時の事だ。

サダオは三ヶ月前、彼女の殺害を晴雨に依頼する。僕は晴雨と共に、サダオの話を聞いていた。

サダオは彼女について語りだす。

サダオ：彼女に何もかもを奪われた。

娘の信頼も、生活も、自分が愛した幻想の彼女も。

娘に殺されそうになって、その原因となったビデオテープを再生してみると、家にはいられなくなった。

家を出て、仕事も辞めた。

地方で安いアパートを借り、一人で慎ましく暮らしていた。

清掃員として働いていた。

彼女に対する想いが複雑に頭の中を駆け巡った。自分はこういう訳

だか、彼女をまだ愛しているらしい。憎んでもいるらしい。彼女にもう一度会いたい。彼女とセックスがしたい。彼女に支配されたい。しかし、同時に彼女を殺したい、彼女とセックスがしたい、彼女を支配したいという欲求も生まれてくる。どうすればいいのか解らなかった。

晴雨：では、あなたはここへ何をしにきたのですかな。

サダオ：私は清掃員になったが、それは一般の清掃とは違い、マグロ拾いという種類の清掃だった。つまり、電車の人身事故やそういう類の死体を片付ける清掃なのだが、ある日同僚から、殺し屋に殺された死体を片付ける掃除屋という職業がある事を聞かされた。私は掃除屋より、殺し屋という職業がある事の方に驚かされ、また、そこで一つの結論に至ったのだ。

晴雨：つまり、どういう結論に？

サダオ：私は、私の中にあるそういった不確かな感情に耐えられなかった。妻や娘の元に帰り、心から謝罪したいという気持ちもあったのだが、それを解決しない事には、物事は前進しないと感じていた。そういう感情を消し去る為には、やはり彼女を殺すしかないという結論だ。

晴雨：それで、私に依頼したいと。

サダオ：そういう事だ。何人かのフリーの殺し屋の元に訪れたが、私の貯蓄では到底足りないかと断られた。最後に訪れた殺し屋から、あなたの事を聞かされた。あなたならあるいは、少ない貯蓄でも内容によっては引き受けてくれるかもしれない。そう言っていた。だから私はここへ来た。

確かに、サダオの貯蓄は到底足りない額だった。

晴雨：あなたの言い分は解りました。条件次第では受けてもいいでしょう。

僕：いいんですか？

晴雨：あくまで条件次第では、ですよ。

サダオ：条件とは？

晴雨：ターゲットの死体と、セックスして頂きたい。

サダオ：死姦を？

晴雨：そうです。あなたはターゲットによって支配されていた。そのターゲットに裏切られたから、逆に支配してやりたいという感情が平行して生まれたのでしょうか？

サダオ：その通りだ。

晴雨：ならば、あなたの葛藤を打ち砕いてください。支配されたまま終わりにしては、真の意味での解決にはなりえない。

サダオ：本当に、それだけの条件でいいのか？

晴雨：ええ。構いません。

サダオ：承知した。この依頼を受けて頂きたい。

晴雨：解りました。

このようにして、僕は彼女を探る事になった。

二十三話　〈僕の視点〉　彼女との出会い

サダオの運命を巻き戻し、僕は彼女を発見する。そこで彼女に乗り換え、彼女の運命を探った。

かつてない気持ちで僕を襲う。

僕はかつてない気持ちについて、かつてないが為にその正体に気がつくのが遅くなった。僕はこの世界に発生して以来、様々な人間の運命を、そして運命の下に生まれる気持ちの正体について探ってきたので、それらを思い出し、自分自身に置き換え、客観的に己を覗く事によって、その気持ちの正体に見当をつける。

結果として、気持ちの名は愛情だった。何故、僕は彼女に愛情を抱いてしまったのか？

かつてないが為に、それも初めは解らなかった。ただ、彼出生から晴雨に殺されるまでの彼女の運命を覗いただけで、僕は唐突に、何の前触れもなく彼女を愛してしまっていた。

解らないから考えた。

僕は今まで、個人的な興味から仕事に至るまで、様々な事情で他人の運命を覗いてきた。結局のところ、僕にはそれしか出来ないのだ。

様々な人間がいて、様々な思惑や思想があり、その上に様々な生き様があった。それらは全て、規則正しいリズムの上に基づいていた。

しかしながら、一つだけ共通している事があった。人間が皆、レベルこそ異なっているものの、幸せという概念を追い求めている事であった。

どのような境遇にあり、その上でどのような不条理にさらされようと、それでも人間は日々幸せを求めて足掻いているのだ。

僕は人間を憐れんだ。全ては運命の上の決まり事に過ぎない人生という期間において、そんな不確かなものを追い求めようとしている人間を根底から憐れんだ。それがあくまで個人的かつ主観的な幸せであろうと、幸せになれる人間となれない人間は《初めから決まっている》のだ。

しかし、彼女だけは違った。彼女は、己の幸せを追い求めてなどいなかった。すでに真実について悟っていたのだ。

欲望が真の意味で満たされない事を。つまるところ、幸せになれない事を。

だからこそ、彼女は他人を自分に見立て、その上で欲望を発散していたのだ。潔かった。まるで僕が《自分を人間に見立てている》のと同じように感じられた。と、同時に僕は気付く。

僕は彼女に自分を見立てていたのだ。僕と同じように、真実の孤独を知っている彼女を。

そんな彼女に、僕は幻想を抱いてしまう。

《幸せにしてあげたい》

それが、彼女を愛した理由であり、同時に全ての動機となった。

僕は偶然を装い、彼女に接触する。彼女がいきつけのバーで一人酒に興じているとき、僕もバーへ向かい、血みtainなワインを美味しくそに飲んでいる彼女に声を掛けた。

『美味しいですか、それ』

『ええ、美味しいわ』

『でも、血みたいだ』

『これが血みたいって、あなた面白いこと言うわね』

『どこからどう見ても、それは血ですよ。他にどう形容していいか解らないくらいに』

『あら。私の血はこんな色をしてないわよ』

『僕の血はこんな色をしているんです』

『何故かしら』

『あなたに飲まれたいからですよ、きつと』

『もしかして、ナンパしてるの？』

『だとしたら、どうでしょうか』

『そうね。変わったナンパだと思うわ。少なくとも、セオリーから外れてるわね。女の子は吸血鬼じゃないのよ?』

『確かに。その通りですね』

『今度から気をつけた方がいいわ』

『気をつけます。出来ればセオリーを教えてくださいませんか?知らない女性に声を掛けるの、初めてだったんです』

『やっぱり面白いわよ、あなた。それじゃ、どうして私に声をかけたのかしら?』

『一目惚れと言ったら、信じてもらえますか?』

彼女は笑った。

『あくまでさっきに比べただけど、大分セオリーに近付いてきたわね』

『本心で言っているんですよ。よかったら、一緒に飲みませんか?』

『どうしようかしら』

唇を釣り上げる彼女。

『お願いします』

僕は真摯に頼み込んだ。後にも先にも、何かについてこれほど必

死に頼み込んだ事はない。

『いいわ。ワインみたいな血に、興味あるしね』

このようにして、僕と彼女は始まった。

晴雨には、ターゲット殺害の時期がなかなか割り出せない、苦しい言い訳で誤魔化していた。誤魔化しきれなくなった時、僕は晴雨からの連絡を遮断し、姿を消した。その際に彼女に引っ越しを促す。

初めのうちは、彼女に執着していなかった。

ただ、彼女を幸せにしたい。それだけが僕の彼女に対する愛情であったのだ。だが、彼女と日々を過ごすうち、彼女とセックスを重ねるうちに、僕にとって、彼女が必要である事が解っていた。僕が彼女を愛するように、彼女にも僕を愛して欲しい。そう願っている自分がいた。失いたくない。そう思っている自分がいた。

彼女は僕に別れを告げる。彼女は晴雨に殺される。知っていた。僕は何でも知っていた。

嫌だ。

彼女と別れるのも、彼女が死ぬのも嫌だった。

彼女との別れ――回避出来なかった。彼女は僕を愛しているから別れを告げた。意味は解らないままだった。

彼女の死――回避してみせる。晴雨を殺して、彼女を取り戻して

みせる。彼女を幸せにしてみせる。《僕も幸せになってみせる》。

だけど、その決意が、曖昧になった。

僕がついに、今まで唯一知り得なかった自分自身の正体を知ってしまったからだ。

僕は今、かつてないほど狂いたかった。

二十四話 《僕の視点》僕はルアちゃんを壊し、伴い壊れ、そして怒る

ルアちゃんには、世界と繋がれる事のみ排除して、全てを語った。

ルアちゃんは驚いていた。サダオの事もそうだが、僕がかつての家庭教師、彼女の恋人であつた事を。僕はルアちゃんに聞いてみた。彼女を恨んでいないのか？

『恨んでいるわけじゃない。あの人は、あたしに真実を教えしてくれたんだから。あの人がいなかったら、あたし、今でも豚に飼われたままだったもの。感謝しているくらいよ』

ルアちゃんのはつきりそう言っていた。

『もし、サダオを殺してくれるんなら、ただでお客様のビジネス受けたっていいよ』

そういう訳で、僕は晴雨に電話した。

「これで、本当にサダオが死ぬんなら、あたし、この上なく幸せだと思う」

僕はルアちゃんの肩に腕を回して、微笑みかける。

「それはよかった」

そのままルアちゃんを押し倒した。

「ちよつと！」

抗うルアちゃんの顔を殴る。

「何すんの！」

「抗うな！君は言つたろう？サダオを殺せば僕のビジネスを受けるって。いいか、君はこれから僕と一緒に暮らすんだ。僕が彼女を取り戻すまで、ずっと僕の傍にいて、僕に従うんだ！」

暴れながらルアちゃんが叫ぶ。

「まだサダオの死体を見てないじゃない！」

「うるさい！晴雨は殺すと言つたら必ず殺す！例外はないんだ！サダオは必ず今日中に死ぬ！もう決まつたんだ。君が見ようと見まいと、サダオは必ず死ぬんだよ！」

僕は怒鳴つた。こんなに声を荒げたのは初めてだ。全てに苛ついていた。

押し倒したまま、ルアちゃんの両腕を掴み、万歳をさせた。激しくルアちゃんを睨んだ。

「君の念願は叶つた。今度は僕の欲望を満たすんだ。僕の孤独を癒やすんだ」

「何、訳のわからない事言つてんのよ！あんたの言うビジネスって、あんたと一緒に暮らす事だけでしょう！？あたしの自由意志まであんたに奪う権利はないわ！」

呪詛を吐き出すように、ルアちゃんは憎しみを込めて叫んだ。僕は憎しみで溢れたルアちゃんの顔に唾を吐く。

「権利はある」

僕は断言する。

「君は豚の娘だ。豚の娘は豚なんだ。豚は飼われていればいいんだよ。君は豚だ。サダオが死んで、サダオの支配が終わったところで、君も結局豚なんだよ。豚は死ぬまで豚のままさ。だから、サダオの代わりに僕が君を支配してやるよ。嬉しいだろう？嬉しいと言うんだ。ありがとうございますと言って、感謝するんだ。感謝して僕を崇める。僕は君の支配者だ」

苛つきと、僕の全ての憎しみを言葉に変換して、ルアちゃんにぶちまけた。憎しみは世界に対して発生したものだ。世界ー僕自身の事だった。それに気がついたのは、ついさっきの事だった。

僕は僕自身への憎しみを、ルアちゃんに向ける事にした。そうでもしなければ、気が狂ってしまう。確かに僕は狂いたかったが、今狂ってしまう訳にはいかないのだ。

ルアちゃんは目を見開いて、僕に唾を吐き返す。

「聞こえなかったか？ありがとうございますと言った」

憎しみが、さらに深い憎悪となって、ルアちゃんの顔に刻まれていく。ルアちゃんは言葉を発さなかった。僕に礼を言わなかった。ただ、僕を睨むだけだった。全力で僕を呪う事しか出来ないのだ。

あまりに無力だった。あまりに弱かった。それでは僕の望みを満たす事は出来ない。ルアちゃんは強く在らねばならないかった。僕の孤独を癒やす為に、強く在らねばならないのだ。

彼女のように。

幸せにならない事を悟って、潔く生きなければならないのだ。

最悪の場合、彼女の代わりになれる者は、ルアちゃんしかないのだから。

彼女が唯一、この世界の真実を伝えた、ただ一人の後継者であるルアちゃんしかないのだから。

最悪の場合――彼女が死んだ時。あるいは――。

「言うんだ。受け入れろ」

命令した。

「何を受け入れろっていうのよ」

「豚の運命を。支配される宿命を」

「糞食らえ」

ルアちゃんは呟く。豚が豚の宿命を否定する。

ため息が出る。

僕はルアちゃんの両腕を離した。ルアちゃんは動かない。

僕はルアちゃんを殴った。顔面を、腹を殴った。ルアちゃんは抵抗しなかった。まるで抵抗しない事が抵抗だともいうような、そういう意志が感じられた。世界と繋がってそういう意志か確認した。そういう意志だった。

あんたがどのような暴力に及んだところで、あたしはあんたの支配を受けない。あんたにあたしを支配する事は出来ないー！。

殴り続けた。ルアちゃんの顔が変わっていく。唇と鼻が潰れ、出血した。目が充血し、瞼が腫れ、ルアちゃんの視界が闇に覆われていくのが解る。それでも、瞼の奥から、ルアちゃんの視線がただ一つ憎悪という情報を僕に送り続けているのを感じた。やがて、ルアちゃんの意識は失われた。

僕はベッドを降り、壁を叩いた。机を蹴った。テレビをひっくり返した。

そして叫んだ。窓から見える外の景色に向かって。外の景色を形成している世界に向かって。

叫ばなければならなかった。もはや、僕の内側に存在している全ての絶望を隠すのは不可能だ。

雨が上がりと同時に、僕は世界と繋がって、雨が降っていた時間帯の貝原の動向を調べた。そして、全てを知った。貝原の前に現れた《抽象的な世界》という少年が、僕に全てを伝えたのだ。

抽象的な世界――僕が世界と繋がった時に、眼前に広がる意識の世界の事だ。なんの事はない。かつて、僕は世界だったのだ。雨が降った時に、世界から拒まれるというあのなんとも言えない孤独は、僕自身に拒まれるから発生した孤独だったのだ。

この世界に生まれた時、僕は赤子だった。初めて眼が覚めた時にあったのは違和感だ。僕はこの世界の住人じゃない、帰らなければ――。

そう思った瞬間に、僕は世界と繋がっていた。心地よさと心地悪さが同時に僕を襲った。

ここは僕の居場所であって、居場所じゃない。長くいる事は出来ない場所だ――。

僕は何だかそう思って、我に返った。

ここは僕の居場所じゃない――。

はつきりとそう思った。

僕は泣く。あまりの悲しみに。あまりの孤独に。

僕の居場所は何処なんだ？

それが僕の産声だった。

悲しみと孤独の正体――僕は僕自身から否定されて生まれてきたのだ。この世界に生まれた時には、何の記憶もなかった意志とやらが発生したせいで。

ふざけた話だ。

僕はそれでも、人間として生きてきた。両親がいた。本当の親でないとは解っている両親は、やはりどこかで僕の事を本当の子供だと思っていなかった。世界と繋がると、両親が僕を愛していない事が解った。出会う人間のほとんどが、僕に異質を感じて、僕を不気味に思っている事が解った。僕を否定している事が解った。

それでも、僕は生きてきた。何を求める事も、何を望む事もなく、全てを知りながら、僕以外の真実を知りながら生きてきた。僕が、僕自身を否定しなければ、何とか生きてくる事が出来たのだ。

だが、僕の命が僕自身の否定から発生したものだとなれば、僕は何を肯定して生きればいいのか？

かつて僕であった世界。僕を否定して僕の命を創りあげた世界が、今度は僕の命を奪おうとしている。

ふざけた話だ。

そして、一番ふざけた話。

彼女を救えば、世界が具体的になくなる？

冗談じゃない。この上、僕から彼女すら奪おうというのか？

そんな暴挙が許されるというのか？

《抽象的な世界》は、まだ彼女の生存が鍵である事に気付いてい

ない。知っているのは僕と晴雨だけだ。しかし、それも時間の問題だろう。時がさらに近付けば、いくら複雑かつ膨大な要素といえど、特定は可能はずだ。そうなったら、晴雨を殺したとしても、『抽象的な世界』は彼女を何らかの手段で消しにかかる。

僕に出来る事。僕がしなければならない事。彼女を救う事。

世界が具体的でなくなったら、彼女と一緒にいる事も出来ない――

「ふざけるな……!……!……!……!……!……!……!」

声に出した。

ふざけるな。

彼女が生きようと死のうと、結局僕は彼女を失うというのか？

なら、僕はどうすればいい？

どうすれば、この孤独を癒せるんだ？

氣絶しているルアちゃんを眺めた。ルアちゃんを彼女の代わりにする。そんな事が本当に可能なのか？僕はルアちゃんを愛せるのだろうか？

考えても仕方ない。そんな事解りはしないのだ。

「何にも解っていないわ」

彼女の言葉。

その通りだ。僕は何でも知っている。でも、何にも解っていないかったのだ。

せめて、彼女が離れていった理由くらい、僕は解らなければならなかったのだ。

僕が唯一愛し、唯一僕を愛している彼女の気持ちくらい、僕は解るべきだったのだ。

僕はその場にしゃがみ込んで、うずくまる。

「解らない」

呟く。

「何にも解らない」

二十五話 《僕の視点》 サダオの死体とルアちゃん

全裸で気絶しているルアちゃんの両手両足を、ガムテープで縛った。それから《あの方法》を実践する。ほぼ、最終段階と言ってもいい。

晴雨の言うとおり、僕は貝原を使って晴雨を殺そうとしている。最初は僕が殺そうと思っていた。けれど、返り討ちに合うのがオチだと思い直して、やめた。晴雨を殺せるとしたら、貝原しかない。それには《明確な理由がある》。

僕と貝原には直接の面識はない。晴雨の運命を覗いた時に、たま貝原の存在を知った。晴雨の存在を知ったのは、当然、高校で出会った桜井の運命を覗いたからだ。

僕は桜井の運命を変えた。母の死の真相を伝える事によって。殺し屋の存在を伝える事によって。

何も知らなければ、桜井は晴雨の欲望によって殺されていた。妻と同じように、センターに依頼し、貝原の手で、晴雨が殺されていたのだ。桜井が知った事を晴雨に伝える事により、晴雨の興味が桜井に宿る。晴雨は桜井を殺す事をやめた。

僕が桜井を助けたのは、僕が彼に、ある種の親近感を覚えたからだ。彼は特に、真実について知っているわけではなかったが、親に愛されていないという点においては、僕以上の不条理を抱えて生きていた人間であり、当時の僕は、そういう人間を彼しか知らなかった。

今にして思えば、それさえしなければ、彼女が生き残っても世界

が具体的になくなる事はなかったかもしれない。《抽象的な世界》の言う波紋とは、恐らく極端の運命の変化によって広がるものなのだろう。つまり、生き死にに関する変化によって。僕は桜井を助けた事を後悔していた。

晴雨に接触したのは、五年前、僕が大学を卒業したのがきっかけだった。在学中の僕は、特に就職活動というものをしなかった。桜井の運命から、探り屋という職業を知ったからだ。そのような天職を知った僕に、他の職業に就こうなどという気はさらさらなかった。

センターではなく、晴雨個人の元を訪ねたのは、晴雨という人間に興味があったから。晴雨の思考はあまりに他の人間とは逸脱している。というより、晴雨には思考が無かった。単に欲望が創りあげた本能があるだけだ。彼はその欲望でのみ動いていた。一度だけ野良犬の意識に侵入した事があるが、晴雨の思考は人間というよりその野良犬に近かった。本能の赴くまま、食い続ける。

今でも大して変わりはないが、人間に対して、プラスの印象を抱いていない僕には、晴雨の行動が、とても爽快に思えたのだ。つまり、僕は浅はかだったという事になる。

僕は晴雨に独立を提案する。僕を使えば、あなたはより欲望に忠実に生きる事が出来る。自分の仕事を選べる。

晴雨は僕の正体について尋ねてきた。

あなたの息子さんに、あなたの真相を教えた者です。

ホッホと笑いながら、何故それを知っているのかも尋ねてくる。

僕は何でも知っています。あなたが、息子さんを殺そうとしていた事も。

晴雨以外が知りようもない、晴雨に内在している欲望の本質を僕が知っている事に、晴雨は驚いていた。驚くと同時に喜び、理解する。僕が、人間ではない事を。この世界にとって、異質な存在である事を。

このようにして、僕は晴雨の探り屋となる。

晴雨を殺すー極めて困難だ。今の貝原に、果たしてそれが出来るのか。僕は彼の殺意を促す事は出来ても、晴雨を殺害する手助けは出来ない。僕の意志を貝原に委ねるしかないのだ。

僕は人を信じるという事について、肯定的なタイプではないが、貝原を信じようと思う。

貝原がいるから、僕は彼女を救おうという気になれたのだ。だが、貝原が晴雨の死と世界の具体性の崩壊を結びつけたら厄介だ。もしそうなった時の為に、最後の布石を打っておかなければならない。世界が具体的でなくなったとしても、貝原が晴雨を殺すだけの理由を、憎しみを、殺意を植え付けなければならぬ。

けれど、僕にはそれすら晴雨の欲望の範疇に過ぎないように思えた。

構わない。

何がどうであろうと構う事はない。誰が死のうと世界がどうなるうとも知った事じゃない。僕は彼女を救うんだ。彼女を取り戻すん

だ。

具体的になくなったら、彼女と一緒にいる事も出来ない

解っている。でも、ここまで来たんだ。彼女を救わない訳にはいかないのだ。どっちみち失うというのなら、彼女を助ける道を、僕は選ぶべきなんだ。

《お前の思い通りになどさせるものか》

声――漆黒。あるいは抽象的な世界。

お前に邪魔はさせない。

雨なんかで僕を縛れると思うな。お前は知らなかった。お前は気付いていなかった。雨が降っていれば覗かれない？確かに、雨が降っていれば、僕は世界と繋がれない。しかし、晴れた後、逆れば、雨が降っている時間を《覗く事は出来る》。介入が不可能なだけだ。僕はお前を知っている。お前は僕を知らない。

「お前の思い通りになどさせるものか」

はつきりと、僕はそう言った。

五時頃、インターフォンが鳴る。ドアを開けた。大きなダンボールが置かれていた。サダオの死体である事はすぐに気付いた。晴雨が誰かに届けさせたのだ。恐らく、掃除屋。

一苦勞して部屋にダンボールを運ぶ。ルアちゃんは相変わらず気を失っていた。僕はバスルームでプラスチックの桶にたっぷり水

を入れて、気絶しているルアちゃんの顔にぶちまける。

「望みのものが届いたよ」

僕は昨夜から床に置かれている包丁で、ダンボールを裂く。サダオの死体が仰向けに転がった。

サダオの死体――全裸だった。本来あるべき場所に目がなくなかっており、奈落を連想させる黒い穴が穿たれている。また、額より上の頭部が完全に欠損しており、転がった衝撃で脳漿がはみ出していた。黒い赤と赤い黄色の池が出来る。さらに、性器が抉られており、抉られた性器はサダオの口にくわえさせられていた。

ルアちゃんはそれを見るなり嘔吐する。僕のベッドにルアちゃんの胃液やら消化不良の食物やらの池が出来る。やれやれだった。

「おいおい、君がこれを望んでいたんだろう？何で吐いたりするんだ」

吐きながらルアちゃんが咳き込んだ。また吐いた。腫れ上がった瞼から涙がこぼれていた。

僕は失望する。もし、ルアちゃんが彼女だったら、歓喜していたはずなのだ。自分も、サダオのようになりたい、と。

「ふざけるなよ？」

僕は言いながら、平手でルアちゃんの頬を叩く。

「喜べ。君は喜ぶべきなんだ。ほら、君の殺したかった豚が死ん

だよ。君の望みが叶ったんだ。感謝して僕を受け入れるんだ。新しい支配者を受け入れるんだよ」

ルアちゃんは泣いた。声を荒げ、潰れた顔をさらに歪ませて泣いた。

サダオに対する憎しみも、僕に対する憎悪も、ルアちゃんからは消えていた。

「まったく、君には失望させられたよ。何が、豚の支配を終わらせたんだ？何が豚を殺したんだ？あれは全部嘘だったのか？豚が切り刻まれたくらいで我を忘れるなら、最初から運命に抗おうなんてするな！支配を拒もうとなんてするな！」

僕は怒っていた。彼女が真実を伝えた唯一の人間であるルアちゃんが、この程度の脆い人間である事を怒っていた。こんな脆い人間に、孤独を癒やしてもらおうと考えていた自分を怒っていた。こんな脆い人間に、彼女の代役を務めさせようと考えた自分に怒り狂っていた。

彼女の代わりなど、誰にも務まりはしないのだ。

「償え」

冷徹に言った。ルアちゃんは構わずうずくまって泣いている。

ルアちゃんの髪を掴んで、僕の顔に引き寄せた。

「僕の期待を裏切った事を償え。彼女の期待に応えなかった事を償え。支配に抗った事を償え。豚である事を償え」

呪いを唱えるように、ルアちゃんに言った。ルアちゃんは泣くのをやめなかった。

ルアちゃんの髪を離れた。自分で作った池の中に、ルアちゃんが仰向けにへたり込む。僕は包丁をルアちゃんの眼前に突き付ける。

「泣き止め。君には自由に泣く権利すらないんだ。君に関する全ての権利は僕が握っている。僕の命令に従わないなら、今すぐ君を殺す」

「許して」

唇を噛んで、泣くのを堪えようとするルアちゃん。涙は止まっていない。

激しく勃起していた。孤独だったからだ。ルアちゃんが僕の孤独を満たせないと知って、激しく孤独であるからだだった。

僕はズボンを下ろし、性器をさらけ出した。

「くわえるんだ」

「許して」

許すわけなかった。僕はサダオの口がくわえている性器を引き抜く。

本来なら、彼女の死体に挿入されるはずだった性器。しかし、豚が挿入すべきは、やはり豚の性器であるだろう。

「選択肢は三つ。死ぬか、僕の性器をくわえるか、サダオの性器を自ら挿入させるか。どれを選ぶ？」

サダオの性器をルアちゃんに放る。頬に当たって、消化不良の池に落ちた。ルアちゃんが絶叫した。

「さあ、選ぶ」

ルアちゃんは震えていた。僕は世界と繋がり、ルアちゃんの意識を探る。

耐えられない耐えられない耐えられない。

「耐えろ。耐えられないなら、君は死ぬ」

僕は言う。ルアちゃんは首を振っていた。

僕はルアちゃんの口に性器を無理矢理突っ込んだ。性器に痛み――ルアちゃんが噛んだ。

ルアちゃんは壊れている。僕のルアちゃんに対する怒りが消えた。

二十六話　《貝原の視点》　今こそ、殺し合え

晴雨の事務所に着いたのは、まもなく午後五時を迎えようとする頃だった。高速を使ったが、途中でトラックの交通事故にぶつかり、四時間以上もかかってしまった。

周囲を山々に囲まれた、長い草の生い茂る原っぱの中心に、晴雨の事務所はあった。晴雨の事務所ープレハブ小屋だった。

「なんだってこんなところに、お前の親父は事務所を構えたりしたんだ？」

隣の桜井に聞いた。

「さあ？父の考える事なんて俺には解りませんよ」

俺は苦笑する。

「それもそうだな」

空ー再び暗雲が立ちこめていた。時折雷の音が聞こえる。

小屋を見る。この中に晴雨がいる。俺達を待っている。俺を待っている。

さつき、晴雨に電話した。『今から事務所にお越しください』。晴雨はそう言っていた。そして、俺達はやってきた。

タイムリミットまで、あと七時間。この選択が成功でなければ、

仕事は完全に失敗だ。世界が具体的になくなる。

扉を叩く。扉が開く。

「待っていましたよ」

晴雨が立っていた。

小屋の中は狭かった。木製のテーブルを挟んで、出口側にソファーが、反対に椅子が置かれている。その奥にダイニングキッチン。左の壁に扉が二つ。恐らく、風呂とトイレだ。

俺と桜井が並んでソファーに座り、対面に晴雨が腰を降ろす。

「ご用件を伺いましょうか？」

この期に及んでの、回りくどい対応に腹がたつ。

「さっき言った通りです。心当たりを聞かせてください」

ホッホ。

「その前に、隼人と話させて頂けますかな？」

晴雨の視線が桜井に移る。今更、この親子の狂った会話など聞きたくはないが、断ったところで、晴雨が自分の意志を曲げるはずもなかった。

「どうぞ」

桜井に目をやった。桜井も、晴雨と話したがっているようだ。期待――表情から読み取れた。

「仕事はどうだった？」

晴雨の口調。父親のものだ。父という意識が晴雨にもあると知って、俺は驚いた。

「楽しかったよ」

「どうして楽しかった？」

「多分、父さんと一緒に。父さんもきつと、こんな気分だったんだろうと思ったよ。俺より弱い生き物の生死を握る快感。俺っていう強者の権利を存分に施行する快感。そういうのを味わった」

「それだけかね？」

「もつと、権利を施行したいと思ったね。弱い奴だけじゃなくて、強い奴を殺したい。そして、強くなりたい。世界中の人間全てが、俺の権利に従うくらいに」

晴雨がにこやかにほくそ笑む。

「それでいい。やはり、お前は私の息子だね。答えによっては、今すぐお前を殺すつもりだったのだが、それもなくてよさそうだ」

「冗談きついね、父さんは」

晴雨が懷に手を入れて、何かを取り出す。銃だった。銃口は桜井に向けられた。

「冗談ではない。お前が私の期待に応えられないなら、お前を殺すつもりだったよ。そうでなければ、今日までお前を生かした意味がないだろう?」

笑ったまま、晴雨が言う。晴雨に殺気は無い。が、桜井から殺気が発せられていた。落ちつけ。桜井に呟く。

「どういう事?」

「妻が死んだ後、私はお前も殺すつもりだった。貝原さんを使つてね」

銃口は桜井に、視線は俺に向けて、晴雨が微笑んでいた。この微笑みを消せ。俺の中で誰かが言った。晴雨を殺せ。俺の中で誰かが言った。

誰だ?

「貝原さんもすでにご存知であると思いますが、妻を殺すようセンターに依頼したのは私です」

晴雨が俺に言う。晴雨を殺せ。誰かが言う。落ち着け。俺が俺に言う。

「そして、次に息子を殺す依頼をしようと考えていました。わざわざ掃除屋から死体を買取って、息子に見せ、反応をテストしたんですが、その時点では息子は私の期待に応えられなかったからで

す。悲しむだのといった感情は、私の息子にふさわしくない」

先刻までの違和感の正体――そうだ。母が俺に殺された事を伝えたのが晴雨でないのなら、掃除屋に片付けられた母親の死を、桜井はどこで知ったのか――。

どこまで狂えば気が済むんだ。

「昨日、貝原さんは、殺し屋の指名はできないと仰いましたが、出来るんですよ。こんな風に、ちよつと玩具を突き付けられね」

玩具――銃。あるいは殺傷力をもつ凶器全般。辞めて、センターの連中が喜ぶわけだ。

「けど、思い止まった。お前が、私の欲望を知っていたからね。面白い事を思いついたんだよ、父さんは」

視線を桜井に戻す晴雨。面白い事が面白くない事は明白だった。

「さて、それは何だと思う？」

「ようするに、父さんは俺で遊びたかったんだろう？自分が強すぎるから、いつしか自分より強い奴がいなくなった。弱い奴を殺すのはつまらないのに弱い奴しかいない。だから、自分で強い奴を創る事にしたんだ。父さんの血を引いている俺が殺し屋になったら、父さんと張り合える。俺は強くなる。強くなった俺を殺したかったんだろう？強くなった俺と殺し合いたかったんだろう？」

狂ってる。晴雨も桜井も、世界に狂わされている。

「概ね正解だ。しかし、それだけではない。お前の言うとおり、私の欲望は、私を殺せるくらい、《殺せると思っている》くらい、強い人間と殺し合う事だ。でもね、弱い人間を殺すのも悪くはない。弱い人間は共通して己の弱さを知らないからな。そういう人間に、現実を叩きつける事こそが、私の欲望の本質なんだ」

現実を叩きつけるー弱い人間に、己の弱さを叩きつける。強者によってもたらされる、死という現実によって。さしずめ、究極のサディストーリー。

「私より強い人間など、存在せんよ。私より《強くなった気がしている》人間に、私より《弱い》という現実を叩きつける事。それが、一番の目的だ」

ホッホ。何度この笑い声を聞いた？何度この笑い声を疎ましく思った？

「お前を殺すのは、お前が私より強いという幻想を抱いた時だ。しかし、そう思うには、まだまだお前は弱すぎる。もっと強くなれ隼人。私より強いと思えるくらいに、強くなれ。そして、私にお前の幻想を碎かせておくれ。親の夢を叶える事こそ、子の務めなんだから」

悦に浸る晴雨の笑顔 叩き壊せ。

「父さんにはかなわないね。まるで、俺は父さんに殺される為だけに生まれてきたみたいない方をするんだから」

「みたいない、ではなく、お前は私に殺される為だけに生まれてきたんだよ」

桜井の殺気が膨れ上がる。このままではまずい。だが、もう落ち着けと言う事は出来なかった。落ち着ける訳がない。

「私が憎いなら、私を殺すんだな。だが、今は無理だ。それはお前にも解っているだろう？ならば、無駄な事はやめて強くなるんだ。私を憎め。ひたすら憎んで、強くなれ」

桜井の殺気が収縮していく。晴雨の言葉に納得したようだ。今は無理、いつか殺す。そういう決意が感じられた。いつかでは駄目だ。今、あなたが殺すんだ。

「さて、そろそろ本題に移りましょうか。貝原さん？」

銃口――ついに俺に向けられた。

「その前に、その物騒なもの下ろしてもらえませんかね」

「いえいえ、その必要はありません。だって、今からあなたは、私と殺し合っんですから」

晴雨の殺意。確かに感じられた。晴雨は本気だ。

「勘弁してもらえませんか。そんな事してる時間はないんですよ、晴雨さん。時間がないんだ。晴雨を殺せ」

「時間がないなら尚更です。あなた方の探している、《神という概念に一番近い存在》。心当たりどころか、私は居場所を知ってるんです。あれをご覧なさい」

銃口に向けたまま、晴雨は首だけで、あれの場所を示唆した。ダイニングキッチンに、メモ用紙が貼り付けてある。

「あれに、その人物の住所が書かれています。私を殺せたなら、あれを差し上げましょう。君も、それでいいですね？」

「誰です、君って 僕だ？」

「かつての私の相棒ですよ。腕のいい、探り屋」

「何の事です？」

「こつちの話です。さあ、殺し合いましょう」

晴雨が立ち上がった。とことん、意味の解らない事をぼざいてやる。

「待つてください。俺は晴雨さんと殺し合う為にここへ来たわけじゃないんだ。今日のところは、大人しく、その人物の居場所を教えてくださいませんか」

「嫌ですね。解っているでしょう？そんな事は」

舌打ちーもう堪える必要もない。

「これ以上、あんたに振り回されんのは御免だと言っててるんですよ、俺は」

ホッホ。

「だから、私を殺せばそういう事もなくなるでしょう」

「何度も言わせるな。時間がないんだ。今はそんな事してる場合じゃない」

「今しかないですよ。私と貝原さんが殺し合える時間は」

「何故、あんたはそこまで俺にこだわる？」

「研修成績Aランク。私と同じ評価で殺し屋になった初めての新人。その話を聞いた時から、私は貝原さんの虜でしたよ。貝原さんなら、私に近付けるかもしれない。私を殺せると、《思い込む》かもしれない。その為なら、なんだってしてやる。そう思ったからですよ」

「なんだって、俺に妻を殺させたんだ？」

「そうすれば、私に殺される理由が出来て、あなたは私を恐れるでしょう？ 恐怖を前にした人間がとる行動は二つしかない。恐怖に呑み込まれるか、恐怖を振り払うか。貝原さんは、きっと後者だと思いました。そして、この恐怖を振り払うには、私を超えるしかない。強くなつて、私を殺すしかない。そういう結論に達してくれると、信じていたんですよ」

俺の恐怖――この男には読まれていた。

「前から言おうと思っていたんだが」

「何です？」

「あんたは狂ってるよ」

「貝原さんも気付いているでしょう？狂っているのは世界の方だ。私は私が与えた自分の運命に則して生きているに過ぎない」

その通りだ。

「こいつの講師を俺に務めさせた理由は？」

桜井に顔を向ける。目を閉じていた。何かを考えているようだ。

「私に殺される運命にある息子が、私に殺される運命にある殺し屋に《殺され》方を教わる。とてもロマンティックじゃないですか」

晴雨の顔――獣だ。こいつは人間じゃない。

「父さん」

桜井の声。目を開いていた。

「あんまり、貝原さんを舐めない方がいいよ。父さんが思っている以上に、貝原さんは強い。会ってからまだ、二日しか経ってないけど、この人は父さんを殺せる。そんな気がするよ」

「桜井……」

「貝原さん。俺からもお願いしますよ。父と、殺し合ってくれませんか」

桜井――考えが読めない。晴雨が俺に殺されたら、桜井は何の為

に生きるんだ？

「息子もそう言っています。さあ、どうしますか、貝原さん？」

晴雨を殺せ。晴雨を超えろという、あなたの目的を果たすんだ
うるさい。

晴雨はあなたから、目的を奪った。両親が行方不明になってい
ただろう？晴雨が殺したんだ。あなたの目的を晴雨だけに向ける為
に

何だと？

晴雨が殺したんだ

俺の両親は、晴雨によって殺されていた？

馬鹿な。俺は両親の事など、一度も晴雨に喋ってない。

《神という概念に一番近い存在》は人の運命を覗ける。

晴雨――腕のいい探り屋がいた。

腕のいい探り屋――《神という概念に一番近い存在》

俺はその人物に一番深く関わっている。俺に心当たりはない。

いつからか、誰かの声が聞こえていた。

いつから？

晴雨と再会した時から。

誰かの声――《神という概念に一番近い存在》？

誰かの言葉――晴雨を殺せ。

「俺も狂ってるのかもしれないな」

俺は呟いた。俺も狂ってる。世界に狂わされている。

俺がすべき事――晴雨を殺す事。

何のために？

《神という概念に一番近い存在》の居場所を知るために。

俺の目的を果たすために。

「桜井、ナイフを貸してくれ」

晴雨の喜びと殺意。伝わってきた。違う。最初から知っていた。

この男と出会った時から、俺はこの男の殺意に気が付いていた。俺の恐怖の本質はそこにあったんだ。

今こそ振り払え

ナイフを桜井から受け取った。

二十七話　〈貝原の視点〉　決着――殺し合いの果てに

「ここじゃ狭い。外に出ましょう。貝原さん」

外に出る。原っぱ。周囲には山。何故こんなところに事務所を構えたのか？

俺と存分に殺し合う為に。

先ほどより、分厚い雲が空を覆っていた。また、雨が降る

晴雨と俺が向かい合う。桜井は小屋の前から俺達を見ていた。

晴雨が、銃を放り投げる。草むらの中に消えた。

「いくら周囲に何も無いと言っても、銃声を響かすのは抵抗がありますからな」

素手で俺を殺す気らしい。桜井の言った通り、晴雨は俺を舐めている。自分が殺される訳がないと過信している。

いいだろう。俺がお前に叩きつけてやる。

お前も狂った、弱い人間に過ぎないという現実を。

俺はナイフを構えた。晴雨は大きく両腕を広げた。空が鳴った。雷が轟いていた。雨が降ってきた。

「さあ、始めましょう」

晴雨と俺の距離――五メートル程。ゆっくりと、草を踏みしめながら、間合いを詰めていく。晴雨は両腕を広げたまま動かない。

晴雨の首筋を狙い、切りかかる。

かわされた。

再び切りかかった。

かわされた。

舌打ち。晴雨は体勢すら変えていない。

強い。やはり強い。

俺は後退し、間合いを元に戻した。

「どうしました？」

晴雨が笑っている。皮肉を込めて、笑い返した。

「あんたは、やっぱり強いよ。俺もあの頃から大分強くなったつもりだったが、それでもあんたに近付けた気はしなかった」

「謙遜なさらなくて結構ですよ。少なくとも、以前のあなたなら私と殺し合おうなどとは、微塵にも思わなかったはずです。今、あなたは私を殺そうとしている。それだけで充分です。充分、私に近付いている証拠ですよ」

「そうだといいがな」

俺は再び間合いを詰めた。

両腕を広げたまま、晴雨は俺を待っている。獲物が飛び込んでくるのを待っている。

考える。刹那で閃け。奴を殺す方法。奴を超える方法。

右手でナイフの刃を握った。手から血がしたたり落ちる。手を強く握った。

「血で目眩ましでもお考えですか？」

晴雨が言った。読んでいる。俺の行動を読んでいる。

注意を逸らせ。

晴雨の腹に蹴りを放つ。脚を掴まれ、転ばされる。

立ち上がった。僅かに距離を取り、動かない晴雨の周囲を回る。背後。雷鳴を合図に、首筋を狙って切りかかる。かわされ、そのまま腕を掴まれた。一本背負いをくらう。受け身を取り、立ち上がる。形成は不利だが、俺にもまだダメージはない。

ナイフを捨てた。

「おや、降参ですか」

「こう簡単にかわされてたら、こいつを持っている意味がない気

がしたんでね」

「素手で私に挑むと？」

「あんただって素手だろう」

「いいですねえ。私と対等だと思っているようだ。ああ、砕きたくて仕方ない。あなたの幻想を。あなたの命を。でももう少し、この宴を楽しみたいんです。出来れば、有利な装備を整えて欲しいですね」

「殺し方は色々あるさ。何も武器がないわけじゃない」

晴雨は黙る。考えている。俺の次の行動を考えている。

晴雨は恐らく、俺が隠し武器を持っていると考える。

それを気にする。隠し武器に備えた防御策をとる。

俺は隠し武器を持っていない。武器など何もない。

勝機は、その誤差にある。

俺は晴雨に殴りかかった。左ストレート。軽やかなフットワークでかわされる。晴雨の視線――俺の右腕。隠し武器を気にしている。確信した。

注意が逸れている。

もう一度左ストレート。拳の先から雨の水滴が散りばめられる。

かわされ、腕を片手で掴まれた。引き寄せられ、腹に一発拳をくらった。

吐き気を覚える痛み――堪えろ。

もう一発くらう――堪えろ。

晴雨の視線――俺の右腕。

右腕を後ろに回す。隠し武器をとるふりをする。拳を握る。血が溢れる。

出す。右ストレート。寸止め。晴雨が俺の右拳を見つめる。

開く。血が飛び、晴雨の視界を奪う。

左腕をほどく。右フック。晴雨のこめかみにクリーンヒットした。よろける。追い討ちの左ストレート。鼻に当たる。晴雨が倒れた。

ヒュウーという桜井の口笛。聞こえたが、奴を見ている暇はない。

マウントポジション。殴る。殴る。殴る。

全てクリーンヒット。晴雨の顔面が先決で満たされていく。降っている雨では洗いきれない程に。

晴雨は防御しなかった。ただ、俺の拳を黙って食らい続けているだけだ。

おかしい。何を考えている？

唐突に、晴雨が口をすばめていく。息を吸い込む音。俺は危険を察知するー遅かった。

視界が歪む。俺と同じ方法。口の中に満たされた血で、俺の視界を奪った。

腹に痛み。口から臓器がはみ出しそうだ。

腹を抱えて、うずくまる。晴雨が立ち上がる気配ーまずい。極めてまずい。

顎に痛み。蹴られたのか？俺は吹っ飛んで転がった。草がクツシヨンになったものの、気休めにもなりはしない。力が入らなかった。俺は仰向けで草のベッドに倒れる。

これまでか。

絶望ー勝機は断たれた。

『運命を信じてください。あなたが生きようとするなら、運命が味方をするはずですよ』

抽象的な世界の言葉ー戯言だった。

俺が生きようとしたところで、これが現実。

晴雨の強大さの前に、這いつくばっている。

俺は死ぬ。

「惜しかったですね、貝原さん」

晴雨の声が聞こえた。近付いてくる。死神の声――。

「やはり、貝原さんは私の見込んだ殺し屋だった。これ程の実力があれば、私を殺せると思ってても、不自然ではないですね」

背中に違和感――何かが、背中の下にあった。

「でも、これが現実だ。立っているのが私。倒れているのがあなた。強いのが私。弱いのがあなた」

何か――晴雨が放った銃。

「しかし、あなたは楽しませてくれた。私に傷を負わせた唯一の人間に敬意を表して、せめて、楽に殺してあげましょう」

晴雨が何処かに向かって歩き出す。顔を拭う。視界が戻る。

何処か――俺がナイフを捨てた場所。桜井のナイフを拾おうとしている。

晴雨の意識が、俺から逸れている。

運命があなたの味方をするはずですよ――。

戯言じゃなかった。

運命――俺の人生の軌跡。

俺の人生――糞みたいな人生。つまらない事だらけの運命。

運命を呪った。俺の願いが叶わない世界を呪った。

だが、時には俺の味方をする事もある。

俺は笑った。

「隼人。よく見ておきなさい。いずれ、お前も貝原さんのようになる。貝原さんを超えなさい。私に近付きなさい。そして、私に殺されなさい」

晴雨がナイフを拾った。俺に背を向けていた。

銃を手にとった。安全装置はすでに外れている。上体を起こし、銃口を晴雨に向けた。

「晴雨」

言った。晴雨が振り向いた。

「お前の負けだ」

引き金を引いた。心地良い反動。晴雨の腹に弾が当たった。晴雨は倒れた。

俺は、ふらふらながらも立ち上がり、晴雨へと歩いた。

晴雨は息を切らしている。あの晴雨に、他者に死をもたらす事のみが行動原理の晴雨に、死がもたらされようとしていた。

ホッホと、息も絶え絶えに、晴雨は笑っていた。俺は晴雨を見下ろして、銃口を額に向けた。

「俺を舐めすぎていたな、晴雨」

「どうやら、そのようです、ね。ホッホ、まさか、銃を捨てた事が、あだに、なるとは、思いません、でした、よ」

「銃を捨てた事じゃない。俺と殺し合おうとした事自体が、お前の間違いだったんだよ。お前は、自分の運命に負けたんだ」

「ホッホ、よもや、貝原さん、の口から、運命という、言葉が聞ける、とはね」

「お前のお陰だよ、晴雨。お前のお陰で、俺も運命とやらを信じる事が出来た」

「それは、良かった」

晴雨は咳き込み、血を吐き出した。もう、奴に残された時間は少ない。

俺は桜井を呼び、銃を渡した。

「貝原さん」

「ほつといても、お前の親父はじきに死ぬ。とどめを刺すか刺さ

ないかは、お前が決める。お前の人生は、俺以上にこいつに弄ばれてきた。お前には、その権利がある」

桜井は銃口を晴雨に向けた。殺意は感じられない。当然だ。今の晴雨は、昨日のターゲットと同様、単なる弱者に過ぎない。桜井が殺気を放つ必要などどこにもない。

「父さん」

「ホッホ、隼人が、なるほど、私は、お前に殺されるのか、運命とは、皮肉なものだ」

「皮肉ねえ。俺には俺の運命の方がよっぽど皮肉に見えるよ。なんだいこれ？ だつせえなおい。こんなにださかったのかよ父さんは。あんたの気持ちを知ろうと気張ってたのが馬鹿みたいだ」

「母の死に、納得は出来たか？」

晴雨の言葉。何故か、父親らしく聞こえた。

「それなら安心してよ。とっくに出来たさ。ようするに、母さんも父さんも同じだったんだよ」

桜井は愉快そうだった。

「どっちも、弱くてださかったから死ぬんだよ」

「ホッホ、やはり、お、前は、私の息子だな。だったら、これらの人生で何をすべきか、わかるだろう？」

晴雨の首が動いた。最後の力で、俺に視線を送る。

これからの人生で何をすべきか――貝原を殺せ。そう言っている気がした。

「解ってるよ。父さんは安心して、死ねばいい」

「ホッホ」

「なんか、言い残す事とかある？」

「ホッホ」

銃声。晴雨の額に穴が開いた。晴雨は死んだ。

終わった。

いや、まだ終わってない。《神という概念に一番近い存在》。奴が残ってる。

「さあ、仕事の続きだ。行くぞ桜井」

俺達は歩き出した。山間に一筋の雷光が落ちる。僅かな後に轟音。俺達を祝福しているように聞こえた。

晴雨の事務所でメモを確認する。《神という概念に一番近い存在》の住所と名前。やはり、名前は名簿のものと同一だ。腕時計を見る。六時半。

この住所なら、ギリギリで間に合うだろう。

「あいつ、やっぱり父さんと知り合いだったんだ」

「多分、晴雨の探り屋をやっていたんだろうな」

「何故ですか？」

「さあな。今となつてはどうでもいいだろう。幸い、雨も降っている。今は奴に運命を覗かれる事もない。それより、急ぐぞ。どうやらギリギリになりそうだ」

そう言った瞬間、事務所内の空気が変わる。今朝感じたものと同質の違和感――奴が来る。

「いるな。姿を見せろ」

俺は部屋中に向かって言った。桜井もいたるところを見回している。

少年が、俺達の視界に現れた。

「大変な事になりました」

少年の口調は相変わらず淡々としていて、《大変な事》の大変性というものが、まるで感じられなかった。

「何だ？何があった」

「世界が具体的になくなります」

俺と桜井は顔を見合わせる。

「だって、時間はまだ残ってますよ？」

「そうだ。日付が変わるまでと言ったのはお前自身だろうが」

「それが、状況が変わったんです。変えたのはあなた達です」

状況を変えたのが俺達？状況が飲み込めなかった。

「依頼、及びターゲットの追加を要請します」

二十八話　〈僕の視点〉最後の再会と、最後の別れ

外に雷鳴が轟いていた。僕は部屋の掃除をしながらそれを眺める。ルアちゃんの消化不良の池とルアちゃんの死体。僕がひっくり返した家具。サダオの死体。

何だか面倒になってきた。今更、掃除をする事に果たしてどのような意味があるのだろうか？

サダオの性器をルアちゃんの死体に突っ込んでみた。意味はなかった。空しさがこみあげてくるだけだ。

やるべき事は全てやった。後は、雨が上がるのを待つだけだ。もう、何もする気は起きなかった。

成功するにしろ失敗するにしろ、僕は彼女を失う。

喪失感が僕を支配していた。もう、どうでもいいような気さえしていた。

携帯が鳴る。

ディスプレイに、彼女の名前が映っていた。

「もしもし」

「あなたって、何者なの？」

「唐突だね」

「答えて」

「君はもう知っているんだろ？」

「信じられないわ」

「でも、事実だ」

「だから何でも知っていたっていうの？」

「その通りだよ」

「だから、私にあんな事をしたのね」

「その通りだよ。残念ながら、君は去って行ってしまったけど」

「何でも知っているのに、その理由は解らないままなのね」

「ああ。君の言う通りさ。僕は何にも解っていない。だから、結局何も出来なかった」

「貝原さんが、いずれあなたを殺しにくるわ。もう、知っているんでしょけど」

「知っているよ」

「逃げて」

「優しいんだね」

「いいから、逃げて」

「何で、そんなに優しいんだい？」

「知っているでしょう」

「君の口から聞きたいんだ」

「愛しているからよ」

涙が出た。唐突に、いきなり、涙がこぼれ落ちていた。

「泣いているの？」

「解らないよ。涙が勝手に出たんだ」

「泣いているのね」

「そうみたいだね」

「泣かないで」

「泣きたくなかないんだよ。でも、止まらないんだ」

悲しいから泣いているのか、嬉しいから泣いているのか、あるいはその両方なのか。相変わらず、僕は何にも解っていなかった。

「会いましょうか」

「本気なのか？」

「ええ。本気よ」

信じられなかった。僕は彼女の運命を変えたのか？

「血みtainなワインを飲みながら、待っているわ」

通話が断たれた。

僕は部屋を出て、いきつけのバーへ走った。

バーに彼女はいた。一昨日と同じ席で、血みtainなワインを飲んでいた。髭のマスターが笑顔で、

「おめでとうございます」

と言った。大きなお世話だったが、悪い気はしなかった。

「待ってたわ」

彼女は僕に微笑んだ。僕の瞳から、再び涙がこぼれ落ちる。

「泣かないでって、言ったでしょう？」

「止まらないんだよ」

「解ったわ。座って？」

席を指差して、彼女は言う。僕は座る。

「どうして、会ってくれる気になったんだ？」

「あなたは、やっぱり何も解っていないわね。私は、ずっとあなたに会いたかったのよ」

彼女はずっと僕に会いたかった？

僕を愛しているから彼女は去った。僕を愛しているから、彼女は僕に会いたかった？

どういう事だ？

「あなたは、私の本質を知っているんでしょう？ 答えはそこにあるの」

彼女の体が透けてきていた。彼女だけではない。僕の周囲の空間が、曖昧になってきている。テーブルが、歪み、角が消え、丸みを帯びようとしていた。椅子が、椅子としての機能を失い、座つていくという感覚が徐々にどのようなものか忘れさられようとしていた。

具体的になくなってきた？

貝原が晴雨を殺した。それしか考えられなかった。

「始まったみたいね」

「解っていたのか？」

「ええ、何となくね。」

私は晴雨さんに殺される予定だったんでしょう？あなたは、昨日、私を救うと言ったわ。

そして、貝原さんが仕事帰りに晴雨さんに出会ったと言っていた。貝原さんと私の家はすぐ近く。そこでピンと来たの。あなたは何でも知っている。晴雨さんが私を殺そうとしていたから、それで私を救うと言った。今日、あの男の子が来て、誰かの運命が変わると言った事で、私はそれを確信したわ。変わるのは、私の運命だって」

運命は変わった。確かに変わった。周囲が周囲である事をやめようとしていた。世界から具体性が失われようとしていた。

「君が僕に会ってくれた理由を聞きたい」

「実を言えば、あなたと会う気はなかったわよ。それが一番の望みであつたんだもの。でも、あなたは私の命を救ってくれた。お礼を言わなきゃならないでしょ」

「教えてくれ。君は何で、僕に別れを告げたんだ？」

「愛しているからよ」

「答えになっていない」

「答えよ。私の欲望を思い出して？」

彼女の欲望――痛みを味わう事。ゴキブリのような存在に、ゴキブリ以下の扱いをされる事。

僕はそれを与えてきた。なら、どこに僕と別れる必要がある？

痛みを味わう事――肉体的においても、精神的においても。精神的な痛み――それは心の苦しみ。苦しみ――。

ハッとした。

「解ってくれたかしら？」

彼女は微笑んでいた。すでに、彼女ね肉体は曖昧だった。故に表情も解りにくくなってきていたが、それが微笑みである事だけは伝わってきた。

彼女が最も望んだ苦しみ――彼女の欲望を唯一満たす事の出来る、僕という存在を失う事。

そういう事だったのだ。

僕は笑った。笑いながら泣いた。泣きながらまた笑った。涙で見えなかった。

「泣かないで」

「僕が君の幸せを望む限り、君と一緒ににはなれなかったんだね」

「ごめんなさい」

「いいんだ」

僕はそれ以上、何も言えなかった。泣いているから声が出ないのか、具体性の欠如が声を損なわせているのかすら解らなかった。

「ありがとう。あなたのお陰で、とても幸せだったわ」

彼女は幸せだった。それなら、僕も幸せのはずだ。それでいいんだ。

銃声が響いた。曖昧な世界で、具体的な銃声だった。彼女の胸から血が噴き出した。倒れそうだった。

僕は彼女に駆け寄った。間の机は、障害にならず、僕は透き通る。銃声が響いた。僕の胸から血が噴き出した。構わなかった。

僕は彼女支える。

「ごめんなさい。せつかく、あなたに、助けてもらったのに」

「いいんだ。僕は、君を、愛している。君がいてくれたから、君といた時間の全てが、僕にとって幸せだった。生まれて初めて、幸せだった」

彼女が、僕の胸に触れた。

「あなたの血、本当に、ワインみたいな色してたのね」

「君に飲まれたかったんだ」

彼女を抱き締め、僕は涙を流したまま微笑んだ。

彼女が、僕の頬に触れた。そして、唇に触れた。

キスをした。

「愛してるわ」

彼女が目を閉じる。僕は彼女の名を呼んだ。

「さよなら、レイカ」

彼女は死んだ。

僕の腕の中で、眠るように死んでいった。

そして、彼女の具体的な温もりを感じながら、僕も死んだ。

眠るような気分だった。

僕はきつと、幸せだった。

二十九話 〈貝原の視点〉終幕の弾丸

とんでもない光景だった。どう形容すればいいのか解らない。

街が、具体性を損なっていた。

桜井は隣で運転しながら口笛を吹いている。

「いよいよもってやばそうですね。貝原さん」

「ああ。全く、冗談じゃない」

俺達は高速道路を走っていた。しかし、高速道路はすでに高速ですらなかった。速度がそこに存在しているのかすら曖昧だ。しかし、それでも俺達は走っている。進もうという意志が具体的である限りは。

空が割れていた。空の割れ目から雨が降っている。割れ目以外は晴れていた。間もなく午後十一時だというのに、青空だった。

街が透けていた。建物という建物が、それこそ形容しがたく、グニャグニャと、歪み始めている。それは建物が建物であるという事をやめようという意志を必死に表明しているように見えた。アニメーションの世界に迷い込んだ気分だ。前方を走る車が弾ける。跡形もなく消えた。

「いやいや、有り得ないなあこれは」

楽しそうな桜井の声。

「この状況を楽しめるお前の神経が、少しだけ羨ましくなったよ」

「最高じゃないですか。どこもかしこもぐちゃぐちゃで、お菓子みたいに溶けてますよ？」

「このままだと、俺達もああなる。急ぐんだ」

「解ってますよ。御陀仏は俺も御免ですから」

俺達は阿東の元に向かっていた。

抽象的な世界の要請――ターゲットの追加。追加されたターゲットは阿東だった。

《神という概念に一番近い存在》が変えようとしていた運命――阿東の死だった。

阿東は今夜、晴雨によって殺される運命にあった。俺達が晴雨を殺した事により、その運命は回避される。よって、世界は具体的でなくなろうとしている。

阻止する方法は唯一つ。世界が完全に具体性を失う前に、阿東の命を断つ。

抽象的な世界は言っていた。

『不幸中の幸いであつた事は、晴雨という人物が、数年後、貝原さん。あなたによって殺される運命にあつたという事です。つまり世界に生まれた運命の誤差は、まだギリギリで修正がきく範囲なの

です』

『どういう事だ？』

『晴雨によって殺される運命にあった阿東さん。貝原さんによって殺される運命にあった晴雨。解りますか？辻褄を合わせるんです』

『俺が殺した晴雨の代わりに、阿東を殺すという事か』

『その通りです』

うんざりだった。

阿東は俺のパートナーだ。俺が唯一信頼していた仕事仲間だ。もしかすると、俺は阿東に愛情に近い感情を抱いていたのかもしれない。いざ、阿東を殺さなければならない状況に陥って、それに気がついた。

だが、だからといって、阿東を殺さない訳にはいかない。このままでは、全てが文字通り泡と化す。俺は止める方法を知っている。止めなくてはならない。世界の為に？

俺の存続の為だ。

何より、俺は殺し屋だった。依頼されれば、それがいかなる人物であろうと殺さなければならぬ。唯一にして絶対のルール。

ここで、それを拒否したら、俺は俺自身拒否する事になる。愛しているという理由で殺せないのなら、俺は殺し屋失格だ。

結局、俺には殺ししかないのだ。殺す事によってしか、生きていけない人間なのだ。

晴雨と同じ？

それだけは否定する。

殺しに幻想など抱かない。

ただ殺す。

そこに、俺の欲望など関係ない。

仕事だ。

俺が俺自身に誇れる、たった一つの仕事なのだ。

だから、俺は殺し続ける。

阿東の居場所は抽象的な世界が知っていた。阿東はバーにいる。昨夜、俺と行った、あの歌舞伎町のバーだ。恐らく、そこに《神と》という概念に一番近い存在《もいる。

『今更、その人物を殺しても意味はないのですが、後の事を考えて、ここで殺してもらおう事にしました』

抽象的な世界の言葉。

意味がない殺し。構わなかった。それが仕事である限り、どんな

殺しも厭わない。

世界はどんどん具体性を失っていく。急げ。急げ！

仕事に失敗は許されない。

「着きましたよ」

バーについた。バーの周囲は、ほとんど原型を留めていない。歌舞伎町には、まるで片田舎のように、人氣が消えている。歓楽街という具体性を損なっていた。俺達も早くしないと危ない。

自分を強く持つ。

それが具体性を保つ秘訣だと抽象的な世界は言った。

自分を強く持つ。

これは仕事だ。仕事の途中で自分を見失う訳にはいかない。

自分を強く持った。

バーの階段を降りる。階段はかろうじて階段という具体性を保っていた。そこには確かに、段差というものがある。

バーの扉を開ける。

バーは異世界だった。壁が壁である事をやめ、境界を無くし、無限を創り出していた。どこまでも続いている。このバーは、世界中

のどこまでにも《繋がっている》。

無限の中心に、阿東と男が座っていた。そこだけが、ギリギリでバーと呼べる空間だった。

「あいつですよ！俺の同級生！」

桜井が叫んだ。言われなくとも解っている。

俺は銃口を阿東の背に向けた。男も気付いてはいない。男は何故か泣いていた。

この男が、俺の中に入り込んで、晴雨を殺させたのか？

何でもいい。もう、全てはどうでもよかった。俺は晴雨を殺した。晴雨を超えた。目的を果たした。

後は、殺し屋として残りの人生を生きるのみ。

「いろいろ、世話になったな。阿東」

俺は呟いた。桜井が怪訝そうに俺を見る。聞こえている筈はない。それでも、呟く事に意味がないとは思わなかった。

この程度の私情を仕事に運ぶ権利は、俺にも、阿東にもあるはずだ。

「じゃあな」

撃った。阿東が倒れていくのが見えた。

男が阿東に駆け寄った。撃った。男の胸から血が噴き出す。

それは錯覚かもしれない。あるいは、世界が具体性を失っている事が起因しているのかもしれない。

男の血は、昨夜阿東と一緒に飲んだ、白ワインの色をしていた。

阿東と男は死んだ。

急速に世界が具体性を取り戻していく。壁が復活して境界を創り出し、続いてカウンターが、マスターが、他の客が現れ始める。

俺と桜井はバーを出た。出る間際、振り返って阿東と男の死体を見る。

死体は消えていた。まるで、そこにはそもそも初めから、誰も存在していなかったとでもいうように。

街が、元通りになっていた。建物が建物として機能し、煌びやかなネオンが俺達を照らした。深夜にも関わらず、歌舞伎町は人混みで溢れている。あれほど嫌っていた人混みが、今日においては心地良くさえ感じられた。

「終わりましたね」

桜井が言った。伸びをしていた。

「ああ。終わったな」

「これからどうするんですか？」

桜井の問い。俺は笑った。すべき事など、決まっている。

「帰って寝るさ。こんなに長い一日は初めてだった」

「送りますよ」

「断るね。お前に住所を知られるのはゾツとする」

「人聞き悪い事言わないでくださいよ」

「事実なんだから、仕方ないだろう？」

俺と桜井は目を合わせて笑い合った。いつかこいつと殺し合う日がくる。お互いそれを解つていても、笑わずにはいられなかった。

「今度、一杯やるか」

俺は提案した。いずれ殺し合う奴と酒を酌み交わすのも、それはそれで悪くないように思えた。

「貝原さんのおごりですよね？」

調子に乗る桜井。かわいらしいなどとは思えないが、今は許してやる事にしよう。こいつは、俺が合格させた初めての新人。どれほど狂っていても、それは確かに事実だった。

「考えとくよ」

桜井の肩を叩いて、俺は一人、家路についた。

三十話 僕のエピローグ

意識の世界。抽象的な世界に僕はいた。死んだ。死んで僕は帰ってきた。

おかえり と誰かが言う。

ただいまと僕が言った。

君には申し訳ない事をしたと思ってるんだ と誰かが言う。

いいんだと僕は言った。

これは防衛だったんだ と誰かが言う。

いいんだと僕は言った。

また、一つになろう と誰かが言う。

もう、一つにはなれないと僕は言った。

何故だ と誰かが言う。

一つになって、また離れるのが怖いんだ。

二度と離れる事はない

それでも、僕は怖いんだ。

なら、君は何を望むんだ

永遠の消失を望む。

消えるつもりか

消してくれ。

すまなかった

いいんだ。

最後の最後で、僕は幸せを手に入れた。だから、別にいいんだ。
全ての事は、別にいいんだよ《よくないわ》。

ありがとう

さよなら。

さよなら

僕は目を閉じた。ルアちゃんが僕を睨んでいた。

《あんただけ幸せになるなんて許さない。例え、どこへ消えようと、永遠に私はあんたを呪い続ける。あんたが幸せである限り。あんたが幸せを感じている限り、私はあんたを、あんたを永遠に呪い続ける。憎み続ける》

ルアちゃんの呪詛が心地良い。

ルアちゃん、君は解っていないようだけど、僕には、それが何より幸せなんだ。そうさ。呪ってくれ。憎んでくれー。君は豚だ。豚の支配者であるゴキブリの僕を呪うんだ。僕が幸せである限り、君が僕を憎み続けるのなら、それ以上の幸福はない。

僕はもう、一人じゃないんだ。

安らぎが、すぐそこまで迫っていた。

最終話　そして、運命は巡る

メリー・マリーで今日も日課を堪能していた。あの事件から二年が経つ。

桜井とは、結局酒を酌み交わす事はなかった。あのあとすぐに、奴は姿を消した。どこからか、フリーの殺し屋を始めたという噂を聞いたが、事実とは定かではない。

抽象的な世界は、約束通り、次の日、残りの九十九億をセンターのリラックスルームに届けに来た。おかげで、センターは何とか不景気の波を乗り切った。奴もまた、それ以来俺の前に姿を現す事はなかった。それでいい。それが正常であるという事だ。

阿東。彼女の痕跡は、この世界から消されていた。彼女が生きていたという事実も、彼女に関わっていた人間達の記憶も。彼女を覚えているのは、俺と桜井だけだ。

せめて、覚えておこうと俺は思う。俺はこれから先、誰かを愛するという事はないだろう。俺が阿東を愛していたかどうかは、結局のところ曖昧だったが、少なくとも、阿東は俺が腹を割って話せる唯一の人間だった。それが餓^{はなむけ}になるかは別としても、忘れられる程、阿東の存在は俺の中で小さくはない。

《神という概念に一番近い存在》。事件後、奴のマンションから二つの死体が発見された。前代未聞の猟奇殺人として、一時期マスコミを賑わせたが、今じゃほとんどの奴が覚えていない。

そんなものだと思ふ。世界から消されようと消されまいと、

記憶というのは勝手に風化していくものだ。何が奴を狂わせたのか、結局解らず終いだっただが、今更、俺にも興味はなかった。

俺は相変わらず、人を殺して飯を食っている。それしか出来ないし、する事もない。

それでいい、と俺は思っていた。

この日常が永遠に続けば、それが俺にとっての幸せなのだ。

他に必要なのは、メリー・マリーのアイステイーと、窓から見える日常風景の抽象画だけだ。それさえあれば、後は何もいらぬ。年を食って死ぬだけだ。

「お待たせしました」

ウエイトレスがアイステイーを運んできた。

ウエイトレス「晴雨が殺したいと言っていたウエイトレスだった。やはり、あの日はたまたま休んでいただけだった。

礼を言つて、アイステイーを受け取った。

煙草に火を点け、吸う。美味かった。

カランカランと、扉が開く音がする。続いていらっしやいませというウエイトレスの声――。

誰かが店に入ってきた。この時間に、俺以外の客は珍しい。

「もしかして、貝原さんじゃないですか？」

座ったまま振り返る――桜井だった。

「懐かしいですね。何年ぶりですか？」

桜井――以前より、胸が厚くなっていた。体中の筋肉が発達しているのがダークスーツの上からでも判る。何よりも、殺気が比べものにならないほど洗練されていた。

窓から外を眺めた。日常風景――また変わろうとしている。

「偶然、仕事帰りに通ったら、貝原さんがいるんで驚いちゃいましたよ」

桜井の顔――あの頃と同じ。楽しそうだった。

そろそろ、殺し合いませんか――。

桜井はそう思っている。殺気が、何よりそれを証明していた。

偶然？

嘘に決まっていた。

「桜井。一つ覚えておけ」

俺は首だけで再び振り返り、桜井に笑いかけた。

「俺は偶然とコーヒ―が嫌いなんだ」

最終話　そして、運命は巡る（後書き）

最後まで読んで頂きまして、誠にありがとうございました！なんだか、ヘンテコな物語でしたが、読者様の暇潰しに一ミクロン程でも役に立っていたとしたら、本当に本気で嬉しいです。

前書きにあるように、本作品は一年前に書いた小説を、少しいじったものです。表現を変えたり、くどいところを省いたり。それでも大分くどくなってしまったので、まだまだ全然精進しなければならぬなと痛感致しました。

この作品は、もともとは宗教上の神という存在の矛盾というテーマを隠喩として込めたいと思い、書き始めたのですが、最終的には神がかった変態と殺し屋の話になってしまいました。それでも、このサイトに公表の場を頂けて、とても感謝しています。

最後にもう一度、この作品に付き合っ頂けた読者の皆様。本当にありがとうございました！これに懲りず？に、次の作品も覗いて頂けたら、この上なく幸福です。

太郎鉄

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8915a/>

全知無能～Zenchî・Muno～

2010年10月15日01時10分発行